日本キリスト改革派教会　大会教育委員会

教会学校教案誌

church school curriculum

Church School Curriculum Since 2001

vol.66
2017年7~9月
「救済史」に基づく一年サイクル

【巻頭説教】「来て、見なさい」…… 小沢寿輔
信仰生活４０年を振り返って －青少年伝道を中心に－ …… 宮之原弘
聖書深読のこと－黙想・傾聴・分かち合い …… 伊藤治郎
神様とのつながり …… 保田広輝
【日曜学校・教会学校訪問】神港教会聖書学校のご紹介 …… 高島　潤

2017年7～9月カリキュラム（第66号）

―救済史に基づく一年サイクルカリキュラム―

月　日 教会暦・行事	主　　題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7月2日	バベルの塔	創世記11：1－9	コリントー10：31
	自らを神とする人の罪の悲惨と、それをさばき、人の罪を抑制される神を知ろう		
7月9日	アブラハムの召命	創世記12：1－9	創世記12：4a
	神の選びと召しに従ったアブラハム。神に召されて歩む幸いを知ろう		
7月16日	アブラハムの約束	創世記15：1－21	ヨハネ3：16
	神の約束を信頼して生きたアブラハム。約束に基づいて生きる生き方を知ろう		
7月23日	イサクの誕生	創世記21：1－8	ローマ9：8
	神の約束と憐れみの中でイサク（笑い）が与えられた。神の祝福を知ろう		
7月30日	イサクを献げる	創世記22：1－19	ヘブライ12：5, 6
	アブラハムの信仰の姿を学び、備えておられる神の恵みを知ろう		
8月6日	ヤコブとエサウ	創世記27：1－40	ヘブライ12：14
	人の企みを超えて神がみわざを成し遂げておられる。神をほめたたえよう		
8月13日	売られたヨセフ	創世記37：1－36	コリントニ1：20
	ヨセフ物語をとおして、神の歴史支配を確信する信仰、摂理の信仰に立とう		
8月20日	総理大臣になったヨセフ	創世記41：1－44	創世記39：2
	苦難の中でも主が共にいてくださる。主が共にいてくださる幸いを知ろう		
8月27日	摂理の主の勝利	創世記50：15－21	創世記50：20
	人の悪を善へと造りかえる主のみわざを学び、摂理の主を信じる信仰を養おう		
9月3日	モーセの誕生	出エジプト 1：22－2：10	ローマ8：28
	主なる神の不思議な導きをとおして、歴史を支配しておられる主を仰ごう		
9月10日	モーセの召命	出エジプト 3：1－22	マラキ3：6a
	契約に真実である神が救いの土台である。わたしたちも真実に神に応えよう		
9月17日	十の災いと過ぎ越し	出エジプト 7：8－24	出エジプト7：5
	十の災いのみわざをとおして、ご自身の民を贖い出す神をおそれ、あがめよう		
9月24日	葦の海を渡る	出エジプト14章	出エジプト14：14
	神ご自身がたたかって、勝利された。神の大きなみわざをほめたたえよう		

日本キリスト改革派教会大会教育委員会　2017年7・8・9月号
教会学校教案誌　第66号

もくじ

2017年7・8・9月カリキュラム
まえがき……吉田　崇……4
巻頭説教……小澤　寿輔……5
日曜学校・教会学校訪問
　神港教会聖書学校の紹介……高島　潤……9
信仰生活40年を振り返って
　―青少年伝道を中心に―……宮之原　弘……13
聖書深読のこと
　―黙想・傾聴・分かち合い……伊藤　治郎……17
神様とのつながり……保田　広輝……21

聖書黙想・説教展開例・分級展開例……25
　7月 2日……26
　7月 9日……33
　7月16日……40
　7月23日……47
　7月30日……54
　8月 6日……61
　8月13日……68
　8月20日……75
　8月27日……82
　9月 3日……89
　9月10日……96
　9月17日……103
　9月24日……110

2017年10・11・12月カリキュラム……117
2017年度年間カリキュラム……118
「子どもと親のカテキズム」案内……120
教案誌自由募金案内……121
執筆者よりひとこと・あとがき……122

まえがき

途上にある教会の、途上にある教案誌

吉田　崇（坂出飯山教会）

私は昨年10月の定期大会で大会教育委員に任命され、この教案誌の編集部にも加わることになりました。そして原稿依頼・受け取りを担当する、いわば「編集部と執筆者との橋渡し役」を務めることになりました。よろしくお願いいたします。

日本キリスト改革派教会は自らの教会史を「途上にある教会」と題して編纂しました。そして昨年出た続編にも「途上にある教会2」と付けました。「日本キリスト改革派教会は途上にある教会」との自己認識が定着しつつあると受け止めています。この途上にある教会が行なう教案誌の事業もまた途上にあり、完成を目指しつつ試行錯誤しています。中部中会教育委員会のもと「日曜学校教案誌」と銘打っていた最初の頃から比べるなら、様々な変化が生じています。「こどもカテキズム」から「子どもと親のカテキズム」への刷新という形で結実したものもあれば、中断や頓挫を余儀なくされているものもあります。昨年は編集主担当がダウンした際のリカバリーに手間取り、発行遅延を生じてご迷惑をおかけしました。再発防止に向けた体制の改善も課題となっています。

そうした道半ばの教案誌事業について協議する中で、教案誌の新たな活用方法とも言えることがおぼろげながら浮かびつつあるのでは、という個人的な思いがあります。定期的に刊行しているこの教案誌に（子ども向けにとどまらず成人信徒向けも含め）教育的なテーマの文章を連載して少しずつ書きため、まとめていく、というものです。大会教育委員会は、大会執事活動委員会の「コイノニア」、大会宣教と社会問題に関する委員会の「宣教と社会ニュース」などに相当する定期刊行物を出してこなかったかと思います。なので定期刊行物に教育委員会が手がけるものの途中経過を載せることもありませんでした（定期大会の委員会報告に途中経過をお示しすることはあったかと思いますが、信徒の皆様にはわかりにくかったかもしれません）。ですから「信徒の手引き　改定版」についても、「リジョイス」誌（大会教育機関誌委員会発行）の概要紹介の連載で初めて知られたという方も少なくなかったのではないでしょうか。

人間は全能の神ではなく、一足飛びに完成形に到達することはできません。ゆっくりではあっても一歩一歩を着実に刻み、読者の皆様の反応もいただきつつ、完成形にまで磨き上げてゆくということを、この教案誌を舞台に展開してゆければ、と考えています。教会学校教案誌のため、更なるご支援、ご加祷をよろしくお願い申し上げます。

巻頭説教

来て、見なさい（ヨハネによる福音書1章43～49節）

小澤寿輔（高知教会牧師）

はじめに

教会学校は、信仰の教育を目的とする働きであり、活動としては、礼拝、教育、交わり、献金、祈り、奉仕などがあります。契約の子たちの教育の場として教会学校が重要な役割を果たしていることはもちろんですが、未信者家庭の子どもたちに福音を伝える上でも、教会学校の活動には大きな意味があることは、言うまでもありません。そこで鍵となるのは、いかにして世の価値観の中で育ち、聖書の知識を持たない未信者家庭の子どもたちを教会学校に結び付けるか、という伝道的要素であると思います。色々な考え方があるのだろうと思いますが、今回は、ヨハネによる福音書1章43節から51節に聴き、フィリポの伝道と、そこに働く主イエスの御業について、ご一緒に学びたいと思います。

1. 決め手は主イエスの召し（43節）

まず、何と言っても決め手は主イエス・キリストの召しにある、ということです。43節には、**「その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会って、『わたしに従いなさい』と言われた」**とあります。フィリポがどのようにして主イエスと出会ったのか、詳しくは記されていません。村の友達から誘われたのか、たまたま出会ったのかは分かりません。けれども、フィリポがキリストの弟子になった決め手は、主イエスが**「わたしに従いなさい」**という言葉によって召されたことにありました。主イエスは、同じヨハネによる福音書の後の方で、次のように語られました。**「わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる」**(6:44)。主イエスの弟子になることは、決して人間的な自分の決断でできることではなく、父なる神に引き寄せられ、キリストに召されて初めてできることなのだということが分かります。キリスト者となるその道のりは人によって様々ですが、すべての人は父なる神が**「寄せてくださらなければ」**、また、主イエスが「わたしに従いなさい」と召してくださらなければ、主イエスの弟子になることはできないのです。私たちは、教会学校という具体的な働きの中で、様々な奉仕を委ねられています。物理的に何をどうするか、という教師間の話し合いや手を動かす奉仕は大切ですが、何よりもまず、主イエスの主権を認め、主イエスに招かれて集められる子どもたち一人一人のために心を尽くして祈ることから始めたいと思います。

2. フィリポの伝道（45～46節）

次に、フィリポの伝道の仕方について見ていきたいと思います。

第一に、教会に誘う人を祈り求め、その示された相手に主イエスを紹介するという姿勢が大事です。45節に、**「フィリポはナタナエルに出会って言った。『わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ』」**とあります。フィリポは、主イエスに直接招かれ、そして従いました。それからどのくらいの日数がたったのか分かりませんが、彼は、主イエスの話を聞いているうちに主イエスが救い主（メシア）であることに気づいたのです。この方こそ、**「モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方」**であると悟ったのです。「自分はたまたまこの方に声をかけられてお従いして

いるけど、これはなんと素晴らしい恵みなのだろう！」彼はそのように感激したことでしょう。次に彼はナタナエルのことを思い出したのでしょう。45節には、**「フィリポはナタナエルに出会って言った」**とありますが、この**「出会って」**という言葉は「たまたま出会って」という意味ではありません。「探して見つけ出して」という意味です。ですから、フィリポは、道を歩いていたらたまたまナタナエルに出会ったので彼に話しかけたのではなくて、「ナタナエルにこのことを伝えたい、ナタナエルに主イエスを知ってもらいたい、ナタナエルこそ主イエスに会うべきだ」という使命と情熱を持って彼を探したのでしょう。そして、やっと見つけて彼に言います。**「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」**「モーセと預言者」とか「律法と預言者」とは、ユダヤ人が旧約聖書を呼ぶときに使った表現です。ですから、フィリポがここでナタナエルに言ったことは、「わたしたちは、旧約聖書全体に書かれている主人公、来られるべきメシア、イスラエルの民がずっと待ち望んでいた救い主に会ったのだよ。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスなのだよ」、ということになります。

ここに、一つの大切なことが示されています。確かに人がキリスト者となる道は千差万別です。どのようにしてキリスト者となったのかの「証」を聞くと、その経緯は人それぞれです。しかし、聖書全体の言っていることは、イエス・キリストこそが約束された救い主であるということ、そしてすべて信仰に入った人は、どの人の場合においてもイエス・キリストを通って信仰に入るということです。この聖書の知識においては、千差万別であっては良くないのです。フィリポは、旧約聖書全体が指してきたその方を**「出会った」**と言って感激しています。今日の信仰者である私たちも、この方の人格を、聖書を通して知ったのです。そして、私たちの周囲の人たちも、その方を知ることが必要なのです。

第二に、神学論争するのではなく、**「来て、見なさい」**と教会に誘う姿勢が大切です。45節のフィリポの言葉に対してナタナエルは、**「ナザレから何か良いものが出るだろうか」**（46節）と反論しました。それは、偏見のある言い方ですが、私たちが伝道する際にもよく見られる反応です。そこでフィリポは、議論好きで否定的なナタナエルに対して、討論を始めたかといいますと、そうではありませんでした。彼は、ただ**「来て、見なさい」**と言ったのです。これこそ、最上の伝道法ではないでしょうか。

聖書は、イエス・キリストという一人の偉大な「人格」を指しています。「人格」の問題に関しては、もう**「見て」**もらうしかありません。例えば、誰かにお見合いの相手を紹介する際に、その相手の学歴や職歴や性格などをいくら口で説明しても、十分には分かってはもらえません。これは、実際に会ってもらうしかないのです。もしそれが哲学や科学の内容であれば、議論して伝えることができますし、上手く説明すれば相手に納得してもらうこともできるでしょう。しかし、「人柄」とか「人格」というものは、会ってみなければどうにもならないのです。

私たちの周りには、聖書のお話を少しは聞いたことがあっても、「そこから何か良いものが出るだろうか」という偏見を持った人がいます。あるいは、食わず嫌いの人が沢山います。「うちは仏教（神道）なので間に合っています」とか、「まだ何も困っていないから結構です」とか、様々な理由でイエス・キリストに興味を持たない人が大勢います。食わず嫌いの人を直すには、それを食べてもらうしかありません。同様に、イエス・キリストを知ってもらうためにも、議論してくる人に議論で応えることは得策ではありません。ただ、**「来て、見なさい」**と言うのが一番良いのだろうと思います。

ナタナエルは、フィリポの言葉を聞いて反論

しました。主イエスのことを伝えたフィリポにも、それを聞いたナタナエルにも、当時、どちらにも知識に欠けがありました。主イエスは、育ちはナザレですが、ダビデの町ベツレヘムで生まれたダビデの子でもあられます。そうした主イエスの大切な素性についての知識を、フィリポはまだ持っていませんでした。彼は主イエスに会ったばかりですから、知らなくても無理はありません。こういう知識の不足がありましたので、彼はナタナエルと議論をすることをせず、ただ**「来て、見なさい」**としか言えなかったのかもしれません。しかし、この姿勢は、今日の私たち教会員にも適用できるのではないでしょうか。礼拝は、心を静めて祈り、喜びのうちに讃美歌を歌い、厳かさの中で聖書の言葉と説教を聞き、心にいのちと豊かな恵みを受ける祝福の時間です。また、教会学校ではすべての子どもたちを神が造られた大切な一人ひとりとして受け入れ、愛し、神の素晴らしい愛を伝えることを願いつつ、楽しく子どもの礼拝を捧げます。そして、御言葉の語られる礼拝を通して、集まる人たちの愛の交わりを通して、人はキリストのご人格に触れ、キリストに出会います。偏見を打ち破るには、そのような証拠を見せるのが一番です。中には、「聖書の教えのあらゆることを神学的に説明できなければならない」という方もあるでしょう。それも大事です。しかし、そういう神学的な議論によって未信者を論破できたとしても、そこから信頼関係は生まれませんし、教会に足を運んでみようという興味も湧きません。ですから、複雑な神学論争はせず、「教会にいらして、一度イエスに会ってみませんか。そうすれば分かります」とそのように言って、まずは教会に来てもらうことが伝道の第一歩なのではないでしょうか。

けれども、主イエスのことを誰かに紹介するときには勇気が必要です。辱めを受けることもあります。相手がどのような反応をするのかを考えると、緊張もしますし不安にもなります。そうすると、相手が怖くなり大胆に語ることができなくなってしまいます。フィリポのように友を誘えるようになるためには、まず、自分自身が主イエスのもとに来て、自分自身が主イエスと出会って、自分自身が主イエスの素晴らしさを味わって、その素晴らしさがその人の中に生き生きと溢れていなければなりません。それがなければ、食わず嫌いの人に**「来て、見なさい」**、「とにかく素晴らしいのだから」と言っても分かってもらえないのではないでしょうか。私たち自身が、「来て、見て、本当に素晴らしかった」という感激を持っている場合に限り、他人を説得し、来て見させることができるのです。**「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った」**(45節)と言っているフィリポの感激と喜びの中に、説得力があったのではないかと思います。

3. 主イエスご自身が信仰を与えられる (47～49節)

ところで、主イエスはどのようにして、ナタナエルに信仰を与えられたのでしょうか。47節には、**「イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。『見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない』」**とあります。ナタナエルは、まだ不完全な知識しか持たないフィリポに導かれて主イエスのもとに行きました。そのとき、ナタナエルがご自身のもとに連れて来られるのを見て、ナタナエルのことを**「まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない」**と主イエスは言われました。これは、なんと心温まる素晴らしい迎え方ではないでしょうか。当時、ナタナエルは、聖書の知識を多くは持っていませんでしたが、主イエスは、そのような不足を取り上げないで、むしろ良いところを取り上げられました。ここに主イエスの懐の大きさを感じます。

これと同じことが教会学校にも言えるのではないかと思います。未信者家庭からの子どもた

ちは、礼拝中にじっと静かにしていることができないことがあります。聖書の話はちんぷんかんぷんです。お祈りの仕方も知りません。教会の子どもたちなら決してしないような世俗的なことを口にしたり行ったりすることもあります。そういった聖書の知識がない子どもたち、教会のしきたりに慣れていなくて秩序を乱しかねない子どもたちが来ても、そういうことは問題にしないで、ありのままを受け入れ、むしろその子たちの良いところを見つけて認めることが、キリストの愛で包むことになるのではないでしょうか。

最後に、ナタナエルは、自分が神に知られていることを主イエスによって知らされました。48節、49節**「(48) ナタナエルが、『どうしてわたしを知っておられるのですか』と言うと、イエスは答えて、『わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た』と言われた。(49) ナタナエルは答えた。『ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です』」**。

驚きを込めて、**「どうしてわたしを知っておられるのですか」**と聞くナタナエルに、主イエスは**「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」**と言われました。これは、一見、何の変哲もない言葉のように見えるかもしれませんが、実に深みのある言葉です。「フィリポがあなたを呼ぶ前に、誰もあなたの所に来ないときに、あなたを見下ろしているものがいちじくの木しかなかったその時に、わたしはあなたを見た」ということを意味します。ナタナエルはそれを聞いて、さらに驚いたことでしょう。誰も訪ねて来ないとき、いちじくの木の下で自分一人だと思っていたその私を見て知っておられた方がいる、というのです。この人間の力をはるかに越えた神の知恵の前に、ナタナエルはいっぺんに偏見を取り除かれました。そして、**「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」**と信仰を告白したのでした。

私たちがキリストを信じて告白できるのも、私たちがこのような意味でキリストに知られていたということに気づく時ではないでしょうか。使徒パウロは、**「ところで、あなたがたはかつて、神を知らずに、もともと神でない神々に奴隷として仕えていました。しかし、今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに……」**(ガラテヤ4:8,9)と言っています。私がまだ、まことの神、イエス・キリストの父なる神を知らないときに、そして誰かが誘ってくれる前から、イエス・キリストが私を見て知っていてくださっている。この事実を知ったとき、私たちも**「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」**と言い表すことができるのだと思います。

終わりに

ナタナエルは、フィリポが言う「**来て、見なさい**」という勧めに導かれて主イエスの御許に来ることができました。そして連れて来られた先で、主イエスと出会い、主イエスを信じることができました。

「来て、見なさい。」

私たちも、フィリポがしたように、喜びに溢れる信仰生活の中で、声をかける子どもたちを求めてまず主に祈り、示される友に、近隣の子どもたちに教会に来て見ることを勧めてみたいと思います。そして、主イエスが召してくださる子どもたちが教会学校に集まり、御言葉によって目が開かれて信仰を告白し、教会の中で成長していく、そのような御業を体験し、ともに主の栄光を仰ぎ見る者とされたいと願います。

日曜学校・教会学校訪問

神港教会聖書学校の紹介

神港教会聖書学校校長　高島　潤

1. 神港教会の近況と信仰教育体制

2006年に創立100周年を迎えた神港教会は、今年「出て行き、祝福の源となれ」（創世記12：1〜3）を年の標語に掲げ、112年目の歩みを始めました。神港教会の信仰教育（教会教育）に関する体制は、聖書学校（小学生以下）、ジュニア礼拝（中・高校生）、成人科、聖書の学びと交わりの会、諸準備会並びに求道者会から成っています。ここでは聖書学校と一部ジュニア礼拝に付いてご紹介します。

戦前から日曜学校として続けられてきた子どもたちへの教会教育は、戦争のために一時中断した後、改革派教会への加入時期と相前後して、田中剛二牧師の時代に名称を聖書学校と変え現在に至っています。これは敗戦後のいわゆる日曜（教会）学校運動と区別された、純粋に、正しく聖書の真理のみを語る場であるべきとの強い思いからそう呼んできたものです。

当初は、幼稚科から中学生までが一緒に礼拝を守り、高校生のみが別に分級の時を持ちその後大人の礼拝に出席するという形をとっていましたが、安田吉三郎牧師によってジュニア礼拝が始められてからは、聖書学校は小学生以下の子どもが対象となり、中高生をジュニアと呼ぶようになりました。

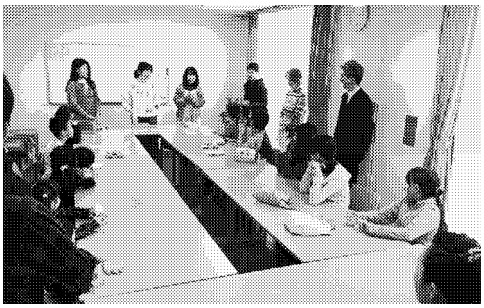
色々なところで言われるようになって久しい少子化に加え、社会全体の宗教に対する不信感、教会外で提供される塾や習い事、楽しいプログラム等々は教勢を回復させることなく、毎週の聖書学校の礼拝出席生徒の平均は10数名のままですし、ジュニア礼拝に至っては10名を割っているのが現状です。しかしそのような状況の中でも、神さまは私たちに違う形で恵みを与え支えて下さっています。聖書学校に該当する年齢の契約の子は現在全員が漏れることなく聖書学校につながっていますし、近隣の未信者の家庭から中心メンバーとして通ってくる子どもたちも複数与えられています。また今年のイースターには、中学校へ進学する前にクリスチャンになっておきたいと小学生の間に準備会を始め、信仰告白をした生徒が与えられました。ジュニアでは、一昨年、聖書学校から育った二人の生徒が、一人は成人洗礼、一人は信仰告白へと導かれ本当に大きな喜びに包まれました。さらに小学校2年生から来始めて、礼拝はともかく（？）イベント全出席のこの春高校生になった地域からの生徒がいますし、新学期にミッションスクールから紹介されて出席した生徒がそのまま根付いているというケースもあり、一つ一つのことが大きな励ましとなっています。

2. 礼拝、分級と教師会

聖書学校では、毎主日礼拝を9時15分から30分間行い、その後分級に分かれます。礼拝のお話は、第一週を校長、第二週を山中協力牧師、第三週を岩崎牧師が担当し、第四・五週は他の全教師がローテーションを組んで順に担当しています。中部中会の教育委員会が教案誌を発刊してくださってからは、第1号からこの教案を用いてカリキュラムを進めています。毎月第三主日に開かれる聖書学校教師会に、次月度の礼拝の担当者はお話し準備案を提出し、教師全員で批評し合い、学びを深め礼拝と分級の準備をします。教師会では教案の学び、行事の準備と共に、各クラス報告を通して一人一人の生徒の状況について話し合い、祈りの課題を共有しま

す。

分級は、小学校入学前の未就学児童がＡクラス、1年生～3年生までがＢクラス、4年生～6年生までがＣクラスの3つです。分級では礼拝のお話をそれぞれの年齢に応じて学びなおします。Ａクラスは現在、幼児と園児が半々くらいであるため、教師も毎回の出席者のバランスに苦労しながらお話を出来るだけわかりやすくし、その後、絵本を読んだり、ぬりえや折り紙をしたりして楽しい時を過ごしています。第一主日はクラス毎ではなく、合同分級としてお誕生日月の子どもをお祝いし、その後みんなでゲームをしたり、クイズをしたりして楽しい時を持ちます。時には上級生がゲームの指導をしたり、ジュニアのお姉さんお兄さんが来てくれたりすることもあります。



合同分級

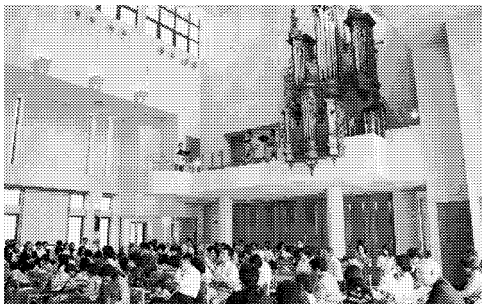
ジュニア礼拝は、9時15分から10時まで行われます。説教は山中協力牧師が中心となり、月に一度は岩崎牧師が担当しますが、第四主日はジュニアの生徒が公同礼拝に合流し、大人と一緒に礼拝を守っています。また､礼拝とは別に、諸団体としての中高生会がジュニアの生徒のためにあり、こちらでは月に一度昼食を共にしながら話し合いの時を持ったり、親睦を図ったりしています。

尚、聖書学校からジュニアに進級する生徒には、次週からのジュニア礼拝に遅れないよう、自分で起きて出席できるようにと、毎年聖書学校から目覚まし時計を贈ることが恒例となっています。今年は前述の生徒を含め、男女各1名を送り出しました。

3. 年間行事

私たちの聖書学校では、近隣の子どもたちへの伝道のため、今までに様々なイベントを計画し実行してきました。イースター、進級式、夏期学校、クリスマスの間に、ほぼ2カ月に一度の割合で伝道行事として、おもちつき大会、ハイキング、親のための講演会等々をはさんできました。しかし、イベントに集まる子どもたちも、結局は主日の礼拝にはつながらず、イベントへの参加者自体の数そのものが減ってきたことから、最近ではイベントの数を減らし、質を高めるにはどうすれば良いかと考えています。

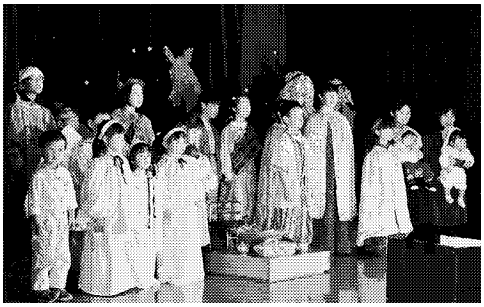
神港教会には、音楽関係の多彩なプロが多くおられることから、聖書学校では2年に一度「親子コンサート」を開催しています。担当してくださる方々の献身的なお働きにより、プログラム、企画、親しみやすさ、質ともに最上レベルの子どものためのコンサートとなっており、ここには毎回大人・子ども合わせて100名以上の方が集められます。



親子コンサート

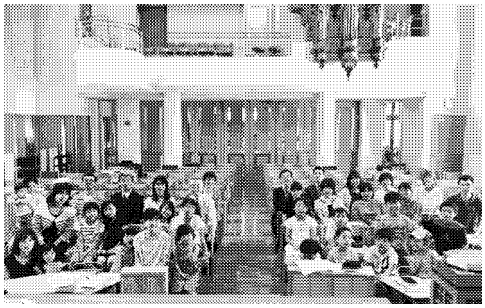
また一方では、教会に集まる子どもの数がなかなか増えないことに痛みを覚えつつも、私たちは子どもへの伝道は聖書学校だけの問題ではなく、教会全体の課題であるとの認識から、クリスマスなどの大きな行事の時には、教会員に協力を訴えます。そのことにより、祈りによって支えてくださるだけではなく、多くの教会員の方が子どもの集会に参加してくださり、それ

が生徒や教師にとってどれほど大きな力になることかをひしひしと感じています。特にクリスマスには、毎年子どもたちは一月以上前から準備を始め、幼子からジュニア、教師までが一緒になって伝統的な聖誕劇を上演しますが、それが上手だったとか、素晴らしかったよとか言うことに過ぎず、子どもたちが準備を通してイエスさまのご降誕の意味を覚えると共に、教会全体が、子どもたちと共にクリスマスの祝福の内に置かれることを実感しています。昨年の聖書学校のクリスマス感謝礼拝と祝会は113名もの出席者と共に喜びに与ることが出来ました。



クリスマス聖誕劇

サマースクール（夏期学校）も悩みの一つです。神港教会では、長い間神港教会独自で行うサマースクールは地域の子どもたちへの伝道のため、中会の合同夏期学校は契約の子の信仰教育のためと位置づけ、住み分けをしてきました。ところが、ここ数年は子どもたちの夏のスケジュールが忙しくなったこともあり、小学生といえどもひと夏に二つの夏期学校に参加するのが難しくなり、サマースクールへの出席者が極端に少なくなってきました。一方、教師の側も学生がいないため土・日以外の限られた期間に休暇を取って奉仕するのが厳しい状況にあり、十分な日程が取れなくなっています。そのような訳で、今年からは夏は合同夏期学校に集中し、聖書学校の行事は冬に変更し、スキーツアー等を新たに計画する案も出ています。ただ、サマースクールの際には、年に一度、公同礼拝を「親子礼拝」として大人と子どもが一緒に守ることが恒例になっていましたから、それだけは変えずに続けていく予定です。



サマースクール

聖書学校の行事には、教会ごよみに基づくもの、伝道のための企画等がありますが、その他に教会の中の生徒同士のお楽しみ会も行っています。毎年2月には神戸市立の屋内スケートリンクに出掛けますが、この行事は年々人気が高まり、今年は子どもたちがそれぞれに友人を誘ってきたこともあり、全部で30数名が集まり、始めて団体料金で入場することが出来ました。

お楽しみ会（スケート）

4. その他の恵み

イースターには毎年色々な方法でイースターエッグを作って主の御復活をお祝いしますが、それとは別に、大人の礼拝では子どもたちが可愛いイースターのご挨拶をし、礼拝後にイースターエッグを配ります。皆さんとても喜んで受け取ってくださいます。

今年は神港教会にパイプオルガンが奉献されてちょうど15周年を迎えますが、数名の聖書学校生徒はこの大オルガンを使って奏楽の手ほ

どきを受け、既に聖書学校の礼拝で奏楽の奉仕をしています。ジュニアに進級すると小礼拝室の小オルガンを使い定期的な奉仕に加わってくれることと思いますし、将来のオーガニストとして信仰的にも技術的にも成長してくれることを願っています。

毎年秋（11月3日）に行われていた教会行事の全員親睦会が、今年は西部中会創立70周年記念信徒大会のため開けませんので、4月29日に日程を変更して「春のお楽しみ会」として持ちます。ジュニアの生徒が作ってくれた素適なチラシを配り、地域の子どもたちがたくさん教会に来てくれることを望んでいます。

信仰生活40年を振り返って
―青少年伝道を中心に―

宮之原　弘（多治見教会長老）

はじめに

去る3月27～28日那加教会において中部中会中高生春の修養会が行われ、生徒13名、スタッフ14名（うち学生会から9名）が参加しました。昨年の修養会（於すいとぴあ江南）でも、学生スタッフの参加はありましたが、その時の反省を踏まえ、今回はほぼ学生スタッフのアイディアとリードによるものでした。参加した生徒の変化（成長）もさることながら、学生スタッフの熱意と活気に私も元気をいただこうと期待し参加しました。

私は高校1年の時に受洗して今年で信仰生活40年になりますが、最近当初の伝道の情熱はどこにいってしまったのかと思う時があります。学生スタッフの活発な奉仕を見ながら、これまでの青少年伝道の色々な思い出が去来しました。そのような中、修養会が終わり帰宅して、たまたま昨年の教案誌を開いたところ、山口翔兄の「青年の声」（vol.60,p.18）が目に留まりました。書かれた内容に大変共感し、僭越ながら所感と心に残る思い出を証し、私自身もう一度日曜学校や青少年伝道の初心に戻れたらと願います。

信仰の継承

聖書にテモテの信仰は祖母ロイスと母エウニケを通して宿ったものであると書かれています（Ⅱテモテ1:15）。修養会に参加した学生スタッフも2世代であり、親から信仰を継承した人たちです。中には3世代の学生もいるかもしれません。私の場合両親は未信者ですが、祖母が熱心な信徒でした。祖父は伝道者であったと聞いています。幼い頃、両親は共働きをしていたため、祖母と二人で過ごす時期がありました。祖母の膝に抱かれ、聖書の話を聞き、一緒に讃美し祈った温もり、またいさかいの多かった両親のために泣きながら祈っていた祖母の姿は忘れられません。その大好きだった祖母が高校1年の9月に昇天し、翌週の日曜日に何のためらいもなく一人で最寄りの教会に出かけ、信仰生活は始まりました。ものすごい雷雨の朝でした。1977年のクリスマスに受洗し、その時の信仰告白の原稿は今も大切に保管してあります。以来救いの喜びをとにかく伝えようと、色々な友人を教会に誘いました。それだけでは物足らず、高校で聖書研究会をつくり、日曜日礼拝で得た恵みを、教会に行けない友人と図書館で共有しました。手作りの「ひこばえ」という週報を発行したのも思い出です。ところが喜びも束の間、伝道に夢中になりすぎたためか学業をおろそかにしてしまい(反省！)、両親の猛反対に会って、しばらく教会に行けなくなりました。その時ラジオ放送FEBCを知り、個人的に礼拝を守ることができました。しかし、この間教会は分裂し、私も教会を出ることになりました。この悲劇のため多くの友人は教会を去り、最初の試練に直面しました。高校を卒業し、私も友人も故郷(鹿児島）を離れ、新たな信仰生活が始まりました。我々学生は毎年帰省した時には、互いに連絡を取り合い長老の自宅に集まりました。近況を報告し合い、時には涙を流しながら証し、祈り合いました。徹夜することもありました。そのおかげで、信仰は失われず、守られ少しずつ成長できたのだと思います。思えば苦しくても幸せな青年時代でした。山口翔兄は書いています。「どうか子どもたちの話をどんな時にも真剣に

聞いてあげてください。子どもたちが来たら喜んで迎え入れてください」「真剣に祈ってあげてください。そうすれば、子どもたちにとっては教会は安心して自分を出せる居心地の良い場所となり、まるでもう一つの家のような存在になると思います」(前掲、p.18)。私にとって長老の家はまさに「もう一つの家」でした。長老夫妻や集まった仲間には何でも話せました。何でも聞いてもらい、真剣に祈ってもらいました。そのおかげで信仰を失わず今の自分があるのだと思います。これは教会学校にとっても大切なことではないでしょうか。

御言葉の恵みと力

高校卒業後、私は名古屋で生活を始めました。大学でも当時の牧師と協力しながら聖書研究会をつくり、学生に伝道しました。キャンパスクルセードの仲間との交わりも楽しい思い出です。教会では本格的に日曜学校の教師を始めました。分級ではレジュメを作り共に聖書や教理を学びました。その時の取り組みや工夫が今の仕事に大いに役立っています。教案誌として長く使ったのは年に4回刊行される『成長』(CS成長センター)でした。各分級ごとにわかりやすくまとめられ、アイディアも豊富でした。当時は分級に力を入れていたので、活用しやすいものでした。その次は月刊『教会学校教案』(教団・福音主義連合)で、コンパクトにわかりやすくまとめられていますが、学びを深めるためには少々物足らない気がしました。いつだったか忘れましたが、松戸小金原教会で作られた「聖書のおしえ」(2年サイクル教案B)を入手し、活用したことがありました。質問形式の内容でわかりやすく、コピーをとってそのまま使えそうなもので、現在も手元にあります。

当時は教会に来る子どもたちは多くいました。夏のキャンプは大型バスを借りて出かける程の人数でした。クリスマスには100人近い子どもが集まり、近くの公民館を借りて行い、今ではよき思い出です。

大学では福祉を学びましたが、その後の進路を決定づける劇的な出会いがありました。近代日本を代表する社会事業家であり牧師でもあった留岡幸助との出会いです。たちまち彼に傾倒し、彼と同様非行少年や囚人の伝道に関心をもち、卒業後運よく法務省に入りました。最初に就職した少年院では当直の夜集会で聖書の話をしました。中には御言葉に触れた後、自主的にお祈りする子どももいました。15年間の勤務でしたが、どんな人間でも罪赦され救われることを目の当たりに知りました。以下は証です。毎朝愛読しているリビングライフに投稿掲載されたものですが(2014年5月号)、少々加筆し、再度掲載することをお許しください。

今から25年前のことです。当時私は刑務官をしていました。イースターも近い3月夜、当直の責任者として死刑囚の舎房を巡回していたところ、一つの部屋から明かりが漏れていました。その部屋を覗くと、死刑囚が黙々と絵を描いていました。実に見事な絵で、しばらく見とれていましたが、ピンとくるものがあり、ついに私は彼に話しかけました。「見事な絵だな。もしかしてヨハネ8章の罪深い女の絵かい?」。すると彼は驚いて振り向き、「先生はこの絵がおわかりですか」と堰を切ったように話し始めました。その死刑囚は、保険金殺人を犯して死刑判決を受け、その後弁護士からもらった聖書を読むうちに神に出会い、悔い改めたことを証してくれました。彼は言いました。「取返しのつかない罪を犯す前に、なぜ神様に出会わなかったのか、悔やまれてならない」と。そして自分が死ぬことで被害者遺族が赦してくれるなら喜んで死んでお詫びしたい、その時まではこうして聖画を描きながら謝罪したいと話し、自ら上告を取り下げ、刑が確定したのです。その時、彼が描いていた聖画は今も鮮明に私の記憶に残っています。ヨハネ8章は、姦淫の現場で捕えられた女が最後に赦される話ですが、彼が

描いたイエス像は、彼に手を差し伸べ、非常に優しい眼をしていました。おそらく彼はその絵を描きながら、女と同じように何度も何度も涙を流し、悔い改めたにちがいありません。しかし、もっと驚いたのは、明日にも刑が執行されるかもしれないのに、死と向き合いながら話す彼の表情は非常に穏やかで、むしろ輝いていたことです。彼との出会いから6年後、たまたまた見たニュース速報で、彼の死刑が執行されたことを知りました。ショックでしたが、私にはルカ福音書に書いてあるイエスが十字架につけられた光景が思い浮かびました。二人の犯罪人がイエスと一緒に十字架につけられ、一人の犯罪者はイエスを侮辱しましたが、もう一人はイエスに信仰告白をします。「あなたの御国においでになるときには、私を思い出してください」(23:42) と。その死刑囚は、イエスを信じたばかりの頃、身内の不幸や試練（姉と息子の自殺）に次々と襲われ、「イエスは自分を救ってくれなかった」と取り乱したといいます。しかし、私が対面した時の彼はたいへん落ち着いていたのです。救い主を受け入れても、彼が犯した罪の大きさゆえに、何度も、何度も苦しみながら悔い改め続け、聖化されていった結果でしょうか。彼は執行の時、天を見上げ、静かに処刑台を上っていったにちがいありません。私が在職中、命により執行者の一人にならなかったことに、神様のご配慮とお恵みを感謝せずにおれません。塀の中の閉ざされた世界にも、希望の光は確かに差し込んでいます。神の御言葉は、人間の力を超えどんな罪人も赦し、永遠の命を与える力があることを改めて知りました。だからどんな子どもたちにも神様は働いてくださり、救いに導いてくださると信じたいものです。

新たな日曜学校（多治見教会）での奉仕

2000年3月に法務省を退職し、ミッションスクールの教員になりました。正直、囚人伝道に心残りがなかったわけではありませんが、牧師に祈ってもらい決断しました。若者がかけがえのない人生を台無しにする前に、教育と伝道がいかに大切であるか痛感したからです。そして結婚を機に現在の多治見教会に転会させていただきました。母教会を含め5つ目の教会でした。多治見教会で執事となり間もなくして、日曜学校でのお話しの依頼があり、現在の教案誌を学び準備するようになりました。『カテキズム』と合わせて、編集されており、教理説教のための聖書黙想は内容が深と思います。説教展開例は完全原稿ですが、これも教えられることが多く、まずは聖書をしっかりと読み、ノートにまとめながら、お話しを構成していきます。最近はパワーポイントも使ったりします。教案誌に時々「〇〇論」「〇〇説」と難しい内容もありますが、それなりに考え悩みながら理解するのも楽しいものです。大切なことは、繰り返し読み咀嚼することだと思います。そして必要に応じて、注解書等で調べ、補足します。私はリビングライフとプラスを活用しています。とにかく、自分が内容を理解し、心打たれないと伝わらないと思います。

さて、多治見教会の建替えが決まり、日曜学校の在り方も見直す良き機会になりました。2015年6月15日から旧会堂の取り壊しのため、分級を中断し、しばらく合同礼拝だけとなりました。その間新しい日曜学校の在り方について祈り、拡大委員会を設け協議をしました。『子どもも一緒の礼拝』（鞭木由行著）をテキストにして学び、子どもも大人も一緒の礼拝を守り、礼拝後はそれぞれ分級を持ってはどうかという案にまとまりかけました。つまり、従来の子どもの礼拝は廃止し、合同礼拝にするのです。周辺の教会でも、そのようにしているところが少なくないようです。

新会堂が完成し2016年4月から日曜学校も新会堂で始まりましたが、急きょ牧師の決断で従来通りのスタイルで実施することになりました。正直、戸惑いました。新しい案では、子ど

もの礼拝のお話しはせず、若手教師（もちろん私も含め)は分級のみを予定していたためです。お話しの準備は大変です。でも苦労した分恵みも大きいものです。やはり日曜学校教師として大切な奉仕ではないかと思えるようになりました。

徐々に若い先生たちが慣れていくために、牧師と日曜学校校長という重責を担うことになった私は毎月担当し、長老には3月に1回お願いしました。1年間格闘が続きましたが、2017年3月から牧師の引退に伴い無牧教会となり、日曜学校のお話しは、全役員と日曜学校教師で担当することで負担を分かち合い、礼拝後に分級を持つ形で現在に至っています。

問題は日曜学校に出席する子どもが少ないことです。教会にはいるのですが。たまにゼロの時もあります。子どもがいないのに、お話しの準備の意味はあるのだろうかと、ついつぶやいてしまいやすいものです。そんな中、2017年2月中部中会信徒神学講座の講演で吉田隆先生がこうおっしゃいました。「現代は伝道が不振と言われるが、教会学校も子どもが少ない。しかし長い教会の歴史の中では、波がある。何をやってもだめな時こそ本質に迫ることができる。人が集まらなくても教会らしくなる。今は信じて忍耐すべき時である」と。心の目の鱗が落ちる思いでした。日曜学校も礼拝なのだ。相馬伸郎先生が言われるように、「子ども礼拝式の充実」(教案誌No.49, p.28-30）が大切なのだ。たとえ子どもがいなくても、教師や出席する人たちにとっても大切な礼拝なのだ。だからお話しや奉仕は誠実に行おう。神様は待っておられる。そのような思いに変わりました。

最近日曜学校に変化が見られるようになりました。一般信徒の中にも日曜学校の礼拝に出る人がいるのです。お話しが分かりやすいと評判も耳にするようになりました。日曜学校は子どもの礼拝ではありますが、教会学校という枠に広げれば、大人も参加してもいいし、分級も成人科（仮称）もあっていいかもしれません。まずは我々教師たちが礼拝にどのような姿勢で臨むかを神様はみておられると思えてなりません。

もう一つ始めたことがあります。日曜学校開始前の教師祈祷会です。最初は説教者と司会者でお祈りしていましたが、現在は開始15分前（9時15分）には教師と説教者が集まり、礼拝の祝福と子どもを覚えて祈るようにしています。

おわりに

とりとめのないことをだらだらと書き連ねてしまいましたが、最後に、最近仕事で特に力を入れて取り組んでいることがあります。それは学校で毎日行われる礼拝です。昨年初めて中学1年生の担任をしました。聖書やキリスト教に初めて触れる生徒がほとんどです。この子たちにどう福音を伝えたらいいだろうかと模索し今も続いています。授業として聖書の時間はあるので、礼拝のお話しとしてわかりやすく話すことに努力しています。週に10分程度の話を2回しなければいけません。日曜学校でのお話しと事情が異なることも徐々にわかってきました。もっとわかりやすい内容にするために、教案誌とリビングライフは大いに役立っています。最近ではバックナンバーを分解し、創世記から黙示録まで、お話しや解説を分類し、いつでも必要な時に活用できるようにしています。これからも、教案誌を作成される先生方には勢力的に書き続けていただきたいと願い、その尊いお働きのためにお祈りしています。

聖書深読のこと―黙想・傾聴・分かち合い

伊藤治郎（編集委員、四日市教会）

1. 聖書黙想と聖書深読

聖書深読というのは聖書を「ふかよみ」することではありません。聖書の御言葉を自分に語られていることとして、心に深くしみこませるように読む、聖書黙想の方法の一つです。聖書深読を開発されたのは、カトリックのカルメル修道会の奥村一郎神父です。奥村先生は、カトリックの信者がプロテスタントの信者に比べて聖書を身近なものにしていないという問題意識から、聖書を自分に語られているものとして読むことができるようにこの方法を考え出されたそうです。

私が、この深読を教えてもらったのはかれこれ二十年近く前のことになります。それ以来、この方法による黙想に意識的に取り組んでまいりました。それは、信仰歴の長い信徒の方のこういう一言がきっかけでした。「聖書を面白いと思って読んだことが無い」。これで良いのだろうか、そう思ったのです。聖書の御言葉はイエス様が分けて下さる命のパンだと言われています。御言葉を面白いと思ったことが無い、というのは、命のパンをおいしいと思ったことが無いということではないでしょうか。命のパンは栄養があるからおいしくなくても我慢して口にする、そんなものではないはずです。せっかくイエス様が分けて下さる命のパンが味気ないなんて、なんともったいないことでしょうか。

かつては、私も、聖書を読んでも分かるわけがないので、最初から先生の解説や注解書を読んで理解するというような読み方でした。しかし、それは「神様からの御言葉を聴いた」というよりは「聖書の解説を聞いた」ということになるのではないかと思いました。聖書の御言葉というのは、神様が私たち一人一人に対して語ってくださるものです。それを自分で聴き取ろうとすることが聖書を黙想するということです。しかし、黙想には危険があることも事実です。自分の思いを大切にし過ぎて、誤った人間的な理解に至ってしまうことです。ペトロの手紙二3章16節にはこのように記されています。「その手紙には難しく理解しにくい個所があって、無学な人や心の定まらない人は、それを聖書のほかの部分と同様に曲解し、自分の滅びを招いています」。「無学な人」というのは「学ぼうとしない人」という意味です。その点、私たち改革派教会の信徒は、しっかりした改革派神学がありますから、滅びを招く危険がありません。その意味では、改革派の信徒だからこそ聖書黙想をしやすい立場にあるのです。

何人かが共同で聖書を黙想する手段として、聖書深読というのは大変メリットがあると思います。段階を追って読み進むことで、老若男女だれでも信仰歴の長短にもかかわらず、共に黙想をすることができます。そして、解読という段階があることで、独りよがりな理解におちいらずに済みます。何より、深読を終えた後では、聖書の御言葉が自分のたましいにすとんとまさに「腑に落ちた」状態で収まるという大きな恵みがあるのです。また、仲間と共に黙想することによって、自分とは違った意見を傾聴する訓練にもなります。そして、黙想を通して御言葉についての思いを伝え合うことによって、より深い「主にある交わり」に近づいていくことができるようになると思うのです。

そして、聖書深読は問題発見型の聖書の学びです。あらかじめ与えられた質問に答えるのではなく、自らが問題を見つけ、その解決を求めて行くのです。最初から設問があって答えを教

えてもらうより問題発見型の学びの方が、時間はかかりますが、学んだことは自分の身につきやすいのだと思います。私の知り合いの大学の先生が、教育というのは生徒の中に「？」を作らせて、それを「！」に変えてやることだ、とおっしゃっていました。これはまさに、聖書深読のやり方そのものです。改革派教会の伝道は教育的伝道だと言われることがありますが、求道者と一緒に深読することは、まさに教育的伝道になると思っています。

2. 聖書深読の実際

聖書深読を実際に行う手順について簡単にお話しいたします。聖書信読は、素読、解読、色読の段階を踏んで行います。深読をするグループの人数は10人以下、5〜7人程度が適当です。もちろん、二人三人でも全く構いません。

2.1 素読――「？」を作り出す段階

・聖書を読む

聖書の御言葉を読まなければ何も始まりません。しかし、その前に、まず聖霊の導きを祈りましょう。

時間があれば、一人一人がテキストを紙に書き写します。しかし、最近は手で字を書くことが少なくなっているので、これはかなりの時間と苦痛を伴う作業になっています。私はあらかじめテキストを印刷した物を用意するようにしています。このプリントは、テキストをなるべく大きな字でゆったりと印刷するようにしています。その方が、黙想しやすいと私は感じています。聖書のコピーは字が小さすぎてよくありません。以後の黙想は、聖書を閉じてこの紙を使って行います。

まず、紙に書いたテキストを見ながら、司会者がテキストを読むのを聞きます。次に、目を閉じて司会者がテキストを読むのを聞きます。最後は、グループの全員で声を合わせてテキストを読みます。こうして繰り返しテキストを読むことで、たましいに御言葉をしみこませていきます。この時の朗読は、できだけゆっくりと行う方が良いでしょう。

・黙想して表現する

テキストの朗読を終えたら、いよいよ一人一人の黙想を始めます。この黙想に「素読表」という用紙を使います。素読表は、横にグループの人数より一つ以上多くの列を、縦にテキストの節数より二つ以上多くの行を、それぞれ持ったマスを作ったものです。素読表の一番左の列の上から二マス目からテキストの節番号を記入し、二番目の列の一番上のマスに自分の名前を書いておきます。そして、紙に記されたテキストをながめて黙想していきます。そして、思ったこと感じたことを記号化して、素読表の該当する節のマスに記入していきます。記号は○：その通りだと思う、◎：本当にそう思う、？：分からない、疑問だ、！：そういうことか、△：もう少しよく考えたい、×：これはないだろう、〜：うーん、もやもやする、などですが、自分でオリジナルの記号を作って書き入れてもかまいません。このプロセスは、自分の中に「？」を作り出す段階です。本当の「？」だけではなく、「○」も「△」も「〜」も、全部大きな意味での「？」です。

この時大事なことは、テキストに集中することです。聖書の御言葉は文脈の中で読まなければいけないと言われますが、それはここではちょっと置いておいて、テキストの文言だけに集中してください。そして、ここでするのはテキストの言葉をどう思うか感じるかを探ることであって、解釈することではない、ということが最も大切です。この段階は、間違っても何でも良いので、その時感じたこと思ったことを大切していただきたいのです。自己規制をしてはいけません。聖書に書いてあることだから、すべて間違いが無いので、全部そのとおりと受け入れなくてはならない、なんて考えなくても良いのです。たとえ、イエス様がおっしゃったことであっても、「何でこんなことおっしゃるん

だろう？」「こんな言い方はないだろう」「これって変じゃない？」そう思って良いのです。

そして、テキストの全部の節に記号を入れる必要はありません。自分にとって印象的だったところだけで構いません。いちばん良くないのは、聖書に書いてあることだからと、全部に「〇」をふってしまったり、難しいからと全部に「？」を入れてしまうことです。それは思考停止です。自分の頭で考え、自分の心で感じましょう。

そして、最後に、テキストを読んでみて一番印象に残った、あるいは心に浮かんだ言葉やイメージを、一番下のマスに単語で書き入れて下さい。これを「全」と言います。たとえば「十字架」でもいいし、「ほんわか」でもいいし、自由に書いてみて下さい。

・分かち合う

次に分かち合いに入ります。一人一人順番にどの節にどんな記号を入れたか、また、全に何を書いたかを発表して行きます。それぞれ、自分の手元にある素読表に発表した人の名前と記号、全を書き入れて行きます。複数のグループで深読をするときは、グループごとに大きな模造紙に共通の素読表を作るのも良いでしょう。素読表が完成したら、一節ごとにどうしてその記号を書き入れたかを発表してもらいます。今までイメージであったものを言語化して参加者で共有して行く時間です。この時、口を開くのは司会者と発表者だけにしてください。自分の発表の番でないところはすべて聴くことに集中してください。そして、明らかに間違った意見が出たとしても「それは違うよ」などと口をはさまないでください。そんなことをしたら、自由に思いを分かち合うことができなくなってしまいます。また、だれかの疑問に対して自分が答えを知っていたとしても、そこでは黙って聴いていてください。指導して下さる先生がいらっしゃる場合も、ここでは口をはさまないようにお願いしてください。

司会者も、みんなの発言を肯定的に受け入れるようにして、分かち合いを進めて下さい。肯定的なフォローや発言の要約を入れる「能動的な聴き方」をすると、発言しやすい雰囲気が生まれます。ここでも、ああこれは間違った理解だなとおもっても、司会者は「〇〇君、それはちがうよ、こうだよ」というようなことを言ってはいけません。あくまで、「〇〇君は、ここをこういう風に思ったんだね」というようなフォローで進めて下さい。これが傾聴の訓練にもなります。

この記号を入れることと、分かち合いの時間を持つことは、深読の特徴です。こうすると、参加者みんなが発言の機会を均等に持つことができます。何もなしに聖書を読んで「さて、みなさんどうでしたか」と感想を聞くと、やっぱり良くしゃべる人としゃべらない人が出てきてしまいます。意見や感想が無いわけではないのに、気後れして口を開けないという人もいます。しかし、深読では、普段しゃべらない人も自分が記号を付けたところについてはしゃべらなくてはいけませんし、また、だれにも邪魔されずに話すことができます。逆に、しゃべりたくて仕方ない人も、自分が記号を入れたところしか発言できません。それは、抑制することの訓練になります。

2.2 解読――「？」を「！」に変える段階

素読だけで終わってしまっては「曲解し、自分の滅びを招く」恐れが十分にあります。そのため、深読では素読の次に解読というステップを踏みます。これは、教会によって受け入れられた解釈に耳を傾けて、素読の時に自分の心に浮かんだ疑問を解明したり、さらに深く考えたり、思い違いをしていたところを正したり、受けた感銘をよりしっかりと心に刻みつける、という作業をする段階です。これは牧師先生にお願いした方が良いでしょう。

この時に、解読される方は、素読でみんなから出てきたものを意識して解説をしていただければと思います。それぞれの疑問や思いを汲み

上げながら、それに答えるようにお話ししていただければ、聴く人の心の中に御言葉がしっかりと根を下ろすことでしょう。素読で私たちの聖書理解と異なった意見が出てきていた場合は、ここで正しい理解を解説してください。ただ、「あんなことを言うのは分かっていないからで」などと、その発言をしたこと自体を否定するような言い方はしないように。発言した人が素直に聴き取れるように注意してください。深読の場では、御言葉から心に浮かんだこと、思ったことをなんでも口にできるような雰囲気を大切にしてほしいのです。また、解説を聴く方も、素読の時の感想を意識しながら聴いて下さい。それも、自分のものだけではなく、分かち合ったグループのメンバーの感想も素読表を見ながら思いだして聴くと、そこでさらに分かち合いが深まるでしょう。まずは傾聴することと、分かち合い受け入れる心を持って発言することに心がけてほしいと思います。

2.3 色読――「！」をクリアにして定着させる段階

素読、解読と来て、御言葉からいろいろなことがそれぞれのたましいに語りかけられてきました。この時は、ああそうか、とか、なるほどね、と感じながらも、それがまだ整理されていない「生」な状態であると言えます。それを、形にして表してみようというのが色読の段階です。絵にすることが多いのですが、かならず絵でなければいけない、ということではありません。絵が苦手でとても描けないという場合には、言葉にしたって良いのです。詩や短歌などで表せるかたもいらっしゃるかもしれません。もっとも、「絵を描く」と言ったって、ちゃんとした写生的な絵を描く必要は全くなくて、色を塗り重ねただけのようなものでも構わないのです。そして、できたものには、絵でも詩でも、短いタイトルをつけて、みんなに見せて、どういう思いでこの作品を作ったのか、なぜそのタイトルをつけたのか、というようなことを簡単に説明してもらいます。このときは、司会者と発表者だけでなく、グループの他の人たちの発言も歓迎します。その方が形にされたものを見、説明を聞いて、どのように思われたかを、自由に語っていただきたいと思います。ただ、この時も、議論するのではなく分かち合う思いで発言をお願いします。

こうして形にして表現し、それを発表して分かち合うということは、自分の中でもやもやとしていたものに他の人に伝達可能な一定の形を与えるということです。それは自分の整理にもなることですし、なんとなくわかったような気がしていたものをクリアにして腑に落ちるものにするために有効です。また、分かち合うことで、自分とは違った視点からの御言葉へのアプローチを知ることもでき、恵みの幅が広がるという喜びもあります。大げさに言えば、同じ御言葉に培われた相互理解です。御言葉に立ってお互いに受け入れることができる、ということは、主にある交わりの基礎となるものだろうと思うのです。

これだけの説明ではよくわからないかもしれません。もし聖書深読に興味をお持ちになった方がいらっしゃったら、私までご連絡ください。ご一緒に御言葉の恵みを分かち合うお手伝いをさせていただきたいと願っています。

神様とのつながり

保田広輝（板宿教会員）

【エフェソの信徒への手紙 1章4〜5節】

「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。」

イエス様を信じる私たちが受ける最も大きな祝福は、この世界が創造される前に、キリストにおいて選ばれたということです。神様は私たちを天地創造の前に選ばれました。宇宙が生じる前に、私たちが生まれることを決められたのです。

神様はなぜ私たちを選ばれたのでしょうか。それは、私たちを永遠に愛するためであり、神様の前で、私たちを聖なる者、汚れのない者にするためです。汚れや傷がある人も、汚れや傷がまったく無いようになさいます。私たちが新しいものへと造り変えられるのです。神様の子どもとされるために、私たちは選ばれました。

【ヨハネによる福音書1章1節】

「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。」

この神様の言葉は、愛のみ言葉として、私たちに語りかけられました。神様の言葉によって、私たちは生まれました。み言葉のうちに、私たちは生きています。神様の言葉に守られて、イエス様を信じる私たちは永遠の命に招かれているのです。

この「初めに言があった」は、「天地創造の初めに愛があった」と言い換えることができます。いくら愛があっても、それを相手に伝えなければ、伝わりません。神様は天地万物をお造りになりました。じゃあ、なぜ造られたのでしょうか。それは、神様が愛だからです。神様は、ご自分の愛を表したいから、私たちを創造されて、まず天地創造の初めに、私たちに語りかけられたのです。

神様の言葉は、愛です。神様の愛は永遠です。その神様が、み言葉によって私たちを創造して、私たちを愛して、天地創造の初めから、私たちに語りかけておられるのです。

では、神様はどのようにして、私たちに「神の愛」をハッキリと表わされたのでしょうか。神様のみ子イエス・キリストを、私たちに遣わしてくださることによって、です。聖書で神様は、私たちへの愛を証明したい時はいつでも、イエス様の十字架に目を向けられます。

【ヨハネの手紙一 4章9〜10節】

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

イエス様は「神のことば」そのものです。「神の愛」を表す最高の言葉・御業として、イエス・キリストは十字架にかけられたのです。そして、イエス様を信じる私たちは、神様の子どもとして、キリストにあって永遠に選ばれたのです。

イエス様の御姿から、十字架から、「あなたを永遠に愛している」という神様の言葉が、あふれて、あふれて、私たちを満たします。イエス様が徹底して、私たちに語りかけて、触れて

くださって、そして十字架で命すら捨てて、私たちへの愛を示し、「神はあなたたちを愛している」という真理を、私たちに語ってくださったのです。

【哀歌 3章22節（新改訳）】

「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。」

神様は私たちが良い時に愛し、悪い時に憎むのではありません。神様の愛は不変であり、絶えず注がれ、愛することを止めないのです。

そして、**【イザヤ書 64章8節（新改訳）】**には、このようなみ言葉があります。

「しかし、主よ。今、あなたは私たちの父です。私たちは粘土で、あなたは私たちの陶器師です。私たちはみな、あなたの手で造られたものです。」

陶器師は土をよく練って、自分が造りたいと思う器を造ります。練る土は同じですが、陶器師の思いと必要に応じて、あるものは大きく、あるものは小さく、あるものは特別な器として、あるものは普通に使われる容器として、いろいろな器を造ります。

それなら私たちは、神様が自分勝手に使う道具のようなものでしょうか。多くの人たちが「神の主権は人間の意志を無視するのではないか？」と疑問に思います。しかし、安心してください。私たちの陶器師であられる神様は、失敗のない御方です。神様は、私たちを自分勝手に造る陶器師ではなく、必要な尊い存在として造る陶器師なのです。私たちひとりひとりを一番美しく造られます。

神様の主権は、私たちを絶望的な困難には遭わせず、乗り越えられない試練を与えません。神様の愛は、私たちを束縛しません。神様のご計画は、私たちの人生を最後まで最善へと導きます。

たとえ、自分から見て失敗や挫折がたくさんあったとしても、その失敗も挫折も、神様のご計画に含まれているのです。キリストの中で、すべての出来事の意味を知るのです。

私は今までの人生の中で、難病の試練、死にかけた経験、小学校時代の集団いじめ、急激な病気の悪化による大学受験の失敗、などを味わってきました。でも、私の失敗や挫折も、神様のご計画だったんだ、と今は思えます。私がキリストにあって、神様の子どもとして生まれ変わるために、神様から与えられた使命のために、神様がこのような難病をプレゼントしてくれた、と感じています。だから、私にとって難病は恵みの試練なんですね。

苦しみとは、神様に委ねるための「痛み」なのだと思います。なぜなら、人間は神様に委ねるまでは安らぐことはないからです。私の命は私のものではなく、神様のものですから、神様のみ心に従うならば、自分にとって、最も良い人生を歩むことができるんですよね。

神様は、難病を含めたこの私を愛するために、私を創造してくださり、私の人生を計画してくださいました。だから、私が難病の人生を生きていくことで、神様のご計画が実現されていくのです。自分の苦しみだけを見るのではなくて、神様のご計画の実現という広い視点から自分の苦しみを捉えたら、生きる力が湧いてくるようになりました。

私たちの人生は神様によってご計画されていますし、神様は私たちの人生を初めから終わりまでご存知だからこそ、私たちは安心して神様に信頼し続けることができるのだと思います。

神様が、この私を望んでくださったから、他に何もいりません。神様とのつながりさえあれば、どんなに困難や恐れがあっても、いつも神様の恵み、神様の力の中で、安心して生きていけます。私はこれからもキリストにあって、すべての人生の出来事を受け止めて、神様のみ心に従っていきたいです。

【フレデリック・ブロザートン・マイアー（英国の牧師）】

「神の愛は、きのうやきょう、生まれ出たようなものではありません。また、私たちが神を思った時、あるいは信じた時に始まったものでもありません。あなたの生まれ出る前から、カルバリやベツレヘムよりも前から、いや人類の堕落、エデンの園よりも前から、ああ、この太陽系が回転する以前から。そうです！　永遠の昔から、あなたはキリストのうちにあって愛され、選ばれていたのです。」

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

7月2日　　バベルの塔　　聖書黙想

テキスト　　創世記 11章1〜9節

この物語は、どうして人間は違う言語で話すのかという疑問に対して答える原因譚としての性格をもっている。まだこの時代、人間は一つの言語しかもたなかった。しかしある時、人間たちは力を集めて神に対抗しようという不遜な思いを抱き始める。「有名になろう」私訳では「我々は我々で名を作ろう」。神によってではなく、自分たちで自分たちの名を作る。名とはその人の実体であり、存在そのもの。自分で名を作るとは自分で自分を生かすというに等しい。神に生かされるのではなくて、自分でやる、神は必要ないという自信の表れ。同時にそれは、神より高みに立って、神が口出しできないようにしてしまおうという、高慢の表れでもある。そんな高ぶりを象徴するように、高い高い塔が作られていく。神のおられる天に向かって。

そういう人間の不信仰と高ぶりとを打ち砕くために、神が言葉を混乱させられ、世界中に散らされたというのが、伝統的な読み方である。

この神の介入は、ある意味では神の救いを表しているとも言える。もしこのバベルの塔の出来事がなくて、あのまま人間が力を結集して、ますますおごり高ぶっていったら、どれだけ危険な状態になったか。

今現在、力が分散していながら、なお高ぶり続けて、高い塔を各地に作っている人間。そして限られた資源を食いつぶして、地球の環境をすっかり変えてしまって、世界全体を一瞬にして吹き飛ばしてしまうような兵器をも作り出してしまった人間である。現代の私たちは高度な文明と引き換えにして、人類滅亡の危険をいつも突きつけられながら生きている。そう考えると、ここでの言語の混乱ということも、そんな滅亡の危険をわずかでも緩和するための止むに止まれぬ手立てだったのでは、とも考える。

また注目すべきは、この出来事を通して人間が神から遠く離れてしまったということである。1〜11章全体の流れを考えよう。神のかたちに創造され、エデンの園において神と共に生きる存在だった人間。それが堕落によって園を追われ、神から離れてしまった。それでもまだ神の近くで人間の営みは繰り返されていた。「エデンの園に近い＝神に近い」である。カインの殺人も、ノアの洪水も、まだエデンの園からそんなに遠くない出来事。しかしこのバベルの出来事によって、とうとう人間はエデンの園から遠く離れて、世界に散らばってしまう。それは神との霊的断絶を意味する。「わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かっていった。その私たちの罪をすべて、主は彼に負わせられた。(イザヤ53:6)」

そのことが、言葉が通じなくなるというかたちで表されているということが、また奥深く、悲しい。ここにある民族間での対話の断絶は、より根源的には、神との対話の断絶を暗示している。「我々は我々で名を作ろう」と、もはや神との交わりを必要ないとうそぶいて、帰るべき家を見失ってしまった人間がここにいる。そうしてもはや神と人間のあいだで言葉が通じなくなってしまう。

でも神は、なおあきらめず、世界中に散らばってしまった人間たちの中から、たったひとりの信仰者アブラハムをおこされて、彼とその子孫を媒介に人間に語りかけ続けてくださった。やがて神の言として御子を遣わし、御自分の心をすべて明らかにしてくださり、救いに招いてくださった。そのようにして進められてきた、長く周到な救いの計画を、今教会は宣教の業において担っているのである。　　(坂井孝宏)

7月2日　　バベルの塔　　説教展開例

テキスト　　創世記 11章1〜9節
参照カテキズム　　子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

「バベルの塔」の箇所は、わたしたちに人生の根本問題をさし示す。人間が被造物であり、それゆえ人間の本分は神の栄光をあらわすことにある（ウェストミンスター小教理問答問1、子どもカテキズム問1）を今一度心に刻みつけたい。

「神さまを土台とする」

洪水の後、地の上にまた人々は増えていきました。そして、自分たちの知恵や力を誇るようになりました。あるとき、人々はこう話し合いました。「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう」

天にまで届く塔を、力を合わせて建てようというのです。天にまで届く塔を建てる―これは神さまに対する挑戦です。なぜなら、天は神さまの住まいだからです。そこにまで届く塔を建てるとは、神さまと力比べをしようということです。神さまの知恵と力と、自分たちの知恵と力と、どちらが上か試してみようというのです。

そしてこのことは、神さまに対する背きです。わたしたちは知恵も力もつけた、天にまで届く建物を築くことさえできるほどに力をつけた、だからもう神さまなんていらない、神さまなしでも、わたしたちはじゅうぶんにやっていける―そう人々は考えたのです。

ここでもういちど、エデンの園でアダムとエバをサタンがどのような言葉で誘惑したのかを思い起こしたいのです。それはあなたがた自身が神のようになれるのだ、という言葉であったのです。

罪とは自分を神とすることによって、神さまから離れることです。アダムとエバの罪は、ここで天にまで届く塔を建てようとした人々にも、確かに受け継がれていたのです。

けれども、人間は神さまにつくられた者です。ですから、神さまから離れることは人間にとってとてもみじめなことなのです。神さまから離れるとき、人間は羊飼いのもとを離れ、群からはぐれてしまった羊のように、生きる目的も失ってしまうのです。ついに命を失うほかはないのです。

聖書では罪という言葉は、的を外れるという意味をもつ言葉です。天に届く塔を建てようとたくらむ人々の姿は、まさに的を外れてしまった人間の姿なのです。

神さまは、人々のこのたくらみを知られ、天からみ手を伸ばされました。これをおしとどめられたのです。

どのようなことをなさったのでしょうか。人々の言葉を混乱（「バベル」）させ、通じなくさせられたのです。このとき、世界中の人々が同じ言葉を話していました。ひとつの仕事を協力してなしとげようとするとき、言葉が通じるというのは大事なことです。言葉がわかるからこそおたがいの思いが通じて、作業がはかどります。けれども神さまは塔を建てようとしていた人々の言葉を乱し、通じなくさせられました。それで、この計画は仕事の途中でくじけてしまったのです。

世界中がひとつの言葉だったと聞くと、わたしたちはうらやましいと思うかもしれません。世界中の人々が同じ言葉を話しているなら、世界中どこに行っても、その国で言葉が通じなくて苦労するということはなくなりますね。

けれどもこのとき、神さまが人々の言葉を乱されたことは、とても大切なことであったのです。このようにされたことで、神さまは人々の命を救

われたのです。もしも天に届く塔が完成したとしたら、人々は神さまからきっぱりと離れてしまったことでしょう。自分を神のように偉大な者と錯覚して、果てしなくおごり高ぶって生きるようになったことでしょう。人間にとって、それほどみじめなことはありません。罪ある人間が自分たちを神とし始めたなら、きっと争い合い、そしておたがいの命を滅ぼし合うほかはなかったでしょう。人々の言葉を混乱させたこと、それは人の命を守り、保つ神さまの憐れみのみわざであったのです。

「子どもカテキズム」の問1を見てみます。

問　私たちは何のために生きるのですか。

答　私たちが生きるのは、私たちの神さまを知り、神さまを喜び、神さまの栄光をあらわすためです。これが私たちの喜びです。

この問答を、心にしっかり刻みましょう。今も世界には、さまざまな「バベル」が建っています。人間の能力や技術を誇るような高いビルが競い合うようにして建てられています。科学が進み、人々の生活は便利になり、むずかしい病気も治るようになりました。人々は自分たちの知恵や力を誇っています。できないことな何もないとさえ考えているようです。けれども、そこではいちばん大切なことが忘れられています。人間の目的は自分を誇ることではなく、神さまの栄光をあらわして生きることであるということです。

神さまから離れたところでの人間のわざは、それがどのようなものであっても祝福されることはありません。神さまを人生の土台に据えるとき、わたしたちは祝福されます。わたしたちの知恵も力も、神さまからのプレゼントです。神さまの栄光のためにこれを用いるなら、わたしたちの命と人生は豊かに祝福されるのです。　（木下裕也）

〔今週の暗唱聖句〕　コリントの信徒への手紙 一 10章31節

だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、
何をするにしても、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

7月2日　　バベルの塔　　幼稚科

〈ねらい〉

自分の力で生きられると思い、自分を神とするのではなく、神さまを礼拝し、神さまと共に生きることがわたしたちの幸せであると知る。

〈さんび〉

いのちのことば社『プレイズワールド』、93「ぼくのたからもの」

〈おはなし展開例〉

みんなのお家では、お父さんお母さんも分かる言葉でお話ししてくれるでしょ。だから、お母さんに「牛乳もってきて」と言われたら、「はーい」と言ってもってこれるよね。もし、みんなの家族がバラバラな言葉をしゃべるようになったらどうかな？お母さんはフランス語、お父さんは英語、ぼくは韓国語、妹は中国語だとしたら、お互いに何をしゃべってるか分からないで困ってしまうよね。

今日の聖書のお話は、それと同じようなことが起こったっていうお話しです。世界が始まったばかりの時は、みんな同じ言葉でお話ししていたんだって。でも、人々はどんどん気持ちが大きくなって、神さまなんていらない。自分たちの力で生きていけると思うようになってしまったんだよ。そして、「天まで届く高い塔を建てて、有名になろう」って話し合って、高い建物を造っていました。そうして神さまから離れていきました。

神さまはどんどん神様から離れていく人たちを見て、考えました。「みんな同じ言葉でお話ししているから、こうなったんだ。みんなバラバラな言葉をしゃべるようにして、分からなくさせよう」この時から、人間は色んな言葉をしゃべるようになったんだって。

このお話しで、神さまはわたしたちに大切なことを教えてくださっています。わたしたちは、自分が一番になりたい。お友だちより上手にやって、みんなからすごいねって言われたいと思うことがあるでしょ。でもね、みんなが上手に絵が描けたり、かけっこで一番になったりする力は、神さまがみんなにくれたプレゼントなんです。だから、わたしたちがえらいんじゃなくって、神さまがすごいんだよ。わたしたちは、一番になることや、人からすごいねってほめられるために一生懸命になるのではなくて、上手に絵が描けるようにしてくださった神さまに感謝することが大切なんだよ。そして、わたしたちに与えられている一番のプレゼントは、わたしたちのことを命をかけて大事にしてくれる、イエスさまのことを知っているってことなんだよ。これは本当に大切なプレゼントです。だからいつもイエスさまといっしょに歩んでいきましょう。そして、お友だちにもイエスさまのプレゼントが届くように、お祈りしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま。わたしたちがほめられることや、一番になることよりも、神さまにありがとうございますって感謝することができるこどもになれますように。これからもイエスさまといっしょに歩いていけますように。お友だちにもイエスさまのことが伝わるようにしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。

7月2日　　バベルの塔　　小学科下級

〈ねらい〉

人間の自分勝手な思い、神様のようになりたいという思い、神様を頼らないで自分の力を信じてしまうおろかさ、わたしたちの中にも同じ思いがあるかもしれません。子どもたちにとって一番大切な生き方は「神様の栄光をあらわす」ことだということを、もう一度確認しましょう。

〈はじめに〉

この一ヶ月のクラスの歩みはいかがだったでしょう？　創世記1章から始まり、神様がいかに人を愛し、大切に創造されたかを学び、神様の愛を知りました。そして、罪の悲惨さ、悲しさをアダムさんとエバさん、カインさんの出来事を通して知りました。それでも、なお人は神様の憐れみによって生かされていることを、ノアさんを通して知らされます。神様の変わらない、徹底した愛を知りました。子どもたちは、神様の愛を知っているでしょうか。クラスでの先生の笑顔や、温かさ、配慮を通して、お友だちの優しさを通して、神様の愛を伝えましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①人は、天まで届くあるものをつくろうと思いました。それは何ですか？

②なぜ、天まで届く塔をつくろうと思ったのですか？

③神様はそれを見て、喜ばれましたか？

④神様はこの塔をつくっている人たちに対して、あることをしました。何をされましたか？

⑤この町の名前は何と言いますか？

〈展開例〉

バベルの塔のお話です。神様がこの全地を造られて、人が造られてから、ずいぶん時間がたちました。人もずいぶん増えました。たくさんの人たちが、ひとつの同じ言葉を使ってお話していました。ある日、人が集まって、天まで届く高い塔をつくろうということになりました。

それは、人の心の中にある「神様のようになりたい」「有名になりたい」「自分はすごいと人から言われたい」「注目を浴びたい」という思いがムクムクと起こってきたからです。これも罪です。神様との関係で生きるのではなく、神様に従って生きるのではなく、神様はいらない、自分の力で生きていくという生き方ですから、罪人の生き方です。そういう姿を神様はご覧になられて、残念に思いました。そして、神様は塔をつくるたくさんの人々の言葉をバラバラにしていましました。

どうなりますか？　人は言葉が通じないと本当に困ります。相手が何を言っているかわからないと、悲しくなるし、どうしていいのかわからないし、自分が言っていることも相手がわかってくれないと困るし、悲しいものです。特にここでは、ひとつの塔を作るためにみんなで相談していましたから、言葉がばらばらになると相談が出来なくなってしまいます。そこに集まった人々はバラバラになってしまいました。

神様は大切なことをわたしたちに教えてくださいました。神様との交わりを大切にするより、自分が一番、神様なんかいらないという自分勝手な生き方はいけませんよ、神様はわたしたちとの交わりをいつも喜んで、待っていてくださるお方なのです。毎週日曜学校に来て神様とわたしたちはお話をします。それが礼拝です。神様が一番喜んでくださる時間です。神様が喜んでくださること、神様が大事にしておられることを、わたしたちも共に喜び、大事にしていきましょう。

〈祈りましょう〉

神様、あなたのご栄光をあらわすことができますように。

7月2日　　バベルの塔　　小学科上級

〈改革派信仰の確認のために〉

前もってウ小教理問答第1問をよく読んで、神中心主義に基づく人間の謙遜についてお考えください。また第一戒の解説（ウ小教理45〜48、ハイデルベルク94）を合わせて読み、私たち人間が自分自身の力に頼る高慢も、神ならぬものを神とする偶像礼拝の一つのかたちであることを確認してください。

〈関連聖句〉

※子どもたちと一緒に味わってください。

詩編10編3〜7節
箴言14章16節、16章5節、21章4,24節
ハバクク書2章4節
テモテへの手紙一6章17節
テモテへの手紙二3章1〜5節
ヤコブの手紙4章5〜10節

〈恵みを立体化するための視点の提示、例話〉

※子どもたちとの対話に用いてください。

自信をもつのはいいことです。子どもたちには自信満々に、胸を張って生きて欲しいと願います。それは神に愛されている自分を知ることによる、絶対的な自己肯定に基づく自信です。罪人であると幼少時から教えることは、自己の存在否定に通じるという懸念は、まったくの無理解によるものです。罪人としての限りない自分の卑小さをよく見つめた上で、なおその私が愛されているという驚きこそが、いかなる窮状にも屈しない真の自信を与えます。この恵みの神とともに生きる民として選ばれた喜びに胸躍らせて、与えられた人生を躍動して、神の栄光を表してほしいと願います。

しかし私たちは、勘違いしやすいものです。ただ神の恵みによってのみ与えられるおのれの存在の輝きを、自分自身が発する輝きと錯覚して、塵に過ぎない自分を過信する「高慢」の罪に陥ります。そうして大いなる神の力を侮り、神を信頼することから離れ、自分を神と同じ位置まで高めようとします。バベルの塔の物語が示す、最も本質的な問題です。

特に、子どもたちの霊的状況には注意が必要です。子どもたちの周囲には、マンガその他によって、人間の無限の可能性をたたえるような物語世界があふれています。「自分を信じる」という言葉には魅力があふれていますが、よほど慎重に扱わないかぎり、罪の自覚なきヒューマニズムに陥って、人間本来の目的を見失った迷走に行き着きます。先述したような、聖書的世界観に基づく正しい意味での自信、自己肯定、自己愛へと、子どもたちを導いていただければと願います。

〈祈り〉

神様、小さな私たちが、大きなあなたの手の中で生かされ、愛され、守り導かれていることの恵みを感謝します。私たちは、そんなあなたのご存在を忘れて、自分に大きな力があるかのように思ってしまう、高慢な者たちです。赦してください。そして、本当の自信を与えてください。

7月2日　バベルの塔　中学科

〈ねらい〉

文明の背後にある罪を悲しみ、人から悪を遠ざけようとされる主の恵みに感謝する。

〈展開例〉

①ノアの洪水の後、人間たちはどうなったのだろうか？ 神様に従う新しい世界は訪れたのだろうか？ 残念ながら人の心は相変わらず悪を生み出す罪に捉われていた。聖書朗読（9章20～25節）。ノアでさえも例外ではない。ノアは酒に溺れて醜態をさらし、それを見た息子のハムは父の醜態を言い広め、そのことを知ったノアはこんなことを言う始末。「カナン（ハムの息子）は呪われよ 奴隷の奴隷となり兄に仕えよ」。愛し合うための世界は、人が人を支配する悲しい世界となっていく。聖書朗読（10章6～10節）。

②罪から生まれる悪の文明はとどまることを知らない。彼らは同じ場所に集まり同じ言葉で一つの町を築いた。聖書朗読（創世記11章1～4節）。

Q．神様は彼らのしていることの中に悪を見た。彼らの何がそんなにいけなかったのか？ 彼らの文明とは、「自分たちの力で、神様の領域である天にまで押しかける文明」、「神様の力に自分たちが対抗できることを世の中にアピールしようとする文明」だった。つまり、「自分たちが神様になり替わろうとする文明」だった。人間は神様に歯向かおうとする「罪」に支配され、神様と愛し合う関係を歪め、人と愛し合う関係を歪め、世界を正しく管理するはずの文明を歪めた。

③神様はその様子を御覧になり、人々の言葉を混乱させた。そして、さらに人々を世界に散らされた。聖書朗読（5節以下）。彼らは、共に語り合う言葉を失い、同じ文化を持つ仲間関係を失った。「こんなのは神様の横暴だ！」 こんな反論があるかもしれない。だがどうだろう？

例）出張に行く父親が子どもと会話するために携帯を買ってあげたとする。だが、子どもは友だちと電話するだけで父親の電話に出もしない。それどころか、電話で仲間と連絡を取り合い、家に集まって父親から家を奪い取る計画まで立てている。それを知った父親が携帯を取り上げ、仲間を家に帰すことは横暴なことか？ 人間は、神様と語らい、神様のスバラシサを語るための言葉で、「俺たちに神なんか要らない！ 人生は俺たちの思い通りにやらせてもらう！」と語り合う。行き着く先は神様から捨てられる悲しい人生だ。破滅へと突き進んでいた人間への神様の対応は、非難どころか感謝するべきこと。

④現代を生きる皆にバベル物語は単なる昔話か？ 神様を知らない友だちは、神様抜きで「有名になろう。成功しよう」と考える。知らない間に君もそんな影響を受けていないか？ 神様抜きで盛り上がる会話の中で、「俺の人生は俺のものだ！」、こんな思い上がりに陥ってはいないか？ 自力で成功を掴もうとする人に憧れてはいないか？ 天のイエス様を無視した人生は果たして爽快なものか？ イエス様は、君がそんな価値観で生きるために命を捨てられたのだろうか？

⑤イエス様は罪に歪んだ人生を整えてくださる。神様を知る者の言葉を整えてくださる。神様と語り合うための言葉、神様のことを語る言葉、人を大切にする言葉、世界を大切にする言葉へと。うぬぼれの気持ち良さで天に昇るのではなく、神様を慕う心から天に昇る者とされたい。

〈祈り〉

罪の人生に突き進む私たちを聖書の言葉で導かれる神様。私とこの世界の悪を抑え、神様の子どもに相応しい言葉をください。アーメン。

7月9日　アブラハムの召命　聖書研究

テキスト　創世記 12章1〜9節

創世記は12章からアブラハムの召命の物語が始まります。もっとも彼の名がアブラハムと言われるのは創世記17章5節以下です。それまではアブラムで、最初にその名が記されるのは創世記11章26節です。そこからアブラムについては、誕生、サライ（後にサラと改名）との結婚、カルデアのウルからカナンに向かう旅、その途中ハランでの父テラの死が記されています。ハランを出発したときすでに75歳となっておりましたが、まだ子供もなく、父とも死別し、家もない、一介の旅人でした。実に彼の生涯は旅人です。12章以下に彼の人生の節々にたどった大切な地名が出てきます。ハラン、カナン、シケムの聖所、モレの樫の木の所、西にベテル東にアイを望む所、ネゲブ地方、エジプト、さらにヘブロン、マムレの樫の木のかたわら、ベエル・シェバ、モリヤの地、そしてマクペラの洞穴に葬られる（創世記25:9）まで、不安定な旅人・寄留者でした。彼の地上の生涯は、「天の故郷を熱望」（ヘブライ11:16）する日々だったと、ヘブライ人への手紙の著者は言います。聖書巻末の地図をたどるとともに、ヘブライ11章8節以下を読んでいただきたいと思います。まさに天路歴程の歳月でした。私たちもこの世にあっては、どんなにか行く末の見えない旅人・寄留者であることでしょうか。私たちの信仰の生涯は、何を望み、何に向かっての歩みなのでしょうか。

このいかにも不確かに思われる天路歴程のなかで、アブラムにはもっとも確かな神の言葉が与えられます。その最初の言葉が創世記12章1節以下の召命の記事です。いまは旅人にすぎないアブラムは、「大いなる国民に」され「名を高める」、さらに「あなたの子孫にこの土地を与える」との約束をいただくのです。その時アブラムには一片の土地もなく、すでに75歳という老境に入っていたのに、一人の子供もいませんでした。しかしこの約束はアブラムの生涯を通して、徐々に確かなものとなっていくのです。約束の中心は土地と多くの人々に関することでした。この創世記12章の約束は、13章14節以下、15章4節以下、17章1節以下、18章17節以下、22章15節以下で繰り返し語られます。そして、この約束の完成、完全な実現は天国にあると、ヘブライ人への手紙は言います。アブラムにこの約束が語られたのは、たび重なる彼の人生の危機のときでした。もっとも望みの薄いと思われるとき、もっとも不確かな歩みのなかで、もっとも確かな神の約束として繰り返し語られたのです。私たちも、ひとり、家でこの神の言葉を聞きます。また、何よりも主の日の礼拝においてこの約束が新たにされます。それはしばしば私たちの危機のときかもしれません。アブラムの生涯は、幾度も経験した恐れ・不安のなかでも、圧倒的に迫り、彼を包みこむ神の約束の確かさの証しでした。私たちの信仰の生涯もこのような証しの日々でありたいものです。

アブラムはその旅路の節々で「主のために祭壇を築き」ました（12:7,12:8,13:8,22:9）。もちろんこれは「主の御名を呼ん」で礼拝をささげるためでした。彼の人生は旅人としての日々でしたが、礼拝をささげ続ける歩みでした。礼拝こそは不確かに思える日々の歩みを確かなものにし、いよいよ確実にされる「天の故郷を熱望」させるものです。礼拝が天国の先取りといわれる所以です。もちろんそこでは神からの御言葉がありました。アブラムは祭壇を築くとともに、与えられた神の御言葉に従ったのでした。「アブラムは、主の言葉に従って旅立った」（12:4）のです。礼拝は神からの恵みの語りかけ・召しとともに、信仰者の従順な応答によって成り立ちます。神の約束の御言葉に対して、たえず応答し従う人生、これが私たちの礼拝的人生です。それはなんという幸いな人生でしょうか。（中根汎信）

7月9日　　アブラハムの召命　　説教展開例

テキスト　　創世記　12章1〜9節
参照カテキズム　　子どもカテキズム　問70

〔単元のねらい〕

アブラハムの召命について記す今朝の聖書箇所は、信仰に生きる者の原点をシンプルに指し示していると言えよう。それゆえ、わたしたちもおりおりにここにたちかえり、このみ言葉に聞き直さねばならないであろう。み言葉に従って旅立つ者は、何があっても祝福される。この事実を子どもたちにも確信をもって伝えたい。

「み言葉に従って」

わたしたちはだれもが、自分の命と人生が幸せなものとなるように、また祝福に満ちたものとなるようにと願うでしょう。では、幸せな人生を生きる鍵はどこにあるのでしょうか。

それは、神さまのみ言葉に聞き従うことです。神さまは、わたしたち人間のために、命の道を備えてくださっています。そしてみ言葉をもってその道に導いてくださいます。わたしたちがみ言葉に従ってその道を歩むなら、神さまはわたしたちの命と人生を豊かに祝福してくださるのです。

そのことを、アブラハムの召命を通して学びましょう。

神さまはあるとき、アブラハムをお呼びになって、こう言われました—「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように」(2)。

わたしはあなたから子孫を生み出す、その子孫は海辺の砂、空の星のように数え切れないほどに増え広がる—そう神さまはアブラハムに約束してくださったのです。アブラハムよ、あなたの命は豊かに祝福される。そしてあなたから増え広がった子孫は大いなる国民となって、幸せに生きる。これはこの上ない祝福の約束です。

ただし、神さまはこの約束とともに、アブラハムにひとつのことをお命じになりました—「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい」(1)。

神さまがアブラハムにお求めになったのは、この大いなる祝福の約束を信じて、神さまのみ言葉に従って旅立つことでした。神さまの召しにこたえて、神さまがさし示される地を目ざして、信仰の旅路へと歩み出すことでした。

ただ、神さまのこの命令は、アブラハムにとっては信仰の試みでもありました。

第一に、神さまは「わたしが示す地に行きなさい」とおっしゃいましたが、それがどこなのか、またその地にたどりつくまでにどのようなことが待ち受けているのか、そうしたことはいっさい教えてくださいませんでした。

第二に、この命令に従うためには、長く慣れ親しんでいた生まれ故郷を離れなければなりませんでした。家族とも別れなければなりませんでした。日々の仕事や生活の土台をも捨てなければなりませんでした。

第三に、神さまからこの召しを受けたとき、アブラハムは七十五歳でした。こんなおじいさんになってから、行く先も知れない旅へと出ていかねばならないことは、やはり厳しいことであったと思います。

そういういくつかのことがありましたから、アブラハムはきっと悩んだと思います。そのことを聖書は記していないのですが（そして聖書に書いていないことをあまりおしはかるのは正しいことではないかもしれませんが)、アブラハムは何日間か、深く思い悩んだかもしれません。神さまを

信じることをしない人、自分の知恵や判断をよりどころとして生きている人であれば、おそらくそのような旅に出るなどということはしなかったはずです。

けれども、聖書はアブラハムがしたことをただ一言で記しています。「アブラム（アブラハムのもとの名）は主の言葉に従って旅立った」(4)。

アブラハムは神さまを信じたのです。わたしはあなたを、そしてあなたの子孫を祝福する―神さまのこの約束にまちがいはない。そう信じてすべてをゆだね、信頼して旅立ったのです。そして「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように」―このみ言葉はアブラハムの生涯においてまさにそのとおりに実現したのです。

わたしたちの地上の歩みが幸せなものとなること、祝福されること、そのために求められることは何でしょうか。

それは神さまに信頼することです。そして、神さまのみ言葉に従うことです。そのとき、神さまはわたしたちを祝福し、わたしたちの人生の歩みをみ手をもって切り拓いてくださるのです。

もちろん、神さまに従う道の途上にもさまざまなことが起こります。さまざまな試練も待ち受けています。それでも、信仰によって歩む人の歩みは祝福されます。「主の言葉に従って旅立」つ―これこそ、わたしたちの人生にとっていちばん大切なことなのです。　（木下裕也）

〔今週の暗唱聖句〕　創世記 12章4節前半

アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

7月9日　　アブラハムの召命　　幼稚科

〈ねらい〉

分級では物語を通して、子供たちが神さまのことと信仰者のことを心に留めていければと思います。

この分級展開例では物語の文章だけ記しましたけれども、それぞれ紙芝居やエプロンシアターなどのシナリオとしてお使いいただければと存じます。そして、毎回短い暗唱聖句を蓄えていければと願っています。

今日の箇所では、子どもたちが、主の言葉に従って旅立ったアブラムと同じように、自分も歩みたいと思ってくれればいいなと思います。

〈暗唱聖句〉

アブラムさんは、「主の言葉に従って旅立ち」ました。

〈展開例〉

①ノアさんのこどものこどものこども、そのまごのまごのまごのこどもに、アブラムさんという人がいました。アブラムさんは75歳のおじいさんでしたが、子どもはいませんでした。でも神さまを信じる正しい人でした。

②ある日、神さまがアブラムさんに声をかけて言いました。「アブラム、あなたは生まれた家を離れて、私が言うところに行きなさい。そこで私はあなたを幸せにし、たくさんの家族を与え、立派な人にします」。

③アブラムさんは考えました。神さまは「私が言うところ」と言われたけれど、そこはどこだろう。どんなところなのかぜんぜん分からないな」。

④また、アブラムさんは迷いました。神さまは「家と離れて」と言われたけれど、家族やお友達と別れるのはさみしいな。それにここには立派な家も仕事もあるし、どうしようかな。

⑤また、アブラムさんは心配しました。わたしはもう75歳のおじいさんなので、旅なんてとてもできるかな。途中で倒れたり病気になったりしたらどうしよう。

では、アブラムさんは神さまの言うことに従わないで旅に出なかったのでしょうか。

⑥いいえ、アブラムさんは、「主の言葉に従って旅立ち」ました。もちろん、まだどこに行くのか分かりません。でも、アブラムさんは思いました。どこに行くのか私には分からなくても、神さまは知っておられる。また、みんなと別れるのは悲しいことです。でも、神さまが一緒にいてくださるからきっと楽しいよと思いました。それに自分の力ではできなくても神さまが支えてくださるから大丈夫と安心しました。

⑦この旅がどんな旅になるのか分かりません。でも大丈夫。神さまが行く道を教え、ともにいてくださり、支えてくださる旅だから。そう神さまを信じてアブラムさんは「主の言葉に従って旅立っていきました」。

〈お祈り〉

アブラムさんが旅立つことができてありがとうございます。アブラムさんのように、神さまの言葉を信じて、旅立っていけるよう勇気を与えてください。アーメン。

7月9日　　アブラハムの召命　　小学科下級

〈ねらい〉

どんな時にも神様に信頼することを覚えよう。

〈はじめに〉

7月に入りました。夏休みが近づいています。日曜学校では、夏期学校やお楽しみ会など、計画が進んでいると思います。今から、クラスのこどもたちが喜んで参加できるよう祈り、こどもたちにも夏の行事があることをお知らせしましょう。こどもたち同志が互いに誘い合えるよう、また、しばらく休んでいるお友だちにも連絡をとり、お誘いしましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①神様は、アブラムにどこに行きなさいと言われましたか？

②アブラムは神様の言葉に従いましたか？

③アブラムは何歳でしたか？

④アブラムの奥さんの名前はなんですか？

〈展開例〉

みなさんは、初めてのことって覚えてますか？

小学校の入学式の朝のこと覚えてますか。初めての学校、先生、お友だち、ドキドキしましたか？

初めて自転車の補助輪をはずして乗ったときは？ 初めてプールで泳いだときは？ 引っ越して新しい町に行った時は？ きっと不安に思ったり、大丈夫かなぁ、できるかなぁ、この先どうなるのかなぁって心配になったりしたでしょう。でもそんな時、きっと家族の人やお友だちや学校の先生、教会の人たちが、そばに居て、励ましてくれたら、私たちは元気や勇気が出てきますよね。

今日のお話のアブラハムさんは、どうだったでしょうか。アブラハムさんは、神様から、ある日突然、「私の示す地に行きなさい」と言われました。今まで住んでいた所を離れて、全然知らない場所にお引越しすることになったのです。そこがどこなのか、どんな町なのか、どんな人が回りにいるのか、おいしい食べ物はあるのか、全然知りません。でもアブラハムさんは、「はい」と言って、奥さんとそのほかの人を連れてお引っ越しをしました。

なぜ、そんなことができたのでしょう。アブラハムさんは心から神様を信じていたんですね。この神様の言われることは正しくて、必ず、お約束を守られる方、この神様は絶対に私たちを見捨てず、守ってくださる方だと知っていたんですね。だから、神様の言葉に「はい」と言うことができました。

このことは、「神様を信頼する」という言葉で言い換えることが出来ます。私たちが信じている神様は絶対大丈夫、神様は必ず私たちを守ってくださる、とアブラハムさんと同じように神様を信頼しましょう。神様を信頼する私たちを神様は祝福してくださいます。

〈お祈り〉

神様、あなたは私たちを愛してくださり、お守りくださるお方です。このあなたを信頼して、この一週間も歩めるようにしてください。そして、私たち一人ひとりに神様の祝福を与えてください。

7月9日　アブラハムの召命　小学科上級

〈ねらい①〉

「信じる」ことを貫く人生の確かさを伝える。

〈展開例①〉

「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召しだされると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです」(ヘブライ11:8)。

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです（ヘブライ11:1)。

みんなはドラえもんの道具の中で、何が一番欲しいですか。先生は子どものころ、タイムマシーンに憧れました。未来が見たかった。自分がどんな人間になっているのか、とても不安で、確認したかった。(でも今の先生を見たら、子どもの時の先生はがっかりするかもしれないね。）未来が見えないから、いつも僕たちは不安ですね。一秒後には死んでいるかもしれない。突然の災害、事故、事件……思いもかけないことが起こる。でもたった一秒先のことさえ、誰にも分からない。

でも今、先生はもう不安じゃありません。もしタイムマシーンを持っていても、もう使いたいとは思わない。神様を信じているからです。どんな未来が用意されているのかと考え出すと、今でも怖くなる時があります。でも神様が共にいてくださいます。私のことを、イエス様を与えてくださったほどに愛してくださった神様が、悪いようになさるはずがない。そう信じるから、どれだけ怖くても、明日が来て欲しいと望みます。神様が、私に与えてくださる未来を楽しみにしているのです。

〈ねらい②〉

「召しに応える」必要を共に考える。

〈展開例②〉

「召命」という言葉を知っていますか。英語ではコーリング、神様から呼ばれるということです。アブラハムさんは、神様から「ここを出発しなさい」と呼び出されましたね。皆さんにも同じように、神様から呼ばれる時が、必ずあります。直接、神様の声が聞こえるわけではない。聖書を真剣に読み、牧師の説教を自分のための言葉だと思って聞いていれば、あなたを呼び出す神様の声がきっと聞こえる。

「わたしの栄光を表しなさい」と神様はみんなを呼び出しておられます。そして、栄光を表すために、一人ひとりに一番ふさわしい道を用意していてくださいます。牧師や宣教師に召される人もいれば、困っている人や貧しい人のために奉仕する仕事に召される人もいる。その他にも、学校の先生、大工さん、花屋さん、コックさん、サッカー選手……色んな仕方で、「神様の栄光を表すように」と、一人ひとりが呼び出される。だから、いつも耳をすましていてください。

〈祈り〉

神様、アブラハムのように信じる力を私たちにも与えてください。あなたを信じる、魂の平安を与えてください。神様、アブラハムのように、あなたの声に応える力を私たちにも与えてください。あなたが用意してくださっている道を、強く雄雄しく歩んでいくことができますように。

7月9日　　アブラハムの召命　　中学科

〈ねらい〉

自分への主の召しを覚え、主と共に歩む将来を期待する。

〈展開例〉

①今日はアブラハムの「召命」のお話。召命という言葉はキリスト教用語。もとの言葉は「呼び出す」という意味。つまり、アブラハムが神様に呼び出されたときのお話。

Q．皆は誰に呼び出されて教会に来るようになったんだろう？ 教会の友だち？ お父さんやお母さん？ 日曜学校の先生？ アブラハムの場合、神様に呼び出されて、神様を信じる人生がスタートした。皆は色々な人を通して教会に来るようにけど、それは、そういう人たちをとおして、神様が皆を呼んでいるということ。じゃあ、神様はどんな思いで皆のことを呼び出したんだろう。

②皆が呼び出されたのは、神様が暇だったので、何となしに声をかけた、と言うのではない。「召す」っていうのは、国語辞典ではこんな説明。「上位者が目下の者を呼び寄せること」。王様やら社長から、用があって呼び出されるようなそんなイメージ。神様は意味もなく人とかかわろうとされる方ではない。神様は何か用事があって君を教会に呼び出した。

③アブラハムはどんなことのために呼び出されたのか。アブラハムには、命令と約束が与えられた。命令は「家を離れて」「示す地に行け」というもの（1節）。その理由はアブラハムを祝福し（2節）、そのアブラハムを経由して世界中の人々が神様から祝福される（3節）というもの。

一つのコップに水が注がれて、そこから水があふれて広がっていく、そんなイメージ。

④皆も同じ。神様はまず、君たちを大切にしたい。君たちを幸せにしたい。君たちを喜びで満たしたい。だから、お父さんやお母さん。友だちや日曜学校の先生をとおして、君たちを教会へと呼び出した。アブラハムから始まって、様々な人、様々な時代、様々な国を経由して、神様は君を呼び出した。神様と一緒に生きる人生をスタートさせるために。だけど、それだけじゃない。神様は君の人生が喜びで満タンになって、そこから嬉しさが溢れ広がるようにして、君の周りの人たちのことが祝福されるように望まれる。神様は、学校の友だち、家族、教会の人たちに、君の喜びが溢れ広がることを望んでおられる。

⑤そのためには、ときに神様を知らない人と距離をつくるように、神様から求められるときもある。慣れ親しんだ生活、人間関係。しかし、神様は君たちから宝を奪おうとされているわけではない。アブラハムは自分の財産をすべて抱えて旅だった（5節）。神様を一番にする人生の中で、本当の君の人生、本当の人間関係、こうしたモノはすべて与えられる。人生は旅のようなもの。皆も自分の将来をぼんやりと考えているかもしれない。具体的な行き先はそのうちに神様が教えてくれるだろう。ただ、君たちがどのような場所を目指して人生を歩むにしろ、一番に大事なのは、神様に従うということ。神様と共に、この広い世界を自由に生きていく君たちの将来のうえに神様の祝福があるよう祈りたい。

〈祈り〉

神様、私たちを呼び出してくださってありがとうございます。周りの人々に喜びが溢れるように、また、神様と一緒に生きていくために、毎日の中で、神様を一番にすることができるようにしてください。アーメン。

7月16日　アブラハムの約束　聖書研究

テキスト　創世記 15章1〜21節

旅人アブラムへの神の約束の御言葉は、創世記12章1節以下と13章14節以下に続いて三回目です。「恐れるな、アブラムよ」と主の言葉がありました。12章後半からエジプトで妻を妹と偽る生活、甥のロトとの別れ、周辺の諸部族の戦いに巻き込まれることなどが続きます。不安定な旅人アブラムには、内・外から押し寄せる危険や苦々しい経験がありました。広い土地と多くの子孫を与えるとの約束（13:14〜17）はどうなったのでしょうか。神の約束への疑いもありました。アブラムは老齢の自分たちには子供は与えられないと思い、しもべエリエゼルが跡を継ぐものと考えました。15章は恐れや弱さの中にある人間アブラムにたいして、神の一方的な恩寵あふれる約束がテーマです。15章の約束も多くの子孫と広い土地についてでした。子孫については、はじめて夜空の星にたとえられます。公害のない古代社会にあっては、満天に輝く星はとても数えることができません。ついに「アブラムは主を信じた」のでした。そして「主はそれを彼の義と認められた」のです（15:6）。

この15章6節は、新約聖書でパウロやヤコブが信仰義認を語るときに、引き合いに出される御言葉です（ローマ4:3，9，22，23、ガラテヤ3:6、ヤコブ2:23）。ヤコブの場合は、ただ信仰によって義と認められたというその信仰は、行いを伴うものであると言います。これはパウロの信仰義認に対立するものではありません。いずれにしても「義と認められた」というのは「神とのあるべき関係にある」と、神が認めてくださることです。このときのアブラムの信仰がどれほど深かったのかとか、確信に満ちていたのかということは記されてはいません。ただ信じたのです。「信じた」という言葉は、「アーメン」と語源を等しくするものです。真実であると確信する、信頼するなどの意味があります。神の約束の御言葉をアブラムはこのとき受け入れ信頼しました。彼は恐れや弱さに取り囲まれ、自分自身にも周りの状況にも、より頼むものを持ちませんでした。ただ神の約束の言葉に信頼するしかなかったのです。私たち信仰者の行いが生涯にわたって罪の腐敗・汚れのもとにあるのと同様、私たちの信仰もさまざまの弱さをもち続けます。ただ真実なことは神の御恵みです。

そういうアブラムに、神は約束のより確かな保証を与えられます。それがアブラムと結ばれた「契約」（15:18）でした。アブラムに対して初めて「契約を結んで」と言われましたが、その内容は創世記12章1節以下や13章14節以下の約束と同じものです。ただ未来に実現することの確かさと、契約実行の保証という点で際だっています。15章13節の「異邦の国」はエジプト、そこでアブラムの子孫は寄留者となり400年間の奴隷生活を送ります。出エジプト12章40節には430年とありますが、400年間というのは概数と考えてよいでしょう。その間、神の約束通りアブラムの子孫は、天の星のように（15:5）、大地の砂粒（13:16）のようになりました。契約実行の保証ということでは、15章9節以下に記されている奇怪にも思える儀式に示されました。雌牛、雌山羊、雄羊を二つにきり裂き、山鳩と鳩の雛も並べるように言われました。暗闇に覆われた頃、神の臨在の印としての、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎていきました。これは当時のオリエント世界の契約締結の儀式でした。その意味は動物の間を通る者が、もし契約を破ったならば、私はこの裂かれた動物のようにされてもよいということを表すものでした。驚くべきことにそこを通ったのは、アブラムではなく神ご自身でした。神の側の一方的な契約に対する誠実さ・真実さの現れでした。これはなんという驚きでしょうか。

（中根汎信）

7月16日　アブラハムの約束　説教展開例

テキスト　創世記 15章1〜21節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問28

〔単元のねらい〕

「アブラハム契約」について学ぶ。旧約のアブラハムとの間に契約を結ばれた神は、イエス・キリストの父なる神である。恵みの契約において示された神の驚くべきへりくだり、またそこに示されている神の大いなる愛を心深く覚え、子どもたちとともに神をほめたたえたい。

「神さまのへりくだり」

聖書にはたびたび「契約」という言葉が出てきます。というよりも、「旧約聖書」「新約聖書」の「約」は「契約」の「約」です。つまり、聖書そのものが契約の書物であると言ってよいのです。

では契約とは何でしょうか。聖書では、契約とは神さまと人間との愛の交わりを言います。造り主なる神さまはわたしたち人間を深く愛してくださいます。わたしたちもまた神さまの愛にこたえて、神さまを愛して生きています。この愛の関係そのものを契約の関係と言うのです。

ただ、よく考えてみると神さまと人間との間に契約が成り立っていること、すなわち神さまと人間が出会い、おたがいに交わりを持つことができるというのは、不思議なことです。なぜなら、神さまは人間をはるかに超えておられるからです。神さまは天におられますが、人間は地にあるからです。天と地の間は、目もくらむほどにへだたっているはずです。

それなのに、なぜ神さまと人間との間に契約の関係が成り立つのでしょうか。その可能性はふたつです。ひとつは、人間が天高くのぼって、神さまと同じところに立つことです。けれども、人間にそんなことはできっこありません。

もうひとつの可能性は、神さまのほうで人間の低さにまでくだってきてくださることです。実は、神さまはこのことをなさいました。神さまはへりくだって、低くなられました。それゆえに、人間との間に契約を結ぶことがおできになったのです。そして、それは神さまが人間を深く愛しておられたからこそなのです。

そのことを、神さまがアブラハムとの間に結ばれた契約をとおして確かめてみましょう。

先週も見たように、神さまはアブラハムの子孫を海辺の砂、空の星のように増やすことを約束してくださいました。アブラハムとその子孫を豊かに祝福し、大いなる国民とするとおっしゃったのです。これが、神さまがアブラハムとの間に結ばれた契約の中身です。

そしてそのとき、アブラハムに次のようにお命じになりました―三歳の雌牛と雌山羊と雄牛をふたつに切り裂きなさい。そして、向かい合わせに置いておきなさい。

アブラハムがみ言葉のとおりにすると、神さまはアブラハムを深い眠りに落とされました。日が沈み、あたりが暗闇に覆われたころ、突然煙を吐く炉と燃えるたいまつが現れました。聖書では火は神さまがそこにおられるということのしるしですから、この炉とたいまつは、神さまご自身をあらわしています。

そして、その炉とたいまつとが、アブラハムがふたつに切り裂いた動物の間を通り過ぎていったのです。すなわち神さまが通り過ぎていかれた、ということです。

これが神さまがアブラハムとの間に結ばれた契約のしるしです。不思議だな、どういうことなのかな、と思うかもしれません。けれども、このし

るしにはちゃんと意味が込められています。

つまり、神さまはアブラハムにこのように誓われたのです―アブラハムよ、わたしはあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を増やし、大いなる国民とすると約束した。わたしはこの約束を必ず果たす。もしもわたしの側でこの約束を破るようなことがあったなら、わたしはあなたの手でこの動物のようにふたつに切り裂かれてもかまわない。

神さまの驚くべきへりくだりです。そして驚くべき、人間に対する真実です。このとき、このように誓われたのは神さまのほうだけで、アブラハムには何も求められませんでした。アブラハムは深い眠りに落ちていたのですから。

これほどまでの真実さで、神さまはわたしたち人間の命と人生とを祝福してくださるのです。それはわたしたちを愛しておられるからです。

アブラハムとの間に契約を結ばれた神さまの大いなるへりくだりは、ひとり子のイエスさまをまことの人となして世にお遣わしになったことに、さらに鮮やかに示されています。イエスさまにあって、まことの神さまはまことの人となられました。そして罪人のひとりに数えられ、十字架に死なれ、三日目に復活されました。それは神さまがみずからわたしたちの罪を贖い、わたしたちに永遠の命を与えてくださるためでした。

神さまはわたしたちへの愛ゆえに、へりくだってわたしたちのところに来てくださいました。わたしたちとひとつとなってくださいました。そしていつまでもわたしたちとともにいてくださるのです。

（木下裕也）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 3章16節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。
独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

7月16日　アブラハムの約束　幼稚科

〈ねらい〉

アブラハムのように、なかなか信じられないときでも、神さまの約束を信じて、期待することができるように。

〈暗唱聖句〉

アブラムさんは、「主を信じた」。

〈展開例〉

今日もアブラムさんと神さまとのお話です。

①「主の言葉に従って旅立ったアブラムさんはカナンというところにつきました。すると神さまが現れて、「ここが約束の場所だよ」と言われました。アブラムさんは嬉しくて、そこに礼拝する場所を作りました。

②しかし、そこにはカナン人たちが住んでいたので、アブラムさんたちはさらに旅を続けました。その旅は厳しいものでした。飢饉があったり、戦争になったり、さらには」さらには一緒に旅をしていた甥のロトと分かれたりと、心が休まるときがありません。

③でも、アブラムさんは神さまに従っていったので、まわりの王さまたちからも尊敬され、大金持ちになりました。

④しかし、そんなアブラムさんには心配していることがありました。それは、アブラムさんには子どももいなかったので、「神さまはわたしを幸せにすると言ったのに、子供がいなくては財産がどれだけあったって幸せではない」。アブラムさんはそう考えていました。

⑤ある日、幻の中で神さまが現れてこう言いました。「恐れるな、アブラムよ。私はあなたを守る盾。あなたをかならず幸せにする」。でも、アブラムは悲しそうに言いました。「子どもがいなかったら、どんなにたくさんの財産があっても、わたしは幸せではありません」。

⑥悲しい顔をしているアブラムさんを、神さまは外に連れ出して言われました。夜の空にはたくさんの星が輝いています。神さまはやさしくアブラムさんに言われました。「アブラム。空を見てごらん。星がいくつあるか数えられますか」。アブラムさんは、「いいえ、とても数えられないくらいたくさんあります」。「そうだろ。わたしはあなたに約束する。あなたの子孫はこのようにたくさんになる」。

⑦アブラムさんはびっくり。まだ一人も子供がいないのに、こんなにたくさんの子孫が生まれるなんて信じられない。アブラムさんもそう思いかけました。でもアブラムさんは神さまの約束を信じました。神さまはそんなアブラムさんを見て、正しいことだと言って喜んでくださいました。

⑧それから、何度も空の星を見るたびに、アブラムさんは神さまの約束を思い出しました。そして、いつ神様はお約束をかなえてくださるのだろう。そう思うと毎晩が楽しくなりました。

〈お祈り〉

アブラムさんの旅を守ってくださってありがとうございます。アブラムさんは神さまの約束を信じました。私たちも神さまの約束を信じることができるように信仰を与えてください。アーメン。

7月16日　アブラハムの約束　小学科下級

〈ねらい〉

神様の約束の意味を知り、神様は必ず約束を果たされるお方であることを感謝する。同時に、私たちも神様に従う子どもとして歩む。

〈はじめに〉

日曜学校の奉仕者のために祈りましょう。もしかしたら、奉仕者がもっと与えられたいと願っておられる日曜学校もあるのではないでしょうか。主に祈り求めましょう。主は必ず、必要な新たな奉仕者を与えてくださいます。共に子どもたちのために祈り、教え、救いに導くために労する方が与えられますように。すでに、共に奉仕している日曜学校教師の為にもお互いに祈り合い、支え合っていきましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①アブラハムには子どもはいましたか？

②神様はアブラハムを外に出して空を見るように言われました。そして、何を数えることができるかと言われましたか？

③夜空にある星を全部数えることはできますか？

④神様はアブラハムに星のようなたくさんの何をお与えになるとお約束されましたか？

⑤アブラハムはその約束を信じましたか？

〈展開例〉

お友だちとのお約束を毎日私たちはしていますね。学校でもお約束があります。お家でもあると思います。どんなものがありますか。もし、その決めたお約束を守れなかったとしたら、どうしますか。何か罰がありますか。

今日のアブラハムさんは、神様からのお約束が与えられました。これまでもアブラハムさんは、まだ見ていないところへのお引越しや大変なことがたくさんありました。でもアブラハムさんは神様を信じてきました。今日の聖書では、普通に考えたら、絶対無理と思うような出来事、アブラハムさんもサラさんもおじいさんおばあさんになっているのに、これから星の数のようにあなたがたに子どもを、またその子どもをたくさん与えますよ、という神様のお約束をアブラハムさんはいただいたのです。その神様のお約束に今度もアブラハムさんは「はい」と言って信じました。6節「アブラムは主を信じた」とあります。そして、土地を与えて子どもに継がせると約束されました。また、そのお約束が本当ですよ、神様は必ずこのお約束を守りますよ、というしるしを神様の方から、アブラハムさんに良く分かるように見える形でくださいました。神様は人間の本当かな？心配だな？ という気持ちをよく分かっておられる方ですね。

神様という方は、お約束を必ず守る方であることに信頼しましょう。何よりもイエス様をお与えくださったほどに私たちを愛してくださっている方だからです。

〈お祈り〉

神様、あなたを賛美します。私たちひとりひとりを愛してくださりありがとうございます。神様を信頼する思いを今週も私たちの心のうちにつくってください。

7月16日　アブラハムの約束　小学科上級

〈ねらい①〉

神の約束に基礎付けられた、信仰者の希望を伝える。

〈展開例①〉

「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです」(使徒言行録2:38～39)。

私たちは、イエス様を信じるだけで、罪赦され、永遠の命を与えられます。絶対です。世界中のすべての人が、そんなこと赦さないって言ったって、ひっくり返ることはありません。だって神様が、聖書にはっきりと約束してくださっているからです。私たちの希望は、ただ神様の約束にだけあります。天地が崩れ去るときもありましょう。私たちの弱い心が、神様を信頼できずに揺れ動くこともありましょう。でも神様の約束は絶対に変わりません。

「約束してくださったのは真実な方なのですから、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう」(ヘブライ10:23)。

〈ねらい②〉

説教展開例に従い、契約を結んでくださった神のへりくだりのありがたさを伝える。

〈展開例②〉

先生の子どもの頃は、友だちと何かを約束する時に、「絶対？ 命かける？」と聞くのが流行っていました。今でも言いませんか？ いつもは冗談で、「おう、かけるよ。命かける」って、みんな軽く言っていました。でもある時、一人の友だちがとっても深刻なお話をして、その秘密を守って欲しいとお願いしてきました。そして「絶対？命かけてくれる？」と聞くのです。その時は、先生も他の友だちも、「うん、命かける」とは言えませんでした。真剣な約束だったからです。

神様が私たちと結んでくださった約束、つまり「イエス様を信じる者を救う」という約束は、真剣な約束の中でも、一番真剣なものです。僕たちが永遠の救いを得るか、永遠の滅びを味わうかが、この約束にかかっている。こんな大事な約束。「絶対、命かける」なんて簡単には言えません。でも神様は、この約束は絶対だと言われます。それを証明するために、命かけるどころか、一番大切な独り子イエス様の命を私たちに差し出してくださいました。私たちのために、いと高き神様がそこまでしてくださったのです。それほどの誠実が込められた約束なのです。

〈祈り〉

神様、あなたが命をかけて、救いを約束してくださったことに感謝をします。あなたの約束に、ひたすらより頼んで、いつも恐れず歩むことができますように。

7月16日　アブラハムの約束　中学科

〈ねらい〉

契約に込められた神様の愛に感謝する。

〈展開例〉

①先週はアブラハムの召命から、神様が私たちを呼び出したのは、私たちを祝福したかったからだと知った。今日は、神様がどれほどに私たちを祝福したいと思われているかについて覚えたい。

Q．先週から「祝福、祝福」と言っているが、皆は、その意味を知ってるだろうか？ 祝福ってどんな意味？「祝福」というのは「神様の愛によって恵みを与えられる」という意味。だから「皆が神様から祝福される」とは「皆が神様の愛によって恵みを与えられる」ということ。

②小さいときから教会に来ている人は、ひょっとしたら「神様は君を愛している」という言葉に慣れっこになっているかもしれない。だけど、本当はこれはあり得ないこと。世界のトップスターがいきなり「君と友だちになりたい。そのために君と友だちになる約束を交わそう」、こんなことを言ってきたら君は戸惑うだろう。神様が君と愛し合う関係を求めているというのは、それよりも遥かにあり得ないこと。

③今日の説教で神様はアブラハムと契約を結んだ、と言われていた（18節）。契約というのは神様が皆のことを大切にして、接し続ける、という約束。なんで、神様は皆のことを大切にしようとするのか。理由なんかない。神様が君と一緒に生きていこうと決められたから。ただそれだけ。トップスターと友だちになるには、君がどれだけ願ったとしても相手がやって来なかったら永遠に、相手と知り合いになることはない。嵐やAKB48が君たちと友だちになりたいかどうかは知らないが、神様は人間と一緒に生きていくことを望まれた。そのためには神様の方から君たちに近づくしかなかった。そして、人間と神様が、そんな途方もない関係を持っているということの証拠として、契約を下さった。

④これだけでも、あり得ない話だが、これだけじゃない。神様が君たちと一緒に生きていきたいという思いは、その契約の儀式に、これまたあり得ない形で現わされた(9節～10節。17節朗読)。これは、当時の習慣で「約束を破ったら自分が真っ二つにされても仕方ない」という強い誓いを現わす儀式。神様はこれほどの思いをもって君たちを祝福することを願っている。そして、神様は自分の愛する独り子であるイエス様を犠牲にしてまでも、君たちと一緒に生きて、君たちを祝福することを求められた。君たちが教会で聞き続けている「神様は君を愛している」という言葉は、あり得ない相手のあり得ない歩みよりとあり得ない思いによって成り立っている、あり得ない約束だということに、驚きと感謝を覚えたい。

⑤ただ、神様は君たちを幸せにする仕方にこだわりを持っている。それは、神様が約束し、相手がそれを信じて従うというプロセスを踏むこと(6節)。神様はこういう方法も込みで、君たちと幸せを満喫することを願われている。「神様はその独り子をお与えになったほどに君を愛された。」それは「独り子を信じる君が滅びることなく、永遠の命を得るためである」この驚くべき愛の約束を信じて、祝福された一週を求めたい。

〈祈り〉

約束をくださり、それを守ってくださる神様。あなたの約束を信じて、あなたの祝福に感謝してあなたと毎日を過ごせますように。アーメン。

7月23日　イサクの誕生　聖書研究

テキスト　創世記 21章1節～8節

〈サラの信仰〉

「イサクが生まれたとき、アブラハムは100歳であった」(5)。

このとき、妻のサラは90歳でした（17:17)。二人とも高齢であったにも関わらず、子供が与えられたことが強調されています。誰もが信じられない出来事でした。そして、サラも神の約束を聞いて、嘲笑しました（18:12)。このとき、サラは、自分の目で判断し、神の力を侮っていました。けれども、それが実際にアブラハムとサラの間に子が与えられることにおいて、この嘲笑は、6節以降の心からの喜びの「笑い（イサク)」へと変化します。

「神はわたしに笑いをお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑い（イサク）を共にしてくれるでしょう」(6)。

後半の新共同訳を見ると、「聞く者は皆、わたしと笑いを共にしてくれるでしょう」と、一緒になって共にイサクの誕生と成長を祝うように訳されています。しかし、後半の部分を直訳すると、「聞く者は誰でもわたしのために笑うでしょう」となります。また同時に、「イサクは、わたしのもの」といった含みもあります。つまり、誰が私たちの老齢出産を嘲笑しようと、「イサクはわが子である」という意味が含まれており、サラ自身の、この子をどんなことがあっても育てるといった覚悟が暗示されているということになります。

アブラハムにお告げがあったとき（18:1～15)、サラ自身、神の力を疑い、一瞬、信じようとしませんでした。これが嘲りの笑いでありました。けれども、今や神の約束が目に見える形となって、喜びの笑いとなりました。ここでは、嘲りの笑いと喜びの笑いが対比されていることに気付きます。おそらく、サラは、その事実をよく知った上で、「今、周囲から嘲笑を受けようとも、それはかまわない」といった覚悟を示したのでしょう。また、その中には主に対する悔い改めの思いがあったと思われます。悔いて、改めてサラの心からの喜びが言い表されているのではないでしょうか。周囲から来る逆境を乗り越えて子を育てていく信仰が言い表されていると思われます。

〈主の約束とその祝福〉

しかし、ここで聖書がとくに強調しているのは、1、2節です。「主は、約束されたとおりサラを顧み、……神が約束されていた時期であった」です。

アブラハムの神である主が、アブラハムとサラを憐れんだ。その憐れみ方は、「神が約束したとおりに」でした。ここでは、主の主権性と恩寵性が述べられています。また、ここでの「時期」とは、「時機（機会、チャンス)」という風に言ってもよいかもしれません。そこから、私たちの信じる神は、勝手気ままな憐れみをなさるお方ではなく、その人にとって一番よい仕方で憐れまれる主なる神であるということを私たちに教えているのではないでしょうか。その中で、イサクが誕生したのです。アブラハムとサラは高齢であったが、イサクがこのときに誕生したのは、アブラハムとサラにとって一番よい時機であったということ。そのような祝福を与えてくださる主なる神を私たちは信じるのです。　（潮田　祐）

7月23日　イサクの誕生　説教展開例

テキスト　創世記 21章1節～8節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

「あなたは多くの国民の父となる」という約束と「男子は割礼を受けよ」という契約を神から告げられたアブラハムは、「百歳の男に子供が生まれるだろうか、九十歳の妻に子供が産めるだろうか」と笑った。神はその事実を覚え、約束によって生まれる男子を「イツハク（彼は笑う）」と名付けるよう命じられた（創世記17章）。人の不可能を可能になさる神は、苦笑（嘲笑）に支配された者のために笑いを造られる。しもべの不信仰と主の真実を知らされる笑みである。

「笑いを造りだす神さま」

笑いがとまらない。顔いっぱいに笑みをたたえる。あなたとわたしが、お互いにほほ笑みをかわす。そんな毎日だったら、そんなおうちだったら、そんな学校だったら、どんなに幸せでしょう。腹の底から笑いがわきあがってきて、頭でとめようと思っても、どうしてもとめられない。喜びをかくしておくことができなくて、目尻がさがり、口元がほころび、鼻歌まで出てきてしまう。嬉しさを分かちあいたくて、ほほ笑んでくれる誰かをさがしている。ありがとうの気持ちをつたえたくて、こころからのことばをその人にとどけようとする。そんな自分を、そんな相手を、とても大切におもえる。そんな温かいあいだがらを、親しいまじわりを、お互いに敬うきもちを、かけがえのないものに感じる。それは……自分の内側に、そして相手の内側にも、なくなることのない尊い思いがあるからです。生きたまじわりを生みだす、ほんものの笑いがあるからです。

それがないのは、本当にさびしいものです。なんとか笑いを造りだそうとします。自分の内側はからっぽなのに、外側を笑いでかざろうとする。自分は幸せなのだと自分に思わせるために、誰かの不幸せを見つけだして、うす笑いを浮かべる。自分は賢いのだと自分をあざむくために、誰かのことをばかにして、あざ笑う。自分は偉いのだと自分をつくりあげるために、誰かのことを見下げて、鼻で笑う。そんなことをしている自分に気がついて、にが笑いする。そんな毎日になっていませんか。そんなお家や学校になっていませんか。もしもそうだとしたら、今日の聖書のおはなしをよく聴いてください。神さまがほんものの笑いをくださるでしょう。

「アブラムよ、あなたは生まれ育った土地を去りなさい。父の家を離れなさい。わたしが示す土地へ行きなさい。わたしはあなたを祝福して、大いなる国民とする」。そう仰せになった神さまの言葉に従って旅立ったとき、アブラムは75歳でした。「恐れるな、アブラムよ。天を仰いで星を数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる」。そう仰せになった神さまの約束をアブラムは信じましたが、その時まだ、彼には子供がありませんでした。神さまの示された土地に入ってからも、アブラムの妻サライには子供が生まれず、年月は過ぎてゆきました。

そんなある日のこと。「アブラムよ、わたしは全き神である。あなたはわたしに従って、全き人になりなさい。あなたはアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とする。あなたの妻をサライではなく、サラと呼びなさい。わたしは彼女を祝福し、彼女によってあなたに男の子を与えよう。彼女はもろもろの国民の母となる」。そう仰せになった神さまの前に、アブラハムはひれ伏しました。ところがこのときに、彼は笑ったのです。心のなかでつぶやいたの

です。「100歳の男に子供が生まれるだろうか。90歳のサラに子供が産めるだろうか。ツァハーク！ これが笑わずにいられようか」。アブラハムのすがたは、神さまを信じて従う姿勢でした。しかし彼のこころは、神さまのお言葉を笑っていたのです。この笑いは、戸惑いの笑いでした、疑いの笑いでした、嘲りの笑いでありました。神さまはアブラハムのすがただけでなく、こころを見ておられ、こう仰せになります。「あなたの妻サラは、あなたとの間に男の子を産む。その子をイツァハーク（彼は笑う）と名づけなさい」。アブラハムが笑ったことを、神さまは見抜かれました。そして彼自身そのことを、これからもずっと忘れないようにと、神の約束の子の名をイサク（笑い）とお定めになったのでした。

ほどなくして、ある暑い日のお昼のこと。三人の客人がアブラハムの家を訪れます。彼らが神のみ使いとはつゆ知らず、アブラハムとサラは客人をもてなします。すると彼らはこう告げるのです。「来年の今ごろ、あなたの妻サラに男の子が生まれているでしょう」。それを耳にしたサラは、客人の顔を避け、ひそかに笑います。「夫はすっかり老人になってしまいました。私もとっくに子供を産める望みはなくなってしまいました。ツァハーク！笑うしかありません」。この笑いは、悲しい笑いです、あきらめの笑いです、絶望の笑いなのです。するとそのとき、彼らは言うのです。「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずはないと思ったのか。主なる神にできないことがあろうか」。サラが笑ったことを、神のみ使いは見抜きました。しかし彼女を叱るのではなく、その悲しみを受け留めてくれたのです。神にできないことはないのだと励ましてくれたのです。

神さまは、アブラハムに約束なさった通り、彼の妻サラをみこころに留められました。人間には絶対できないことを、主は成し遂げてくださいました。90歳のサラがお腹に子を宿し、100歳のアブラハムに男の子を産んだのです。それは、あの三人の客人、神のみ使いたちが訪れた日から、ちょうど一年後のことでした。

アブラハムは、サラの産んだ男の子をイサク（彼は笑う）と名づけました。名づけ親は、神さまでした。一年前、神さまのお言葉を笑ってしまったことを想い起こして、アブラハムは胸が痛んだでしょう。その痛みとともに、腹の底から笑いがこみ上げてきて、嬉しくてしかたがありませんでした。自分の力で得たのでなく、ただ神さまの約束と祝福によって生まれた、その子を自分の子供として与えられたからです。サラは言いました。「神さまは私のために、笑いを造りだしてくださった（イサクを与えてくださった）。そう聞く人は笑うでしょう（イサクをともにしてくれるでしょう）。」

神さまの祝福とは、こういうことなのです。人間が自分の能力で子供を得ること、そのことが祝福なのではありません。そうではなくて、人間にはとうてい不可能なことを、神さまが可能としてくださる、これこそ祝福なのです。あるいは、しもべが自分の行いによって主のお約束を実現すること、そのことが祝福なのではありません。そうではなくて、もはや神の約束を信じるほかに道はない、しかしそう信じることさえ笑ってしまうほど難しく悲しい、そんなしもべを主が憐れんでくださる、赦してくださる、顧みてくださる、これこそ祝福なのです。

アブラハムとサラを祝福してくださった神さまは、今ここにいるあなたを祝福してくださいます。十字架で死んだイエスさまを復活させた神を信じるなら、あなたもアブラハムの子供となる。この約束を神さまが成し遂げてくださるのです。から笑い、うす笑い、あざ笑い、にが笑い。そんな笑いに縛られているあなたに、アブラハムの神さまは、ほんものの笑いを造りだしてくださいます。あなたを「イツァハーク＝笑い」と名づけてくださるのです。

（二宮　創）

〔今週の暗唱聖句〕　ローマの信徒への手紙 9章8節

肉による子供が神の子供なのではなく、
約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。

7月23日　イサクの誕生　幼稚科

〈ねらい〉

自分の力ではなく、神さまにはできないことはないことを、イサクの誕生物語から知る。

〈暗唱聖句〉

「神さまにはできないことはない」。

〈展開例〉

①みんなは神さまがアブラムさんにしてくださったお約束のことを覚えていますか？　空のたくさんの星を見ながら、「あなたの子孫をこの星のようにたくさんにする」とお約束してくださったのだったね。でもその約束はなかなかかなえられず、アブラムさんは99歳のおじいさんに、サラさんも89歳のおばあさんになっていました。

②神さまのお約束のことも半分忘れかけていたころ、神さまはアブラムさんに現れて言われました。「あなたとサラの間に男の子を与えよう」

③しかし、アブラムさんは思いました。「もうすぐわたしは100歳に、サラは90歳になろうと言うのに、そんなことあるわけないじゃないですか。わたしにはそんな力はありませんよ」。アブラムさんは呆れて、ふっと笑いました。

④しかし、神さまは言われました。「わたしの約束は必ず実現します。あなたとサラとの間に生まれた男の子にイサクと名付けなさい」。そう言われると、天に昇って行かれました。

⑤「本当にそんなことがあるのかな。でも神さまが約束してくださるのなら、神さまにはできないことはない。そう信じよう」。アブラムさんはそう固く決心しました。

⑥しばらくたって、三人の人がアブラハムさんを訪ねました。神さまと二人の御使いでした。彼らのひとりが、「奥さんのサラはどこにいますか。来年の今頃、サラに男の子が産まれているでしょう」と言いました。

⑦サラはそれを聞くと、「もうすぐわたしは90歳に、アブラムは100歳になろうと言うのに、そんなことあるわけないじゃないですか。わたしにはそんな力はありませんよ」。サラさんも呆れて、ふっと笑いました。

⑧それを見た神さまは言われました。「あなたが今笑ったのは、自分にはできないと思ったからでしょう。でも、神さまにはできないことはありません。来年の今頃、確かに男の子が産まれます」。サラは自分が神さまの約束を信じないで笑ったことが恐ろしくなりました。

⑨それから一年が経って神さまの約束された時期に、サラに男の子が生まれました。神様の言いつけどおりに、アブラハムさんは、その子を「イサク」と名付けました。

⑩サラは思いました。私は神さまの言われることを信じないで笑ったのに、神さまは私に笑いをお与えくださった。神さまにはできないことはない。みんないっしょに喜び、笑おう。

〈お祈り〉

アブラハムさんとサラさんにイサクを与えてくださった神さま。あなたにはできないことはありません。わたしたちも自分の力では、神さまを正しく信じることはできませんが、神さまが私たちを信じることができるようにしてください。アーメン。

7月23日　イサクの誕生　小学科下級

〈ねらい〉

神様は必ず約束を守られるお方であること信じる。神様の祝福について考える。

〈はじめに〉

いよいよ夏休みが始まりました。子どもたちが分級のお部屋に入ってくる顔も違うのではないでしょうか。この夏の子どもたちのスケジュールが守られ、全ての危険から一人ひとりが守られて元気に過ごすことが出来るよう祈りましょう。子どもたち同志もお互いに誘いあって日曜学校来ることが出来ますように、励ましましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①アブラハムさんとサラさんに生まれた赤ちゃんの名前は何ですか。

②イサクさんが生まれたとき、アブラハムさんは何歳でしたか。

③サラさんは、神様はサラさんに何をお与えになったと言いましたか。

〈展開例〉

先週は、神様に従わない人たちを滅ぼしてしまうという、悲しいお話でしたが、今日は、明るいお話ですね。神様のアブラハムさんとサラさんに「子どもを与えるという」お約束は本当でした。なんと、アブラハムさんは100歳、そしてサラさんは90歳というおじいさんとおばあさんになってから、このお約束が実現しました。

アブラハムさんとサラさんはどんな気持ちでずっとずっとこのお約束を待っていたと思いますか。待ちくたびれたり、もうダメかもしれないと思ったり、神様の方法ではなくて自分たちでこうしたらいいかも？ と一生懸命考えたり、もう忘れようと思ったことが何度あったでしょう。でも、神様はこのお約束を忘れていなかったんです。忘れていないどころか、神様は「この時に」と神様のご計画がちゃんとあったのですね。私たちは、まだ見えないことやどんなに考えてもありえないことを信じることは難しいけれど、必ず神様はどんなときにもお約束は守られる方なのです。

生まれた赤ちゃんの名前はイサクさんでした。アブラハムさんもサラさんも赤ちゃんが生まれることを聞かされたとき、そんなことがあるでしょうか？と思わず笑ってしまいました。イサクさんの名前の意味は「笑い」ですね。

私たちはどんな時に笑いますか？ うれしい時、おかしい時、照れ笑い、苦笑い、いろんな時にみんなのお顔はいろんなお顔に変わります。神様を心から信じて、神様に従っていくとき、悲しい時も、苦しい時も神様は私たちに笑顔をくださいます。私たちには分からないけど、神様は全てご存知で、この神様について行こうと決心した時、私たちのお顔はきっと明るいと思います。神様の祝福を信じて歩める私たちは何と幸いでしょう。

〈お祈り〉

神様、今日も神様の祝福を私たちにくださってありがとうございます。神様の祝福をいただいて、今日から始まる一週間も笑顔ですごすことが出来ますように。

7月23日　イサクの誕生　小学科上級

〈ねらい〉

「不信仰の父」でありながら、やはり「信仰の父」であったアブラハムの信仰にならう。

〈展開例〉

アブラハムさんは「信仰の父」と呼ばれました。「神様を信じる」とはどういうことであるか知りたいなら、この信仰の父を見ればいいのです。でもアブラハムさんはずっとずっと神様を、ぶれることなく信じ続けることができたのかというとそんなことはありません。私たちと同じように、神様を信じることのできない弱さも持っていました。いくら神様でも、そんなこと不可能だ……と言ってしまう不信仰を抱えていました。

創世記17章17節。開いてください、旧約22ページ。「アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、ひそかに言った。『百歳の男に子どもが生まれるだろうか。九十歳のサラに子どもが産めるだろうか』」。

アブラハムは神から星の数ほどの子孫を祝福されるという約束を与えられていました。でも次第に年を取り百歳を超えました。でも神はこのような現実にもかかわらず、アブラハムにむかって、前とまったく同じ約束を繰り返されるのです。それを聞いて思わずアブラハムは笑ったのです。相手の言うことを「笑う」、これほど失礼なこともないでしょう。絶望しきって「そんなこと信じられるわけがない」ってあきれてるのですから。神様に対する最も失礼な態度です。神様は、命をかけて約束してくださっているのに、笑ってるのですから。神様への暴言や文句よりも、もっとものすごいものが、この笑いです。

そんなアブラハムさん。「信仰の父」というよりも、「不信仰の父」のようですね。でも神様は、そんなアブラハムを祝福してくださいました。そしてアブラハムは、そんな神様にすべてをお任せして歩みました。子どもを与えてくださるという神の約束など、もうとても信じられない。これまで神様の言葉をよく聞いて生きてきたけど、全部無駄だったじゃないかとやけくそになってしまってもおかしくない。でも彼は、決して後ろを向かなかった。神様から離れようとはしませんでした。私たちと同じように、信じきれない心を抱えながらも、でもそんな自分のままで、神様と共に歩み続けた。そんなアブラハムだからこそ、「信仰の父」と呼ばれるのです。

ローマ4章18節に、このアブラハムのことが書かれています。「彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、『あなたの子孫はこのようになる』と言われていたとおりに、多くの民の父となりました」。望むことができないのに、なおも望みつつ信じた。それがアブラハムの信仰です。色んな困難や苦しみの前で、「そんなの不可能だ」と思わず言ってしまうことはあるさ。でもそんな時も、なおイエス様を見上げ、神様の愛を信じて生きる。そんな私たちに、神様はアブラハムと同じような祝福を満たしてくださいます。心からの「笑い」を与えてくださいます。

〈祈り〉

神様、あなたの真剣な約束を笑ってしまうような、私たちの不信仰を赦してください。どんな時も、神様とともに生きることができるようにしてください。どうか、弱い私たちを祝福してください。

7月23日　イサクの誕生　中学科

〈ねらい〉

不思議な神様の約束への嘲笑を、喜びの笑いに変えてくださる神様に感謝する。

〈展開例〉

Q．みんなは聖書の約束の中で「それは無理だろう」とか「それはあり得ないなあ」と思うことはないか？　慣れ親しんでる言葉かもしれないが「神様が君に永遠の命をくれる」とか「君の人生はイエス様によって光輝く」とか、冷静に考えればあり得ない約束を君たちは聞き続けて来たことと思う。皆は中学生。人によりけりだが、小さな頃から聞かされ続けてきたことに疑問が湧き出すのも自然な年頃。神様が聖書でなされることは、驚くことが多い。これを素直に「おぉ！　神様すげえ！」と驚くか、「えぇ?!　それはないだろう？」と驚くかで、神様へ向ける気持ちはまったく違ったものになる。

①今日の話では「えぇ?!　それはないだろう？」と神様の約束をどこか小馬鹿にしたアブラハムと妻サラの姿が記されている。冷静に考えればアブラハムの思いはもっとも。もし君たちが「来年の今頃、あなたの身長は絶対に50㎝伸びる」、こんな約束をされても、信じられないのが普通。成長期なら可能性はゼロじゃない。でも、アブラハムが約束されたのは、それよりあり得ない話。100歳と90歳の夫婦に子どもが与えられる。そりゃ、当然、鼻で笑いたくもなる。

②しかし、これはどんなことでも実現する力のある神様からすれば失礼な話。神様は、人間が自分の力では諦めるしかないほどの喜びを与えようとしているのに、恵みの受け取り手である当の本人が本気で相手をしていない。

③もし、君たちに何か聖書の約束への疑いがあるのだとしたら、それはこの時のアブラハムと似ているかもしれない。神様の方は君の人生が一番輝くように準備万端整えて、手ぐすね引いて君を幸せにしようとしている。それなのに幸せをもらうはずの君が神様の約束を本気になって聞かないなら、こんな失礼なことはないだろう。

④だが、神様の凄いところは、人間が信じることのできない、笑うしかない冗談みたいな約束を実現してくださるところ。神様は嘲笑うアブラハムに、子どもの名前は「彼は笑う」としなさい、と言われた。神様の本気さを突きつけられてアブラハムの乾いた笑いは一気に凍りついたかもしれない。少なくともサラは恐ろしくなった。神様の約束を小馬鹿にして笑う心を神様は見逃さない。「冗談かどうか、あなたに思い知らせてあげよう」。神様はまったくの本気で君にも同じように言われるに違いない。もし、全能の神様が君にこう言っているとしたら、君の笑いもサラと同じように恐れのもとに凍りつかないだろうか。サラは、すっとボケる形でだが、確かにその後の態度を改め、神様の言葉を真剣に受け止めた。

⑤嘲笑は、神様の言葉にかき消され、神様の言葉を真剣に受けたサラに待っていたのは喜びの笑いだった。君の嘲りの笑いも神様は叱られる。それは、神様が真剣に君に喜びを授けようとしているから。この神様の本気をいつでも真剣に受け止めて感謝できるようあって欲しい。

〈祈り〉

私たちの疑いを確信と喜びへと変えてくださる神様。その真剣さに感謝します。私たちもあなたに対して真剣に応えられますように。アーメン。

7月30日　イサクを献げる　聖書研究

テキスト　創世記 22章1〜19節

〈アブラハムの信仰は敬虔さからくる〉

この物語は、アブラハムが息子であるイサクを神に献げるが、主がそれを止めて、主を礼拝したという物語です。1節、「神はアブラハムを試された」という出だしによって、聖書は、この物語が、アブラハムの「試練」であることをあらかじめ私たちに明記しています。

試練とは、人の心の中の隠れたものが何であるかを調べるために試すことであり、苦難や迫害によって人を練りきよめること（詩編26:2など）でもあります。そのため、試練は、信仰の成長において必要不可欠なものであり、驚き怪しむべきではなく（ペトロ一4:12)、この上もない喜びであり、幸いである（ヤコブ1:2,12）ことを覚えるべきです。また、その根拠として、試練について、神が耐えられないような試練にはあわせることはない（コリント一10:13）とも述べられています（『新聖書辞典』、いのちのことば社、「試練」の項目を参照)。

6節を見ますと、アブラハムは、火と刃物という危険なものはイサクに持たせず、自ら持って行きます。このような、アブラハムの父としての配慮の気持ちとそれらを使ってイサクを生け贄にしなければならない気持ち、その複雑な思いが描かれています。さらに「二人は一緒に歩いて行った」という表現によって、その緊張が高められています。7、8節では、親子の対話が書かれていて、その間の6、8節で「二人は一緒に歩いて行った」ということで、沈黙から対話へ、そしてまた沈黙へと、心理的緊張感が高められていることが分かります。

その緊張感の中で、11、12節、天から主の御使いが現われ、「その子に手を出すな。……あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ」という声が聞こえてきます。「今、分かった」とは、神が分からないでおられ、試して分かったという意味ではなく、神は知っておられたが、それが明らかになった、証明されたということ、そして「神を畏れる者」としてのアブラハムの敬虔さが現れた、という意味です。つまり、単に神の存在のみを畏れているということだけではなく、礼拝や律法などを守って神を畏れているという、積極的な畏れを意味しています。この信仰の敬虔の現われを聖書は私たちに示し、メッセージとして伝えています。

〈我らの主なる神は必要なものを備えてくださる主である〉

アブラハムの「焼き尽くす献げ物の小羊は、きっと神が備えてくださる」(8) という言葉に対して、主なる神は、それに応えて「ヤーウェ・イルエ（主は備えてくださる)」とされました。必ず私たちに相応しい形で備えてくださる全能の神であることがここで明らかにされています。そして、「今日でも『主の山に、備えあり（イエラエ)』と言っている」と語って、ここが後にエルサレム神殿が建てられた場所（歴代下3:1）であることを暗示しています。

ここではアブラハムが敬虔であったから主が備えてくださったというように結果的にはなっていますが、主がアブラハムになされた、アブラハムに与えられたという神の主権性がたたえられているように思われます。

アブラハムが敬虔であったから主が備えたという相互互恵ではなく、またここではアブラハムが主語ではなく、主なる神が主語であり、その中で、アブラハムを神が憐れんだ、という主権性を聖書は私たちに伝えています。しかもその神の主権性は、すべての人にとって益となるような主権性であるということを信じることを教えているのです。

（潮田　祐）

7月30日　イサクを献げる　説教展開例

テキスト　創世記 22章1〜19節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問4

〔単元のねらい〕

主の真実はしもべに信仰を要求する。神の約束によって生まれた男子は、アブラハムとの契約が真実であることの証しであった。契約の恵みに与かるアブラハムは、神の御心に従うことを　徹底して求められる。神の御前に罪ある人間は死ななければならない。その人間を生かすために、神は代償の死を人知れず備えておられる。神の備えを予め知らされないまま、その日その時に示される神の御意志に、ひたすらに従ってゆく。信仰はそのように鍛えられ、練られる。

「信仰を鍛練する天の父」

お誕生日おめでとう。そんなあたたかい言葉を、いちばんはじめにかけてくれたのは、やはりお母さん、そしてお父さんでしょう。あなたがこの世に生まれでるためなら、どんな苦しみや痛みもおそれない。あなたが神さまと人々から愛される人になるためなら、どんな犠牲をはらってもかまわない、自らの命をさしだしてもおしくない。そんな、けだかい心によって、あなたは生まれたのです。そして育つのです。

命をもらい、お乳をもらい、食べ物をもらう。生きてゆくために、要るものは与えられ、要らないものは取りさられる。求めなくても与えられる恵みがあり、求めても与えられない恵みもある。愛されるために、しなければならないことを教えられ、してはならないことを諭される。しなければならないことをせず、してはならないことをして、叱られることがあり、懲らしめられることもある。こんなふうにして、あなたは養われ、育てられているのです。

ときどき、欲しいものをなかなか与えられなくて悲しくなったり、欲しくないものをいきなり与えられて困ってしまったり。したいことがいっこうに許されなくてウズウズしたり、したくないことをむりやりさせられてイライラしたり。そんなとき、わたしは愛されているのだろうか。お父さん、お母さんは、わたしを愛しているのだろうか。そんなふうに、考えこんでしまうこともありますね。そんなときこそ、今日の聖書のみことばに耳をかたむけてください。あなたを養い育てるために、お父さんとお母さんを定めてくださった、神さまのみこころを知ることが大切です。あなたの親は、神さまのみこころを行う責任があるからです。

アブラムが99歳のとき、主が現れてこう仰せになりました。「わたしはまったき神である。あなたはわたしに従って、まったき人になりなさい。あなたはもはや、アブラムではなく、アブラハムと名のりなさい。あなたを多くのくにたみの父とするからである。わたしは、あなたとの間に、そしてあなたの後を継ぐ子たち孫たちとの間に、永遠の契約を立てる。わたしは、あなたとあなたの子孫との神となる。あなたがいま旅をしているカナンの土地のすべてを、あなたとあなたの子孫に、永久の住みかとして与える。このように、わたしの恵みは確かなのだから、わたしの契約を守りなさい。あなたとあなたの子孫、そして共に暮らす人々について、男子はすべて割礼を受けなさい。それによって、わたしの契約は、あなたの体に記されて、永遠の契約となる」。

この約束を聞いたアブラハムは、すでに年老いていて、子供はひとりもありませんでした。しかし神さまは、御自分の約束を果たし、アブラハムに恵みを与えてくださいました。人間にはとうていできないことを、神さまはなしとげてくださっ

たのです。アブラハムが100歳のとき、90歳の妻サラは身ごもって、男の子を産んだのです。その子は、人間のちからで生まれた子ではなく、神さまの約束によって生まれた子でした。神さまはその子に、「イツァハーク（彼は笑う）」と名づけます。アブラハムもサラも、神さまの途方もない約束を聞かされて、思わず心のなかで笑ってしまったからです。神さまのみこころは、人間には計り知れないほどに恵みふかく、とうてい信じられないほどに力づよいものなのです。

しばらくして、神さまは再び語りだされます。「アブラハムよ」。その声は、よく聞き覚えのある神さまの声、紛れもない主の呼びかけです。今度はどんな恵みを与えてくださるのだろう。そんな期待に胸をふくらませて、アブラハムは返事をします。「はい！」。すると、主なる神さまは、こう仰せになるのです。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れてモリヤの地へ行きなさい。わたしが命じる山に登り、わたしを礼拝するために、その子を生け贄としてささげなさい。イサクをあなたの手で殺し、焼き尽くして、その命をわたしにささげなさい」。

信じられないみことばです。アブラハムは息をのんで、何も言えなくなって、考えこんでしまいます。「なぜだ？」。そのひとことが、彼の頭のなかを駆けめぐります。「いやだ！」。その思いが、彼の心のなかで暴れだします。そんな彼を見つめながら、神さまは沈黙なさいます。

「なぜだ？」。アブラハムの混乱は当然です。イサクは神の約束の確かさ、神の恵みの揺るぎない証しだと信じて感謝しているのに、その恵みの契約を神さまが台無しになさるとは、とても信じられないからです。「いやだ！」。アブラハムの抵抗も無理はありません。独り息子を殺して焼き尽くすなど、子を持つ親にできるわけがないからです。しかし、紛れもない主のみことばには、従わなければならないのです。

アブラハムは、とにかく主の仰せのとおり、行動を開始します。薪を拾ってイサクに背負わせ、自分は刃物と火種を持って、出かけてゆきます。「お父さん、ささげものの小羊はどこにあるのですか」。そう問いかけるイサクに、アブラハムは心かきむしられる思いで答えます。「小羊は神が備えてくださる」。思いつめた父の表情と言葉に、息子は何も言えなくなります。いよいよその場所につき、祭壇を築き、薪を並べ、イサクを縛って、そこに寝かせます。「100歳の男と90歳の女に子供を与えてくださった神さまなら、たとえこの子が死んだとしても、死者の中から生き返らせてくださる。神にできないことは何ひとつない」。そう信じて、刃物を振り下ろそうとした、その時です。「アブラハム！　アブラハム！」。天の御使いの声です。「その子に手を下すな！　何もするな！　よく分かった！　あなたは自分の独り息子さえ主にささげることを惜しまなかった。もうそれでよい」。後ろを見ると、木の茂みに一匹の羊が角を取られているではありませんか。アブラハムは、神が備えてくださった羊を捕まえ、息子イサクの命の代わりに、その羊の命をささげて、主を礼拝したのでした。

主は、アブラハムの信仰を試されたのです。彼の息子イサクが神の約束の子であることを忘れさせないためです。神の恵みはアブラハムの持ち物ではなく、神が与えることも奪うこともできると心に刻ませるためです。たとえ神の恵みの契約に入れられたアブラハムとその子孫であっても、神の前に罪ある人間であることに変わりはなく、その報いとして死ななければならない。その事実を目の当たりにさせるためです。そこで神さまは、アブラハムとその子孫との永遠の契約を成し遂げるために、彼らの命を救うための身代わりの死を、彼らの知らないところで備えておられる。その恵みを示すためです。

あなたの親は、アブラハムと同じ信仰を求められているのです。そしてあなたは、イサクと同じ従順を求められているのです。　　（二宮　創）

〔今週の暗唱聖句〕　ヘブライ人への手紙 12章5，6節

わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。
なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。

7月30日　イサクを献げる　幼稚科

〈ねらい〉

主は、私たちの思いを越えて、すべてを備えていてくださることを信じる信仰を、イサクの奉献物語から知る。

〈暗唱聖句〉

「きっと神さまが備えてくださる」。

〈展開例〉

①アブラハムとサラのたった一人の子供、イサク。大事な愛する子供、イサク。イサクは大切に育てられました。家ではいつもイサクを中心にして笑いが絶えませんでした。

②そんなある日、神さまがアブラハムさんに声をかけられました。「私が命じる山に登って、あなたの愛するたった一人の息子イサクを犠牲の献げ物としなさい」。

③アブラハムさんはびっくりしました。だって犠牲の献げ物ということは、祭壇で命をとるということだからです。アブラハムさんは苦しみ悲しみました。「なぜ神さまはそのようなことを私に命じられるのだろうか。私はどうしたらよいのだろうか」。でも、アブラハムさんは決心しました。「神さまのご命令どおり、年老いた私にイサクが与えられた。だから今度も神さまのご命令どおりにしよう」。アブラムさんはすぐに旅の支度をして、イサクを連れて山に登りました。

④「ねえ、ねえ、お父さん」。「ここにいるよ。私の子イサクよ」。「山には何をしに行くの」。「礼拝をしにいくのだよ」。「ふ～ん、だから火と薪はここにあるのだね。でも犠牲にする小羊がいませんよ。ねえ、ねえ、お父さん。どうするの」。

⑤「私の愛する子イサクよ。私たちには分からなくても、きっと神さまが備えてくださるよ」。そう言って、二人で並んで歩いていきました

⑥神さまが命じられた場所に着くと、さっそくアブラハムさんは祭壇を築き、礼拝をささげる準備を始めました。そしてイサクを縛って祭壇の上にのせました。そして刃物をとってイサクに手をかけようとした、そのとき、

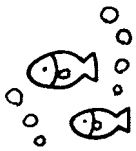
⑦「アブラハム、アブラハム」。神の御使いの声がしました。「アブラハム、もうよい。あなたが神さまのことを心から信頼し、その言葉に聞き従うことがよく分かった」。

⑧見ると、後ろの木の茂みに、一匹の雄羊がいました。アブラハムとイサクはその雄羊を犠牲にして礼拝をささげました。

⑨アブラハムさんはイサクに言いました。「な、神さまは私たちに必要なものを前もって備えてくださっていただろ。これからも神さまは私たちの必要のすべてを与えてくださるよ」。

〈お祈り〉

天のおとうさま。あなたは私たちを愛して、いつも必要なものを与えてくださいます。ときどき他の人のものが欲しくなったり、自分のものを人に与えるのが嫌になったりして苦しいですが、どうかそのような苦しみから助け出してください。アーメン。



7月30日　イサクを献げる　小学科下級

〈ねらい〉

神様は私たちを愛し、神様の子どもとしてふさわしく成長することを願っておられる。神様の言葉に従う子どもとして歩む力をいただこう。

〈はじめに〉

この4月から新しく日曜学校の教師としての奉仕を始めた方もおられるかもしれません。あるいは、何年も奉仕を続けてこられたベテランの方もおられるでしょう。数ヶ月続けてみて、難しさやとまどいを多く感じられているでしょうか。ベテランの先生方に何でも質問しましょう。あなたが、今感じていることはベテランの方も同じことを感じて、同じ道をとおって来られたかもしれません。奉仕者が連絡をよく取り合って、気遣いあうことが必要でしょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①神様が、アブラハムよ、と呼びかけたとき、アブラハムさんは何と答えましたか。

②神様は、アブラハムさんにイサクさんを連れて、どこに行きなさいと言われましたか。

③アブラハムさんは、その通りにしましたか。

〈展開例〉

アブラハムさんとサラさんに、神様のお約束どおりイサクさんが与えられました。イサクさんは、アブラハムさんとサラさんに大事に愛されて、神様を心から信じるりっぱな人に成長しました。

ある夜のことです。神様は、アブラハムさんに、突然、びっくりするようなことを言われました。イサクさんを山に連れて行って、殺して、神様に献げなさい、というのです。アブラハムさんは、どんなに驚き、どんなに悲しんだことでしょう。100歳になるまで待って、待ってやっと与えられたイサクさんを神様にお献げしなさい、というのです。でもアブラハムさんは自分の思いではなく、神様の言われることを一番にしました。これまでずっとしてきたように、この時も神様に従いました。嫌だと言ったり、疑ったり、文句言ったりしなかったんですね。

アブラハムさんはイサクさんを連れて、モリヤの山に三日間かけて登りました。そして、祭壇を作って、本当にイサクさんを殺そうとした、その時に、神様の「殺してはいけない」という声を聞きました。イサクさんはアブラハムさんのもとへ返されました。

これは、神様がアブラハムさんを試される出来事でした。そして、アブラハムさんが神様を心から愛して従う人であることが十分わかりました。アブラハムさんも神様に十分愛されていることを知りました。

私たちも神様から愛されている子どもです。神様は私たちが「なぜ？」思うことを、時としてなされることがあります。でも心配いりません。神様はいじわるな方ではありません。私たちが神様をもっと知ることができるように、もっと愛することができるようにと成長をお与えくださるのです。

〈お祈り〉

神様、神様をいつも信じ、神様の言われることを一番にできる子どもにしてください。

7月30日　イサクを献げる　小学科上級

〈ねらい①〉

人間的な希望の限界を超えていく、神の救いのご計画に信頼して生きる、信仰者の希望を伝える。

〈展開例①〉

「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり／わたしの道はあなたたちの道と異なると／主は言われる。天が地を高く超えているように／わたしの道は、あなたたちの道を／わたしの思いは／あなたたちの思いを、高く超えている」（イザヤ書55:8～9）。

神様の救いのご計画は、いつも私たちの思いをはるかに越えています。

私たち、弱く、目の前のことしか見えない人間は、困難なことがあるとすぐに希望が見えなくなって、パニックになります。「どうしてこんなことが起こるの？」「なぜわたしだけこんな目にあうの？」そして、誰もがこう言います。「神様は何を考えておられるのか……？」

イサクをささげよと言われたアブラハムさんも、パニックになったことでしょう。しかし、アブラハムは神様に従うことを選びました。自分には今見えない希望の未来を、神様が見ていてくださると信じているからです。私たち以上に私たちのことを知っていてくださる神様が、いつも私たちのために一番よいことを備えてくださるのです。

〈ねらい②〉

私たちにとって本当に必要なものは何か、「本当に大切にすべきもの」は何か、共に考える。

〈展開例②〉

アブラハムのように、神様にどこまでも従おうとする中で、自分にとって大切だと思ってきたものを失わなければいけない……と覚悟する時が、私たちにも訪れます。

例えば、礼拝で日曜日は友だちと遊べない。でも仲良しの○○くんが、遊べないならもう友だちじゃないよと誘ってくる。せっかく神様から与えられた大切な友だちなのに、神様に従おうとすると、だんだんと遊べなくなって、友だちじゃなくなっちゃうかもしれない……。そんなことを考える時もあるでしょう。（あなたの大切にしている礼拝を尊重してくれない友だちは、本当の友だちじゃないと、先生は思うけどね。）

一番大切なものを失ってまで、神様に従うなんて……、そんな迷いがあるかもしれません。でもね、神様は、あなたにとって本当に一番大切にするべきものを失わせることは決してありません。神様はあなたがそんな犠牲を払うことは、少しも要求されません。むしろ、犠牲を払ってくださったのは神様のほうです。一番大切な、絶対失いたくない独り子イエス様を、私たちのためにささげてくださったのは神様のほうです。

この神様が、お前の一番大切なものを捨てろなんて、絶対に言いません。あなたが本当に大切にすべきもの、本当にあなたにとって必要なものは、いつも神様が備えていてくださいます。神様に従う時に失わねばならないものは、いつも本当には必要でないものばかりです。時には、一番失いたくないと思っているものであっても、私の信仰の成長のために、神様は奪っていかれる時があります。「本当に大切にすべきもの」はなんなのか。よく考えてみましょう。

〈祈り〉

神様、私たちのために、必要なすべてのことを備えてくださるあなたを、もっと信じることができるようにしてください。

7月30日　イサクを献げる　中学科

〈ねらい〉

試練の中で主が備えてくださることを知る。

〈展開例〉

①今日の話はアブラハムの信仰の試練の話。皆は「試練」という言葉にどんなイメージを持っているだろう？「試練」という字は「試して」「練り上げる」と書く。「練る」とは純粋な金属や糸を作るために不純物を取り除く作業工程のこと。糸の場合は煮込む。金属の場合は火に入れる。信仰も、純度の高い信仰となるために、苦るしいこと、辛いことをとおして、神様に練られることがある。そこでは、神様をまったく信じきる心が試される。「試される」という感じは「こころみる」とも読む。神様はまさに、人間が苦しみの中で神様に信頼する心を持つことができるように、その心を御覧になるのである。

Q．皆は、神様を信じているという理由で「何で自分はこんな目にあうのだろう」こんな思いをしたことは無いだろうか？「何で自分の気持ちを犠牲にして、皆と違う生き方をしなくちゃならないんだ」、「神様は『するな』と言うけど、それでは、自分のやりたいことができなくなる」というとき。反対に「神様の命令なんか無視すれば、これができるのに」と思うとき。自分もそうだったが、中学生というのは反抗期のまっさかり。納得のいかないことに悲しみや怒りを大人以上に感じる時期。

②だからこそ、今日の聖書に目を向ける必要がある。皆が葛藤を覚える以上に、アブラハムは苦しみ悶えたに違いない。イラついたかもしれない。悲しんだかもしれない。しかし、彼は「自分の愛する独り息子を神様に献げる」という、およそ納得できようもない命令に対してすら、「たとえ何があっても神様は私の人生を祝福してくださるに違いない」と考えた。このような「神様をまったく信頼する」という信仰を練り上げられていく。

③神様のくださる試練は、私たちをいじめて楽しんでいるわけでも、苦しむ様を眺めているのでもない。始めに言ったように神様は、君たちが神様の命令と何かの間で葛藤するときに、「私を信頼しろ！」と、君が神様の方を選び取ることができるように強く望んでいる。アブラハムには契約が与えられていた。「私は彼（イサク）と契約を立て、彼の子孫のために永遠の契約とする（17章9節）。」アブラハムは神様の命令と、自分の思いの間で葛藤した。しかし、最終的に神様を信頼したアブラハムは、神様が約束どおりにイサクを生かし、自分を祝福される方であることを思い知ることとなる。

④皆に与えられている契約はイエス様によって結ばれた新しい契約。神様が独り子を十字架につけてまで、君を祝福しようとされる約束である。色々なものが嘘くさく思える反抗期の毎日の中で、神様に従うことに苛立ちや迷いを感じる時に、これだけは信じ続けて欲しい。君のために愛する子をさえ惜しまない神様は、そのイラつきの中で、その戸惑いの中で神様を選び取る君を、絶対に悪いようにはしない。絶対に裏切らない。神様を選び取る君に、神様は君が納得して感謝して喜ぶようなエンディングを確実に備えていてくださる。

〈祈り〉

試練の中で祝福の結末を用意し、そこに導いてくださる神様。心に葛藤を覚えるときに、あなたを選び取ることができますように。アーメン。

8月6日　ヤコブとエサウ　聖書研究

テキスト　創世記 27章1〜40節

〈エサウとヤコブの誕生〉

双子の兄弟エサウとヤコブは、イサクが六十歳のときに生まれた。彼らの誕生は主がリベカの祈りに答えてくださった結果であったが、主は兄(エサウ）が弟（ヤコブ）に仕えることもリベカに予告しておられた (25:19〜26)。そしてイサクはエサウを愛し、リベカはヤコブを愛した (25:28)。

〈祝福のゆくえ〉

高齢になったイサクは、長子であるエサウに祝福を与えようとする。祝福は一人に対して、しかも一度与えられれば取り消されないものとされている。主はイサクに対し、その子孫によって地上の諸国民はすべて祝福を得る、と約束された (26:4)。イサクは長子であるエサウ一人に祝福を与えようとするが、後にヤコブは十二人の息子たちそれぞれにふさわしい祝福を与えている (49:28)。

イサクは、リベカへの主の約束を聞いていたであろうが、祝福自体は長子であり自分の愛するエサウに与えたいと願ったのであろう。逆にリベカは、兄が弟に仕えるという主の約束があったので、祝福も弟が受けるものという考えから、何とかして愛するヤコブが祝福を受けられるように企んだと思われる。アブラハムとサラの場合もそうであったが、主に従う夫婦の足並みが揃わない時に、家庭がどのような状況になるか、という現実を私たちは見せ付けられる。

リベカもヤコブも、もしイサクにこのことがわかれば、祝福どころか呪いを受けることを承知の上でこの計画を実行した。

イサクは、一度は本当にエサウが来たのかどうかを疑いながらもついにヤコブに祝福を与える。アブラハムに与えられた祝福の約束が、イサクへ、そして次の者へと伝えられていくことになるが、それは、だまし取るという仕方で行われた。主のご計画は必ず実現するが、それが実現してゆくに当たって、実際に行動する人間の様々な思惑が絡み合い、策略まで用いて息子と妻が父であり夫である者をだますということすら起こってきた。

ヤコブはエサウの恨みを買い、逃亡生活に入らなければならなくなってしまう（28章以下)。

だますこと自体は悪であるがゆえに、ヤコブはその報いを受ける。リベカもヤコブを送り出さなければならなかった。この後、ヤコブとリベカの再会の記事はない。それぞれ、この世の生活では離別の悲しみと、故郷を離れて人に仕えるという労苦を忍ばなければならなかった。そして自分もラバンにだまされるという経験をすることになった (29:25)。

しかし、イサクは、ヤコブがだまし取った祝福だから無効であるとはしなかったし、主ご自身も、ヤコブを祝福を受け継ぐ者として認められた (28:14)。故郷を旅立ったヤコブに対して、主は夢の中でヤコブに祝福の約束をお与えになり、どこにいても共にいることと、再び主が故郷に連れ帰ることを約束してくださった (28:13〜15)。

イサクは、祝福を求めるエサウに対して、その後の歩みの厳しさを予告する (27:39, 40)。しかし、後にヤコブと再会したエサウは、物質的経済的には恵まれていた (33:9)。ヘブライ書は、イサクはエサウのためにも祝福を祈ったと記す (11:20)。しかしヤコブの受けた祝福は単に物質的なものではなく、霊的なものであった。エサウは「ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡した」者であり、彼のようなみだらな俗悪な者にならないようにと読者に警告している（同12:16, 17)。エサウ自身も自分の行いの報いを受けたのであった。　(久保田証一)

8月6日　ヤコブとエサウ　説教展開例

テキスト　27章1〜40節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問13,14,17〜19
ウェストミンスター小教理 問11
ウェストミンスター信仰告白 第5章

〔単元のねらい〕

父のイサクに愛され、父の命令に従い、父の祝福を得ようとしている兄エサウ。一方、父の祝福をだまし取る弟ヤコブ。人間的な感情において語れば、弟ヤコブの卑怯さと兄エサウへの同情となります。

しかし、この箇所を説教するにあたって忘れてはならないことは、主の計り知れないご計画と、歴史に現れる摂理の御業です。そして主のご計画は、私たちにとって祝福に満ちたものです。主の秘められた愛が忘れられてはなりません。

また、エサウへの同情が語られる時、エサウの不信仰（ヘブライ12章14〜17節を参照）も確認しなければなりません。主が求めておられることは、神である主を愛することと、隣人を自分自身のように愛することの両方を満たすことであり、信仰によって生きることが疎かになってはならないのです。

「一番大切なもの」

年老いたアブラハムさんに、ようやく与えられたイサクさんでしたが、そのイサクさんも、40歳にしてリベカさんと結婚しました（25:20）。そして60歳にして初めての子ども、それも双子の兄弟が与えられていました（25:26）。兄の名前はエサウ、弟の名前はヤコブです。生まれてくる時、弟は兄のかかと（アケブ）をつかんで、先に出てきたため「ヤコブ（かかと）」と名付けられたのです。

二人は大人になり、兄エサウさんは狩人となり、ヤコブは家の周りで仕事をしていました(25:27)。父イサクは狩りの獲物が大好きなため兄エサウを愛していましたが、母リベカは弟ヤコブを愛していました。

ある日のこと、エサウが狩りをして、疲れきって野原から帰って来ました。お腹がすいてペコペコです。エサウが家に近づくと、美味しそうなスープの匂いがします。ヤコブが赤いスープをつくっていたのです。エサウはヤコブに言います。「ヤコブ、もうお腹がすいて死にそうだよ。そのスープを食べさせてくれ」。すると、ヤコブはこの時とばかりに、「いいですよ。けれども一つ条件があります。長子の権利を譲ってください」。「いいよ、今はお腹がすいていて、死にそうなんだ。そんなもの譲ってやる」。するとヤコブは、「では、今すぐ誓ってください」と迫り、兄エサウはすぐに誓い、長子の権利を弟ヤコブに譲ってしまいました（25:27〜34）。

さて、それからまた年月がたち、父イサクも年をとり、目がかすんで見えなくなっていました。そのため、イサクは、今のうちにアブラハムから与えられた神さまの祝福を、兄エサウに受け継がせようと思いました。そのため、イサクはエサウを呼び、エサウが取ってきた獲物で美味しい料理を食べさせて欲しいと願い、その後、祝福を与えることを約束しました。

この話を聞いていたリベカは、ヤコブが可愛く、ヤコブがイサクから祝福を得るべきであると思い、イサクをだますことにしました。はじめヤコブは、エサウとの違いがイサクに分かり、逆に呪われるのではないかと怖じ気づきます。しかし、それでもヤコブは、リベカに言われるまま、エサウを装い、子山羊の毛皮を肌に付けて、イサクのところに行きます。

そしてヤコブは、エサウの声色を真似して、「わたしのお父さん」と呼びかけます。イサクは、声を聞いても、誰なのか分かりません。「誰だ、お前は」。ヤコブは答えます。「長男のエサウです」。イサクは信じられません。イサクはエサウに狩りに行き、獲物を取ってくるように命じましたが、非常に早かったからであり、エサウの声とは少し違うかなと思ったのです。そしてイサクは、直接触るとエサウかどうか分かるはずだと思い、「近寄りなさい。わたしの子に触って、本当にお前が息子のエサウかどうか、確かめたい」と語ります。目が見えなくなっていたイサクは、子山羊の毛皮を着けているヤコブに気がつかず、エサウだと思い、もう一度「お前は本当にわたしの子エサウなのだな」と確認をして、ヤコブが持ってきた料理を食べ、父イサクは弟ヤコブに祝福を与えました。リベカとヤコブは、まんまとイサクをだますことに成功したのです。

さて、弟ヤコブが父イサクから祝福を受けるとすぐに、兄エサウが狩りから帰って来て、料理を作り、イサクのところに持ってきました。イサクは非常に驚きました。体を震わせます。ヤコブにだまされたことに気がついたのです。神さまから与えられた祝福を、すでにヤコブに与えたのであり、取り消すことはできませんし、あらためてエサウを祝福することもできないのです。エサウは「わたしにも祝福をください」と願いますが、それはできません。エサウは、ヤコブに、最初は長子の権利が奪われ、今度は父からの祝福が横取りされました。「なぜ？ おかしい。ヤコブは卑怯だ」と思ったことでしょう。

みなさんも、神さまはなぜ、このようなことをお許しになるのだろうかと思うでしょう。人を騙すことは、神さまが禁じておられます。そのため、父からの祝福を受けたヤコブでしたが、自分の罪のために、長い間、エサウから逃げて、苦しまなければなりませんでした。

けれども、エサウさんが正しかったのかを考えなければなりません。神さまは、私たちを救ってくださり、神の子としてくださいました。そして、神さまは、神の子としてふさわしく生きることを求めておられます。救い主である神さまに感謝し、礼拝すること、そして隣人を愛することです。どちらもが神さまが求めておられることであり、大切なことです。しかしエサウは、神さまから与えられた長子の権利をおろそかにして、お腹がすいただけで、弟に譲ってしまいました。このことは、神さまの御前に大きな罪です。このことがエサウは理解できなかったのです。

一方、ヤコブのしたことも許されませんが、長子の権利を得たい、お父さんからの祝福を得たいという熱心な思いは、神さまからの恵みを大切にしようという思いから出てきています。神さまによって愛され、神さまによって救われているみんなも、神さまを礼拝し、神さまによる恵みをいっぱいいただくように、熱い思いを持つことが、求められています。

神さまは、このような人間の悪いたくらみをも用いて、神さまの御業を成し遂げられます。主イエス・キリストが、私たちの罪の償いのため、十字架にお架かりくださった。それは、ユダヤ人の悪いたくらみによってであったことを知っているでしょう。けれども、そのたくらみをも用いて、神さまは御業を成し遂げられました。このように、神さまの御計画が実現することを「摂理」と言います。私たちにとってはなぜだろうと思われることであっても、神さまにとってはもっとも素晴らしいこととして、実現していきます。

神さまによって愛され、神さまの子として救われている私たちは、神さまを愛し礼拝すること、そして隣人を愛することが求められています。目先の楽しみに心が揺さぶられることなく、私たちにとって本当の喜びである神さまに愛されるために、神さまを礼拝し、隣人を愛し続けましょう。

（辻　幸宏）

〔今週の暗唱聖句〕　ヘブライ人への手紙 12章14節

すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。

聖なる生活を抜きにして、だれも主を見ることはできません。

8月6日　ヤコブとエサウ　幼稚科

〈ねらい〉

神さまの御心が実現することを知る。

〈暗唱聖句〉

リベカさんは、「主の御心を尋ねるために出かけた」。

〈展開例〉

①イサクさんは大きくなってリベカさんと結婚しました。二人にはなかなか赤ちゃんができませんでしたが、お祈りすると双子の赤ちゃんが与えられました。リベカはお腹の中の赤ちゃんのことで、神さまの御心を尋ねるために出かけました。そんなリベカさんに神さまは言われました。「この二人は争うことになる。そして兄が弟に仕えるようになる」。これが神さまの御心でした。

②さて、二人のうち、赤くて全身が毛むくじゃらの兄をエサウと名付け、兄のかかとをつかんで出てきた弟をヤコブと名付けました。そして二人は成長し、エサウは野原で狩人になり、ヤコブは天幕の周りの畑で働くようになりました。

③ある日、ヤコブが煮物を料理していると、エサウが疲れて帰ってきて言いました。「お腹がすいて死にそうだ。それを食べさせてくれ」。「だったら、お兄さんガ受け継ぐはずの神さまから祝福を受ける権利を譲ってください」。エサウはあまりにもお腹がすいていたので、そんな権利くらいどうでも良いやと思いました。そしてパンとレンズ豆をもらう代わりに、神さまの祝福の権利をヤコブに譲ってしまいました。

④またエサウは、神さまのことを知らない人と結婚しお父さんとお母さんを悩ましました。

⑤やがてイサクさんは年をとったので、兄のヤコブに神さまの祝福を譲ろうと思いました。「どうか私のためにおいしい料理を作っておくれ。それを食べたら、お前に神さまの祝福を譲ろう」。エサウは喜んで狩りに行きました。

⑥さて、それを聞いていた母のリベカさんはこまりました。エサウは神さまのことを軽く考えているので、きっと家族に災いをもたらすに違いない。そこで弟のヤコブに、お兄さんの代わりに神さまの祝福を受けるように言い、おいしい料理とエサウの着物を渡し、毛むくじゃらの毛の代わりに毛皮をつけさせてイサクのもとに送り出しました。

⑦リベカさんの計画通りに、イサクさんは、エサウだと思って神さまの祝福をヤコブに与えました。ヤコブが立ち去るとすぐ、エサウが帰ってきましたが、もうすでに後のまつりです。エサウには祝福は残っていませんでした。エサウは悔しがって、ヤコブを憎み、いつか必ず殺してやるとまで心の中で思うようになりました。イサクさんは言いました。「お前はこれから暴力に頼っていくだろう。しかしやがてお前は弟に仕えるようになるだろう」。

⑧お兄さんの怒りを知ったヤコブは、すぐに逃げることにしました。その道はとても厳しい道です。でも神さまが用意してくださった道を、神さまの祝福と一緒に歩んで生きます。

〈お祈り〉

不思議な方法でヤコブに祝福を与えられた神さま。あなたの御心だけが実現します。どうか私たちの歩みも神さまの御心にかないますように。アーメン。

8月6日　ヤコブとエサウ　小学科下級

〈ねらい〉

神様には、私たちには知り尽くすことができないほど大きな救いのご計画があり、そのご計画は神様の大きな愛の中で実行されることを信じる。

〈はじめに〉

暑い毎日が続きます。子どもたちは元気に日曜学校に来ているでしょうか。休みが続いている子どもはいないでしょうか。来ている子どもたちと一緒に、分級の少しの時間を割いて、カード・ハガキを書いてみてはいかがでしょう。旅行中のお友だち、病気のお友だち、家庭の事情で来られないお友だち、様々な事情の中に置かれている子どもたちを祈りの中で覚えましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①年をとり、目が見えなくなってきたおじいさんの名前は何ですか。

②上の息子の名前は何ですか。

③エソウの弟の名前は何ですか。

④お母さんのリベカはエソウに「お父さんのところにお父さんの大好きな料理を持っていきなさい」と言いました。エソウは何と答えましたか。

〈展開例〉

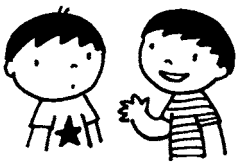
イサクはリベカと結婚しました。そして双子の子どもが生まれました。お兄さんのエソウは元気で野原をかけめぐって、動物を捕まえるのが大好きでした。弟のヤコブは優しくて畑のお仕事や、羊のお世話をするのが大好きでした。お父さんのイサクはエソウを、お母さんのリベカはヤコブをかわいがりました。

イサクがすっかり、おじいさんになったある日、イサクは、エソウを呼んで、「動物をとってきて、私の好きな料理を作っておくれ。私が死ぬ前にあなたを祝福しよう」と言いました。それを聞いた、お母さんのリベカはこっそりをとヤコブに言いました。「私がおいしい料理を作るので、エソウになりすまして、持って行きなさい」。ヤコブはエソウのように毛深くみせるために腕や首に動物の毛皮を巻きつけて、お母さんの言うとおりにしました。お父さんはもう目が見えないので、ヤコブの腕を触って、エソウだと思ってしまって、ヤコブを祝福しました。ヤコブは長子の権利を自分のものにしてしまいました。

リベカやヤコブはイサクにうそをつきました。人をだますことは神様は喜ばれません。でも神様は人のわるだくみや、神様に喜ばれない思いや行いをも、神様の大きなご計画に用いられることに私たちは驚きます。私たちも生まれる前から、神様のご計画の中にあることを覚えましょう。神様は私たち一人ひとりを用いて、神様の救いのご計画を進めていかれます。私たちの周りにはまだ神様を知らない人がたくさんいます。神様が私たちを祝福してくださっていると同じように、神様を知らないお友だちや家族が祝福をくださる神様を知ることが出来るために私たちが用いられますように祈りましょう。

〈お祈り〉

今週も神様の祝福の中で歩めますように。



8月6日　ヤコブとエサウ　小学科上級

〈ねらい〉

一連の族長物語の中に、現在の私たちの姿と重なり合う、悲惨に満ちた罪人の生を見抜く。

〈展開例〉

(第41回全国学生会修養会における吉田隆先生の講演レジュメより、多く参考にさせていただきました。)

イサクは神様の奇しい導きによってリベカと結ばれました。そのような麗しい結婚をしたはずなのに、その夫婦が築いた家庭は、まるで昼ドラマでも見ているかのように、ドロドロの家庭崩壊劇でしたね。(説教において示された聖書物語をなぞるだけで十分でしょう)。

こんなのが、神様を愛するクリスチャンホームなの!? って言いたくなりますね。うちの家はこんなことないよ、だって神様を信じる人たちの家だもん。お父さんだって、お母さんだって、ぼくだって、わたしだって、こんなにひどくない!! 本当にその通りならすばらしいですね。でも本当にそうでしょうか。日曜日だけは、教会でいいかっこうしてるけど、おうちに帰ると実は……なんてことはありませんか？ パパとママが夫婦ゲンカしてたり、ぼくたちわたしたちも兄弟ゲンカしたり。あれ？ 考えてみると、なんだかヤコブの家とそっくりだなと思う時もあるのではないでしょうか。

○イサク

お父さんのイサクは、食い物とスポーツのことばかりに夢中の典型的な中年オヤジで、神様を愛し、家族を愛し、父親として立派に子どもたちを育て上げることがおろそかだったように思います。家族崩壊の根源は、このあたりにあるようです。

○リベカ

リベカは、夫に愛想をつかして、息子（ヤコブ）のことばかり溺愛して、息子だけが生きがいになっています。こういうお母さんも、今多いですね。息子を愛していると言いながら、実際は自分のエゴイズムを満たしたいだけ。こういう子への歪んだ愛から、引きこもり、家庭内暴力などの悲劇に陥ることが、残念ながら多いようです。(子どもたちの中には、実際にこういう問題に直面している方もいるかもしれません。十分な配慮をお願いします。)

○エサウ

単純細胞のマッチョなエサウは、目の前の喜びだけを追いかける消費型の人間とも言えます。人生を根源的なところで支えてくれる神様の愛と祝福よりも、目の前にある快楽のほうを大事にしてしまう。ゲームやケイタイなどで、日々の快楽を追いかけることに夢中で、またそうしないと置いていかれるという悲しい危機感に追われてしまっている、現代っ子に通じます。

○ヤコブ

ずるがしこいマザコン息子のヤコブは、エゴイズムに満ちた母親に育てられて、同様におぞましいまでに自己中心です。目的の実現のためには手段を選ばず、神の喜ばれないような嘘まで平気でつきます。「そこまでして神の祝福を自分のものにしたい」、それは神への熱心と言えないことはないでしょう。でも、歪んだ熱心です。兄弟を愛することのない者は、本当に神を愛したことにはなりません（ヨハネ一4:20)。

〈祈り〉

神様、ヤコブの家とそっくりな私たちの罪をお赦しください。そんな私たちの愚かさまで用いられて、救いのご計画を成し遂げられるあなたの御業の不思議に驚き、あなたを賛美します。

8月6日　ヤコブとエサウ　中学科

〈ねらい〉

神の摂理の内にある人の自由と責任を覚える。

〈展開例〉

①今日は「神様の摂理」についてのお話。聖書は、ヤコブとエサウの話をとおして、神様は世界に起こる様々なことを、一つの計画のもとに、実現される（摂理）ということを教えている。今日の話の登場人物たち。エサウは神様からの恵みを軽んじ、ヤコブは兄の恵みをかすめ取り、リベカはヤコブと共謀し、イサクは祝福の相手を自分勝手に変更し、と皆、ダメさ丸出しの人たちであり、スッキリしない人間関係が描かれる。だけど、これは信仰者の集まりを示すリアルな人間模様ではないだろうか？

②皆は、神様が契約を守られるということをアブラハム物語から続けて聞いてきた。神様が人間と愛し合って生きる世界、人間同士もまた愛し合う世界。そんな世界を目指して、神様は皆を祝福する計画を実現させていく。でも、それは一人ひとりの個性とか特徴を無視して魔法のように実現するんじゃない。神様は、人間が善いことをしようが、悪いことをしようが、そうしたものも、ひっくるめてリアルな人間模様が無くならないように計画を立てておられる。人間の特徴である自由を壊さないで、神様は計画を実現させる。もし、正しい人や方法しか神様が用いられないとしたら、世界で正しい方はイエス様だけ。皆と神様との接点はゼロになってしまう。神様は人間が悪い思いを抱くことも知った上で、神様のスバラシサを見せてくれる。

③「なーんだ。じゃあ俺らは自由にやってればいいんだ」。こんな風に思うかもしれない。ある意味正解。君たちは自由に生きて良い。ただ、自由というものは責任を伴う。「最後は神様が良いようにしてくれる。だから結果オーライ」とはならない。もし君たちが「自由」を「好き勝手」と勘違いして、神様が嫌がる、神様との付き合いを無視した、お金や財産だけを求める人生を生きたとする。君の仕事っぷりで社会は潤い、社会の福祉事業で弱い人たちが助けられることが起こるかもしれない。君の行動で誰かが助かるという善い結果が生まれることはあり得る。だけど、君が神様を無視した事実は変わらない。悪いことの結果に善いことが起きたとしても、それは神様のお手柄。君に突きつけられるのは、そのために悪いことを行ったという事実と責任。

④神様の計画は君たちがどんな失敗をしたとしても、パーにはならない。だから君たちは「神様のために何かをしよう！　誰かのために何かをしよう！」と思うとき、失敗を恐れなくてよい。皆が失敗しても、神様の計画がこけることは無い。だけど同時に、できる限り神様が喜ばれるような方法を考えて欲しい。神様が喜ばれる道を気持ちよく選び取ることができること。この選択の自由こそ、聖書の示す自由です。

⑤ヤコブは神様の恵みを求めた。これは見習いたい心意気。だけど、その方法は褒められたものじゃない。せっかく神様を求めるのならば、イエス様がほほ笑んでくださるような、そんな仕方で、神様が世界中を祝福されるという、壮大な神様の御計画に参加してもらいたい。

〈祈り〉

世界を祝福へと導かれる神様。あなたの悲しむ仕方ではなく、あなたの喜ばれる仕方で、あなたの祝福を受け、それを広げることができるようにしてください。アーメン。

8月13日　売られたヨセフ　聖書研究

テキスト　創世記 37章1〜36節

〈背景と文脈〉

ヨセフ物語ほど神の摂理を確信させてくれるものはない。創世記37章から50章まではヨセフに関する記述である（ただし38章にはユダに関する記事が挿入されている）。一見、数奇な運命に翻弄されているかのような生涯であるが、神の摂理によって支配されていたことが、読み進めていくなかで見えてくる。ヨセフはヤコブ（ヨセフの父）の一族の命を救うための神の器だった。ヤコブは神の契約の民となったイスラエル民族の先祖であり、この民からメシア、イエス・キリストがお生まれになった。

37章は、50章まで続くヨセフ物語の序論であり、結論へ向けて伏線が敷かれている箇所である。

〈ヨセフの家庭環境と兄たちの憎しみ（37:1〜11）〉

主人公ヨセフはヤコブとラケルの子であり、彼には同じ母から生まれた弟ベニヤミンがいた。兄たちはレア（ラケルの姉）、またラケルの召使ビルハ及びレアの召使ジルパとヤコブの間の子どもで、ヨセフにとっては異母兄だった。父イスラエル（ヤコブを指す別名）は、ヨセフが年寄り子だったので、彼を兄たちよりもかわいがり、彼には特別裾の長い晴れ着を作ってやった。これは高貴な人が着る衣服で、腕の先、また足のくるぶしまで覆うものだった。ヤコブの偏愛の象徴であったこの晴れ着が、異母兄たちの憎しみをかう原因になった。複雑な家庭環境と父ヤコブのヨセフに対する偏愛がこの物語の背景にある。

ヨセフが見た二つの夢も兄たちの憎しみを増した。畑でヨセフの束がまっすぐに立った時、兄たちの束がその束の周りに集まってきて、ヨセフの束にひれ伏した。また太陽と月と十一の星がヨセフにひれ伏した。これらが単なる夢ではなく、神が将来ヤコブの家族に起こることを、夢を通して啓示されたことは後に明らかになる。

〈エジプトへ売られたヨセフ（37:12〜36）〉

ある日ヨセフはヤコブの言いつけで、羊を飼っている兄たちの様子を見るために家をあとにした。ドタンにいた兄たちが遠くからヨセフを見つけたとき、日ごろから心にあった憎悪が一気に噴出した。「あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。……あれの夢がどうなるか、見てやろう」(20) との言葉から、彼らが、ヨセフの夢が単なる夢ではないと感じていたこと、またその夢の実現を阻む目的で殺そうとしたことがわかる。長兄ルベンはヨセフを殺す計画に反対した。彼は、ヨセフを彼らの手から助け出して、父のもとへ帰したかったからである(22b)。兄たちはヨセフの晴れ着をはぎとり、穴の中に投げ入れた。彼を奴隷として売ることをユダが提案した。それでイシェマエル人によってエジプトに連れ去られ、ファラオの宮廷の役人、ポティファルに売られ、彼の奴隷となった。

兄たちは父ヤコブを欺くために、ヨセフが死んだように見せかけようとして、雄山羊を殺して彼の晴れ着に塗り、家に帰ってヤコブに見せた。ヤコブは、ヨセフが野獣にかみ殺されてしまったと思い、悲しみ嘆いた。この悲しみは、ヨセフがエジプトで生きていることを聞くまで続いたと思われる。ヤコブはかつて兄エサウから長子の特権を奪うために、子山羊の肉と毛皮で父イサクを欺いた（27:15〜17)。いま彼は雄山羊の血によって息子たちに欺かれることになる。

ヤコブの家族間の確執はまさに罪深い人間の姿そのものである。しかし神は、人間の悪意や小賢しい知恵を超えて、ご自分のご計画を歴史をとおして間違いなく遂行される全能者であられる。ヨセフは波乱万丈の人生をとおして、器として整えられていき、神の救いの歴史の中で大きく用いられた。私たちも神の御手にゆだね信仰によって歩むならば、神のご計画のなかで用いていただける。

（後藤公子）

8月13日　売られたヨセフ　説教展開例

テキスト　創世記 37章1〜36節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問11，13

〔単元のねらい〕

神様の救いの歴史を子どもたちと共にたどりたい。神様の救いの歴史の中にヨセフ物語、特にヨセフの苦難を位置付けると、それは、今日の子どもたちに対してどのようなメッセージを発信するようになるのかを考えたい。苦しみは悪であると考えられがちな世の中で、このヨセフ物語の学びを通じて、神様の子どもに与えられる苦しみが、ついには神様の子どもの救いにとって神様にあって善とされるという摂理の信仰が養われればと願う。

「神さまのお約束が実現するために」

愛する子どもたち、おはようございます。

暑い毎日ですが、元気ですか。今週も、みんなの心と体が神さまによって守られますように。

ところで、先生は、聖書を読むとき、つくづく思うことがあります。本当に神さまって、すごいなあ！と。だって、先生なんか、歳のせいでしょうか？　きのう、誰かと約束したことも、今日になったら、その約束をもう忘れてしまっていることが多いのです。しかし、神さまは違いますね。何千年もの昔になさったお約束をちゃんとおぼえていらして、まさかと思うようなことを用いられて、お約束を果たされるからです。その一番の例が、最初の人間アダムさんとエバさんが罪を犯して、神さまに背いてしまったすぐ後で、二人を誘惑した蛇、悪魔を裁かれる中で、お約束してくださったこと、つまり、「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く」（創世記3:15)、そうです、全世界の救い主を送るというお約束ですね。神さまは、何千年とかけて、このお約束の内容をもっとはっきりとなさって、少しずつ実現するようになさったわけです。

さあ、神さまは、このお約束を実現なさるために、世界中のたくさんの人の中から、たった一人、まずアブラハムさんをお選びになって、そのアブラハムさんからイサクさん、そして、ヤコブさんへと続く血筋を選ばれました。きょうからは、そのヤコブさんの11番目の息子、ヨセフさんのお話となりますが、実は、神さまは、ヨセフさんのひいおじいさんのアブラハムさんにこんなお約束をなさっておられたのです。「主はアブラムに言われた。『よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。ここに戻って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである』」（創世記15:13〜16)。アブラハムさんの子孫が、どこかの国で四百年もの間奴隷になるというお約束ですが、アブラハムさんの子孫にとっては、奴隷になることなんか、とても大変なことで、嫌なことです。しかし、神さまは、全世界の救い主を送るために絶対に必要なこととして、このようなお約束をなさったわけです。そして、いよいよ、ヨセフさんの時になって、このお約束が実現へと向かうようになったのです。しかし、誰も、そんなことは夢にも思っていませんでした。また、私たちも、今朝の聖書箇所だけを読むならば、そのように話が進んで行くなんて思うことができません。だって、ここに書いてあることは、ヨセフさんにとっては、本当に災難だからです。

ヨセフさんが17歳の時のことでした。ヨセフさんのお仕事は、お兄さんたちと一緒に羊のお世話をすることでした。ところで、ヨセフさんは、ヤコブさんが歳を取ってから生まれた子どもだったので、お父さんにとてもかわいがられたのでした。それで、お兄さんたちは、弟が嫌いでたまりませんでした。また、ヨセフさんは、ヨセフさんで、お兄さんたちのことをお父さんにいちいち告げ口していましたから、そのことでも、お兄さんたちは、ヨセフさんのことが嫌いで嫌いでたまらなかったことでしょう。そんなヨセフさんの態度からだと、これから起こることは、まったく予想できない災難ではなく、自分でまいた種が原因と言えるかも知れませんね。

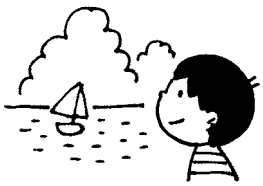
ある日、お兄さんたちの憎しみが殺意へと変わることが起こったのです。ヨセフさん、妙な夢を見ました。畑で、お兄さんたちの束が、ヨセフさんの束にひれ伏したり、太陽と月と11の星が、ヨセフさんにひれ伏したりする夢です。お兄さんたちは、その夢のことを聞いて、何を意味しているのか、ピーンと来ました。お兄さんたちが、そればかりか、お父さん、お母さんも、ヨセフさんにひれ伏すということです。お兄さんたちは、この夢のことを聞いて、はらわたがにえくりかえるようでした。そして、ついにヨセフさんを殺して、野原の穴に放り込んで、お父さんには、野獣に喰い殺されたと報告しようと相談しました。しかし、長男のルベンさん、四男のユダさんは、ヨセフさんを殺すことに反対しましたから、ヨセフさんは殺されずに、生きたまま、野原の穴に放り込まれてしまいました。後になって、長男のルベンさんが、ヨセフさんを穴から助けようとして穴の所に行ったのですが、もう既にヨセフさんは奴隷として売られて、エジプトに連れて行かれてしまっていたのでした。

エジプトへと連れて行かれたヨセフさんは、その後、どうなったのかというと、エジプトの王様にお仕えするお役人、ポティファルさんの奴隷となりました。ポティファルさんは、侍従長ですから、王様にお仕えするお役人の中でも一番偉い人です。そういう人の奴隷となったわけです。

さて、こうして、ヨセフさん、エジプトで、たった一人、奴隷としての生活を始めたのですが、当然、ヨセフさんは、神さまのお約束のために自分が用いられているなんて、夢にも思っていませんでした。もしかしたら、お兄さんたちに穴に突き落とされた時から、「神さま、どうして、一緒にいてくださるはずのに、わたしを守ってくださらなかったのですか！」と、神さまに何度も何度も訴えていたかもしれません。しかし、決して、神さまは、ヨセフさんから遠く離れてしまわれたわけではありませんでした。神さまがヨセフさんといつも一緒だったからこそ、お兄さんたちに穴に突き落とされて、奴隷としてエジプトに連れて行かれ、エジプトの王様の侍従長ポティファルにお仕えするようになったのでした。すべては、ヨセフさんと一緒におられる神さまのお導きによることでした。神さまは、ヨセフさんの災難をも、ヨセフさん自身にとって、さらにはヨセフさんの家族のみんなにとって、さらには今の私たちにとって、ためになる善いこととしてくださったのです。全世界の救い主イエス様を送るために絶対に必要な準備としてくださったのです。この世界と時間のすべてをお考えのままにご支配なさる、神さまを心から賛美しましょう。　　(長谷川潤)

〔今週の暗唱聖句〕　コリントの信徒への手紙 二 1章20節

神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。



8月13日　売られたヨセフ　幼稚科

〈ねらい〉

ドラマチックなヨセフ物語のはじまりです。神さまがどんな時も守ってくださることを覚えて祈れたらと思います。

〈暗唱聖句〉

「父はこう言って、ヨセフのために泣いた」。

〈展開例〉

①ヤコブさんには12人の息子がいました。その中でもヨセフは年をとってからの子だったので、どの兄弟よりもかわいがりました。でも、兄たちにはそれがとても憎らしく、ヨセフとは話もしたくないと思っていました。そんなある日、ヨセフは兄たちに夢の話をしました。

②「兄さん、兄さん。私の夢の話を聞いてください。畑で私たちが束を結わえていると、突然私の束が起き上がり、兄さんたちの束がわたしの束の前に来てひれ伏しました」。それを聞いた兄たちは、もうかんかんです。「なに、お前が私たちの王になって、お前にひれ伏すというのか」。兄たちはヨセフをますます憎みました。

③また別の夢を見たときはヤコブさんにも話をしました。「お父さん、太陽と月と11の星が私にひれ伏している夢を見ました」。ヤコブさんは、ヤコブをしかりましたが、このことを心に留めました。

④ある日、遠くまで羊の群れを飼っていた兄たちの様子を知ろうと、ヤコブはヨセフに見てきてくれと頼みました。ヨセフは言われたとおり、兄たちのいるところまでやってきました。

⑤「あれはヨセフじゃないか。また我々を馬鹿にするためにやってきたのか。いっそのこと殺してしまおう。そしてあれの夢がどうなるか、見てやろう。どうだ」。兄たちは相談しました。

⑥しかし、長男のルベンはヨセフを助けようとして言いました。「私たちが殺すのはよそう。それより、この井戸の投げ込んでしまったらどうだ」。他の兄たちもこの意見に賛成しました。彼らはヨセフがやってくると、服を剥ぎ取り、井戸の中に投げ込みました。でもルベンは、後できて助け出そうと思っていたのでした。

⑦しかし、兄たちが食事をしている間に、井戸を通りかかった商人たちがヨセフを井戸から引き上げ、エジプトに売り飛ばしてしまったのです。ルベンはヨセフがいないことに気づくと嘆きました。兄弟たちは自分たちのしたことを隠そうと、ヨセフの服をやぎの血で染めて、父のところに持っていって、「この服は多分ヨセフのだと思いますけれども、きっと野獣に襲われたのです」と言いました。

⑧ヤコブは悲しみのあまり自分の着ている服を引き裂き、「私もあのところへ行く」と言って、ヨセフのために毎日泣きました。この後、エジプトに売られたヨセフさんはどうなってしまうのでしょうか。またヤコブさんの悲しみはいやされないのでしょうか。大丈夫。神さまはヨセフさんと一緒におられます。それに神さまを信じる人が悲しんでいるのを神さまは必ずいやしてくださいます。

〈お祈り〉

天の神さま。どうかヨセフさんをお守りください。そして悲しんでいるヤコブさんをお守りください。そして私たちもお守りください。アーメン。

8月13日　売られたヨセフ　小学科下級

〈ねらい〉

神様のご支配に信頼する。

〈はじめに〉

夏休みも一ヶ月が過ぎました。夏休みの間のこのクラスはいかがでしたか？ 暑い中での分級の尊いご奉仕を感謝します。小学校は夏休みがありますが、日曜学校にはお休みはありません。欧米の教会ではお休みもあったりしますが。教えるという奉仕にお休みはありませんが、奉仕者のリフレッシュを必要に覚えます。奉仕者同志、祈りに覚え、支え合い、教え合い、お互いに気遣いあいましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①ヨセフは、お父さんヤコブからかわいがられていましたか。

②ヨセフさんはどんな服を着ていましたか。

③他の兄弟のお兄さんたちは、ヨセフさんのことが好きでしたか。

④それは、なぜでしょうか。

〈展開例〉

アブラハムさん、イサクさん、そしてヤコブさんと旧約のお話がずっと続いています。私たちには、聖書が与えられていますから、一人ひとりが神様からどんな道を歩まされてきたか、全部知ることが出来ます。この先、この人にどんなことが起きるのか、どうしたのか、どんな失敗をしたのか、どんないいことがあったのか。

でも、今の私たちは、自分の明日のこと、一週間先のこと、一年先のこと未来のこと、何が起こるのか、自分はどうなるのか確かなことはわかりませんね。だから先のことを心配に思ったり、何でこんなことがあるんだろうと悩んだりします。

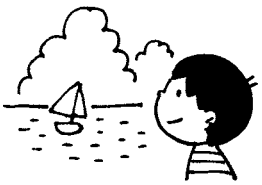
今日のヨセフさんもそうです。ヨセフさんは17歳でした。みなさんより大きいですね。兄弟が上に10人、そして弟が一人いたので、全部で12人でした。でもお父さんヤコブが随分年をとってから生まれたヨセフさんはとてもとてもヤコブさんが大切にかわいがっていました。ほかの子どもたちを嫌っているわけではありません。でもヨセフさんは特別扱いだったのです。当然、上のお兄さんは面白くありませんよね。いつかいつか、ヨセフさんをやっつけてやろうと思ってました。

ある日、ヨセフさんは不思議な夢を見て、そのことをお兄さんに話しました。その夢の内容は、お兄さんたちの心をますます怒らせるような内容で、ヨセフさんにみんながひれ伏すというものでした。お兄さんたちの怒りは頂点で、とうとう、殺しはしませんでしたが、ヨセフさんを穴に突き落として、お父さんにはヨセフさんは動物に襲われたという、うその報告をしました。ヤコブさんの悲しみはどれほどだったでしょう。

ヨセフさんは、通りすがりのミディアン人に引き上げられエジプトに奴隷として売られてしまいました。でもヨセフさんはエジプトで一生懸命働きました。神様なぜこんな目にあうのですか、とヨセフさんは悲しい時もあったかもしれません。でもこれには、深い深い神様の救いのご計画があったのです。私たちにはすぐには分からないことでも、すべてご存知の神様が私の神様だということを知りましょう。

〈お祈り〉

私に神様を信頼する信仰を与えてください。



8月13日　売られたヨセフ　小学科上級

〈ねらい①〉

聖書において、神の摂理を教える最大のテキストはヨセフ物語ですが、その「教え」を抽出・精錬して生み出された箴言の言葉は、子どもたちにも必ずや深い印象を残すカテキスムです。

〈展開例①〉

人の歩む道は主の御目の前にある。
その道を主はすべて計っておられる。
（箴言5:21）

主は御旨にそってすべてのことをされる。
逆らう者をも災いの日のために造られる。
（箴言16:4）

人間の心は自分の道を計画する。
主が一歩一歩を備えてくださる。
（箴言16:9）

くじはひざの上に投げるが
ふさわしい定めはすべて主から与えられる。
（箴言16:33）

人の一歩一歩を定めるのは主である。
人は自らの道について何を理解していようか。
（箴言20:24）

〈ねらい②〉

「すべてのことに意味がある」と信じて生きる、信仰者の根源的な幸いを伝える。

〈展開例②〉

お兄さんたちの悪だくらみによって、エジプトに連れて行かれてしまったヨセフさん。かわいそうだね。エジプトでも色んな大変なことがありますが、やがて王様に気に入られてヨセフさんが総理大臣になっていくという、とってもスケールの大きなお話が、この後に続きます。でもね、お話はそれで終りではありません。ヨセフさんの後、イスラエルの人たちはエジプトに住むようになりますが、やがてエジプトのファラオから憎まれて、奴隷として追い使われて苦しみの叫びをあげます。そこに登場するのがモーセです。モーセさんによってエジプトから脱出するという救いの大きな物語が続くわけです。さらに言えば、それだけじゃないよ。その後カナンの地で、ダビデ王が王国を築き、そしてそのダビデの家からやがてイエス様という救い主が与えられます。そこが救いのご計画のクライマックスです。そう考えると、今日聞いたお話は、まだまだ始まりの始まりだね。

でもこの始まりの始まりからもうすでに、神様はすべてのことを考えつくして用意しておられました。お兄さんたちの悪だくらみによってヨセフさんはエジプトに連れて行かれてしまいましたが、でもこの出来事がなければ、その後の大きな物語は起こらないのですね。それは偶然ではなく、神様が定めておられたことです。

このヨセフ物語には神様が直接登場なさることはありません。でもその大きな手がすべてを包んでいます。私たちの人生にも、神様が直接登場なさって、言葉を与えてくださることなどまずありません。でもいつでも神様は、私たちを見ていてくださって、すべてを用意していてくださいます。私たちの人生に起こるすべてのことには意味があります。その意味は、神様が知っておられます。私たちの思いをこえて、神様は、終りの時の神の国の完成に向けて、大きな救いの物語を進めておられます。そのために必要な一つひとつのことを、私たちのために定めてくださっています。ヨセフが味わったような、痛みや辛さを味わうこともあるでしょう。でもすべては、大きな物語の完成（私たちの救いの完成）のために、意味のあることなのです。

〈祈り〉

神様、あなたのもとで、すべてのことに意味があると信じる幸いを、もっと教えてください。

8月13日　売られたヨセフ　中学科

〈ねらい〉

歴史を支配される神様の摂理のスケールの大きさを覚える。

〈展開例〉

Q．皆は「自分は一体、何をするために生まれて来たんだろう」、こんな疑問を感じたことはないだろうか。思春期というのは、こういうでっかい謎が気になったりする時期だと思う。むしろ、自分の一生について時間をかけて考えられる今の時期に思う存分考えて欲しい。みんなは中学生なりに色んなことをしながら自分を探していると思う。学校の課題。塾のノルマ。部活に習いこと。恋愛、友だち。色々あると思うが、じゃあ、君は勉強するために生まれて来たのか？　部活をするために生まれて来たのか？習い事をするために生まれて来たのか？　恋愛のために生まれて来たのか。抱えているモノは人それぞれ。とはいえ、今の君たちはまだ何者でもないように感じるかもしれない。

①今日から始まったヨセフ物語には様々な人たちが登場するが、神様はそうした色々な人の、色々な人生を用いて、神様が約束を実現されていく様をヨセフの人生に現わされる。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、そして、これらの人たちと一緒の時代を生きた数限りない人たち。こうした人たちがそれぞれに生きて、神様の約束が少しずつ実現してく。神様はこういう仕方で、一人の一生だけでなく、世界が始まってから完成するまでの「歴史」というめちゃめちゃ規模のでかいモノを、御自分の計画に従って整えて、導いていく。そんな中で君たちは何のために生まれてきたのか。具体的な形はこれから少しずつ形づくれば良い。ただ、今日覚えて欲しいのは君の人生には間違いなく「何かのため」という目的と意味があるということ。そして、いつかその目的のために存分に力を発揮するために、皆の「今」には図りきれない意味がある。

②ヨセフは一見、苦しみのどん底のような人生を送る。家族との別離。兄弟からの憎悪。奴隷という束縛。しかし、ヨセフの苦しみは自分の一族すべて、さらにはエジプトという当時のトップ大国全体を救いへと導くために必要な苦しみであった。ヨセフの若い時の苦しみは、ヨセフ自身の未来のため、エジプトという大きな社会が祝福されるため、そして、ヨセフの後の人々の救いという今後の歴史のため、その歴史を導かれる神様のために無くてはならないものであった。

③君が何をするために生まれて来たのか。それは他人にはわからない。でも、君の人生はヨセフを導き、歴史を導く神様の愛の眼差しの内にある。君は自分のためだけに生まれて来たわけじゃない。君は、社会のためだけに生まれて来たわけじゃない。君は神様が世界を祝福へと導くその立役者となるために生まれて来た。君はたまたま生まれた、いてもいなくても同じな、そんな空しい存在ではない。君が生まれるのは、この時代の、この国でなくてはならなかった。

君は世界や社会の中でちっぽけな存在ではない。君は広大な世界と壮大な歴史を舞台に飛び回る神様が選び出したメインキャストである。神様の目線で自分を見つめるとき、自分という存在は、自分が思う以上にかけがえのない存在であるということを覚えて欲しい。

〈祈り〉

世界と時間を導く神様、あなたの創られるこの世界で生きられることを感謝します。アーメン。

8月20日　総理大臣になったヨセフ　聖書研究

テテキスト　創世記 41章1〜44節

〈背景と文脈〉

神は、ポティファルに仕えるヨセフと共におられ、彼の働きを祝福された。しかしヨセフは、ポティファルの妻の誘惑を退けたことから、新しい試練にあう。妻の偽りの言葉を信じたポティファルは、ヨセフを捕えて、王の囚人のための監獄に彼を入れた。しかし主はヨセフと共におられ、恵みを与えられたので、ヨセフは監守長の信任を得た。

この後、ファラオの給仕役の長と料理役の長が王に過ちを犯し、ヨセフのいた獄に投獄された。二人はそれぞれ夢を見たが、その意味を理解できないでいた。ヨセフは彼らの夢を解き明かし、それが現実になった。彼は、職に復帰することになった給仕役の長に、無実の罪で投獄されていることをファラオに告げ、解放されるよう取り計らってほしい、と依頼した。しかし、給仕役の長はそのヨセフの願いを忘れてしまった。そのため、その後2年、彼はなお囚人として獄で生活する。しかし、これが神の摂理だったことが、今日の箇所から明らかになる。

〈ファラオの夢を解くヨセフ（41:1〜36)〉

ヨセフが給仕役の長の夢を解いたその2年後、ファラオはふたつの夢を見た。やせ細った七頭の雌牛が、よく肥えた七頭の雌牛を食い尽した。また、実の入っていない干からびた七つの穂が、太って実の入った七つの穂をのみ込んでしまった。これらの夢を見たファラオはひどく胸が騒ぎ、エジプト中の魔術師と賢者をすべて呼び集め、解き明かしを求めたが、誰にもそれができなかった。

そのとき、給仕役の長は、ヨセフがかつて獄中で、彼と料理役の長の夢を解き、その通りになったことを思い出し、ファラオに彼のことを告げた。ヨセフは獄から連れ出され、ファラオの前に出た。神の時が来た。

王はふたつの夢をヨセフに話した。ヨセフは、王が見た夢は、神がこれからなさろうとしておられることを、ファラオに告げるものであり、ふたつの夢の意味は同じであること、また神がそれを間もなく起こそうと決定されていることを告げた。それは7年の豊作のあとに7年の飢饉の年が来ることの予言であり、ヨセフはその対策として何をなすべきかファラオに進言した。

〈宰相になったヨセフ（41:37〜44)〉

ファラオはヨセフに神の霊が宿っていることを認め、彼をエジプト国民のもっとも上に立つ宰相として任命した。ファラオの言葉、「お前の許しなしには、このエジプト全国で、だれも、手足を上げてはならない」(44) は、ヨセフが王の次の位の支配者であり、すべての国民を治める者とされたことを示唆する。囚人の身分だったヨセフは、神の時が来た時、神によって引き上げられた。そのことが、父ヤコブの一族を救うために、神が用意された道であったことが、42章以下の記事からわかる。

ヨセフの人生の中で、神は彼に伴い、恵みを与えられた。神はポティファルの奴隷となったヨセフと共におられ、その祝福は彼のゆえにポテファルの家、財産にも及んだ (39:2〜5)。また神は、無実の罪によって投獄されたヨセフと共におられ、恵みを与え、監守長の目にかなうように導かれた (39:21)。

そのように、神はヨセフと共におられ、彼の人生を導かれた。ヨセフの夢の解き明かしを聞いたファラオは、「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」と感嘆している (41:38)。ヨセフは自分の境遇を恨むことなく、神を信じ、そのような環境の中で彼を導いておられる神に自分自身をゆだねた。神はヨセフと共におられ、祝福され、またその祝福は、周囲の人々にも及んだのである。神は彼を神の救済史のなかで用いられたばかりでなく、異教の地でご自身の証人としても用いられた。　（後藤公子）

8月20日　総理大臣になったヨセフ　説教展開例

テキスト　創世記 41章1〜44節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問14

〔単元のねらい〕

神様がどんな時もヨセフと共におられた、このインマヌエルから、神様の豊かな祝福がヨセフ自身はもちろん、周りの未信者の人々にも及ぼされていた事実を教えたい。子どもたちが、この事実を知ることで、神様の子どもとされている自分の存在意義をいよいよおぼえて、日々、勇気をもって歩めればと願う。

「神さまはどんな時も一緒」

愛する子どもたち、おはようございます。

毎日暑い日が続いていますが、森や林では、ツクツクボウシが鳴くようになりました。先生は、みんなみたいに小学生の頃、ツクツクボウシが鳴くようになると、ツクツクボウシが「夏休みももうすぐ終わりだから、宿題頑張って！」と言っているように聞こえて、ちょっとあせったものです。みんなは、どうですか。

さあ、この夏休みは、元気に過ごせましたか。もしかしたら、クーラーかけっぱなしで寝て、寝冷えしゃったことがあったかも知れませんね。そして、何日間か、高い熱が出て、苦しい思いをしたかも知れません。そんな病気の時、みんなは、どう思うでしょうか。確かにクーラーかけっぱなしが原因で、体をこわしてしまったわけだけれど、神さまが見捨てられたので、病気になっちゃったのかな？　それで、苦しい思いをしているのかな？と思ったことないでしょうか。神さまが、どこかに行ってしまわれたので、病気になったのでしょうか。きょうは、たとえば、病気で苦しい時とか、神さまは、どこにおられるのかをヨセフさんのお話から考えてみましょう。

ヨセフさん、お兄さんたちに嫌われて、遠い遠いエジプトの国へと奴隷として売られて連れて行かれました。そして、エジプトの王様にお仕えする侍従長、ポティファルさんの奴隷として働くことになりました。ヨセフさんは、もしかしたら、お兄さんたちに穴に突き落とされた時から、「神さま、どうして、一緒にいてくださるはずなのに、わたしを守ってくださらなかったのですか！」と、神さまに何度も何度も訴えていたかも知れませんね。しかし、神さまは、ヨセフさんから、ひとときも離れられることなく、いつも一緒だったのです。創世記の第39章には、そのことが繰り返し書いてあります。たとえば、「主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。彼はエジプト人の主人の家にいた。主が共におられ、主が彼のすることをすべてうまく計らわれるのを見た主人は、ヨセフに目をかけて身近に仕えさせ、家の管理をゆだね、財産をすべて彼の手に任せた」(39:2〜4)。「しかし、主がヨセフと共におられ、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれたので、監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取りしきるようになった。監守長は、ヨセフの手にゆだねたことには、一切目を配らなくてもよかった。主がヨセフと共におられ、ヨセフがすることを主がうまく計らわれたからである」(39:21〜23)。神さまがいつもヨセフさんと一緒だったので、ヨセフさんだけでなく、ポティファルさんの家も豊かに祝福されたのでした。それで、まず、ヨセフさんは、ポティファルさんの家のことを何でも任せられました。ところで、ヨセフさんは、とてもイケメンだったようです。ある日、ポティファルさんの奥さんがヨセフさんを誘惑しました。しかし、神さまが一緒でしたから、それを退

けることができましたが、ポティファルさんに誤解されてしまい、牢屋に入れられてしまったのです。それでも、神さまがヨセフさんと一緒だったので、牢屋でも、牢屋を見張るお役人から、牢屋のことをすべて任せられました。その次の第40章には、神さまがヨセフさんといつも一緒だったので、ヨセフさんが、人の見た夢の意味がわかるようになったことが書いてあります。それで、王様のご機嫌を損ねるようなことをしでかして、同じ牢屋に入れられた給仕長と料理長の夢の意味を教えます。それぞれの夢は、三日後に給仕長は許されて元のお仕事に戻るけれども、料理長は許されずに死刑にされるといった意味でした。実際、三日後にその通りになったのですが、ヨセフさんは、給仕長に、その通りになって幸せになった時には、私のことを思い出して、王様に牢屋から出すように取り計らってくださいとお願いしました。ところが、給仕長は、つい、ヨセフさんのことを忘れてしまったのです。

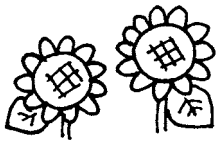
それから、二年が経った様子です。王様が奇妙な夢を見ました。突然、川から、太った七頭の雌牛が上がって来て、岸辺で草を食べ始めるのです。そうしたら、やせた七頭の雌牛が上がって来て、さっきの太った七頭の雌牛を食べてしまいます。また、こんな奇妙な夢も見ました。一本の茎から豊かに実を結んだ七本の穂が生えて来たのです。そうしたら、実のない、ひからびた七本の穂が生えて来て、さっきの豊かに実を結んだ七本の穂を飲み込んでしまったのです。王様は、国中の魔術師なんかに、夢の意味を問いましたが、誰ひとり分かりません。すると、給仕長が、ヨセフさんのことを思い出して、王様に、どんな夢でもその意味がわかるヘブライ人が牢屋にいることを告げました。早速、王様は、ヨセフさんを牢屋から出して、連れて来させ、夢の意味を問います。すると、ヨセフさん、一緒にいてくださる神さまが教えてくださったこととして、その夢の意味を教えます。その奇妙な夢は、エジプトの国中に七年間もたらされる豊作と、それに続く七年間、国中を襲う飢饉のことだったのです。そして、ヨセフさんは、王様に七年間の飢饉に備えるために、食べ物を七年分蓄えるようにアドヴァイスもしたのです。

王様は、ヨセフさんのことがたいそう気に入って、ヨセフさんをエジプトの国のナンバーツー、総理大臣にしたのでした。最初、野原の穴に、お兄さんたちによって突き落とされた時には、真っ暗な中で、これからどうなるのだろう？神さまはどこに行ってしまわれたのだろう？と思ったに違いありません。そして、ヨセフさんは奴隷としてエジプトに連れて行かれましたが、神さまは決してヨセフさんから離れることなく、いつも一緒におられました。そして、たとえ牢屋に入れられても一緒におられて、ついにヨセフさんをエジプトの国の総理大臣になるようにお導きくださったのです。

このように神さまは、たとえば病気で苦しい時も一緒にいてくださいます。悲しい時、つらい時も、神さまは一緒です。苦しい時、悲しい時、つらい時ばかりではありません。楽しい時も、いやいや普通の時も、神さまは一緒にいて私たちを祝福してくださいます。私たちだけでなく、私たちの周りの人たち、お友だちも祝福してくださいます。今週も、いつも、神さまは一緒。どんな時も一緒にいてくださる神さまに信頼し、感謝して生活しましょう。　　(長谷川潤)

〔今週の暗唱聖句〕　創世記 39章2節

主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。



8月20日　総理大臣になったヨセフ　幼稚科

〈ねらい〉

困難にあっても、自分の力ではなく神さまが道を開いて下さることを信じられるように。

〈暗唱聖句〉

「わたしではありません。神さまが王さまの幸いついて告げられるのです」。

〈展開例〉

①エジプトに売られていったヨセフは、なんと無実の罪で牢屋に入れられました。神さまはもうヨセフを見捨てられたのでしょうか。そうではありません。神さまは牢屋の中でもヨセフさんとともにおられ、そこから素晴らしい道を用意してくださっているのです。

②ある日、エジプトの王さまの給仕役と料理役が、王さまに怒られて牢屋に入れられました。二人はこの後どうなってしまうのか心配でたまりません。そして二人は同じ夜に夢を見ました。給仕役の夢はこうです。

③一本のぶどうの木に三本のつるがあり、それがすくすく大きくなって、ぶどうが取れました。私はそれを王さまの杯に注ぎました。ヨセフはそれを聞いて解き明かしをしました。「三日たてば、あなたは元の仕事に戻ることができます。そのときは、どうか私のことも思い出してください」。

④三日後、ヨセフの解き明かしたとおり給仕役は解放されました。でもヨセフのことは、すっかり忘れてしまいました。

⑤それから、二年たちました。今度は王さまが夢を見ました。「誰か、私の夢を解き明かしてくれる者はいないだろうか。エジプト中の魔術師と賢者を集めて聞いたが、誰にも分からなかった。ああ、こまった。心がさわぐ。きっと何か大切な知らせに違いないのに」。それを聞いた、あの給仕役はヨセフのことを思い出して、「きっと、ヨセフなら分かります」と王さまに言いました。

⑥早速、ヨセフは王さまの前に出されました。「お前は夢を解き明かすことができるそうだな」。王さまが尋ねますと、ヨセフは「私ではありません。神さまが王さまの幸せのために告げられるのです」。王さまは安心して夢のことを話し始めました。

⑨「ナイル川のほとりに七頭のよく太った牛が上がってきた後、七頭の醜いやせた牛が上がってきて、最初の太った七頭を食べてしまった。また、一本の茎から七つのよく実の入った穂が出てきた後、やせて干からびた七つの穂が出てきて、よく実った七つの穂を飲み込んでしまった。この意味を告げるものが誰もいないのだ。おまえには分かるか？」ヨセフは答えて言いました。「七頭の太った牛と七つのよく実った穂は、エジプトの国に7年間の大豊作があることを表し、七頭のやせた牛と七つの干からびた穂は、その後に起こる大飢饉を表しています。だから最初の七年間の豊作の時に食べ物を蓄えておけば、後の七年間の飢饉の時も、エジプトでは誰も困ることはありません」。

⑩王さまは驚きながら、「ヨセフほど神さまの霊が宿っている人は他にいない。こんなに神さまに守られている者がエジプトのために働いてくれれば、この国は神さまに守られることになるであろう」と言って、ヨセフを総理大臣に任命しました。そしてヨセフによって大飢饉のときも国中の人が守られました。でもヨセフはこう言うでしょう。「私ではなく、神さまがすべての人の幸せのために告げられたのです」。

〈お祈り〉

苦しい時も、いつも一緒にいて守ってくださる神さま。すべての人が幸せのために告げられた聖書の言葉を私にもっと教えてください。そしてすべての人が幸せになりますように、お守りください。アーメン。

8月20日　総理大臣になったヨセフ　小学科下級

〈ねらい〉

どんな時も共におられる神様を覚え、自分だけでなく周りのためにも祈ることができる子どもになりたい。

〈はじめに〉

いよいよ夏休みも数日で終わってしまいます。すでに学校が始まっている子どもたちもいるかもしれません。子どもたちの様子はいかがでしょうか。宿題に追われていたり、緊張や不安があったりするかもしれません。子どもたちの心のうちを聞く時間ももちましょう。そして、全てを神様に委ねて安心してこの一週間をすごすことができるよう共に祈りましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①誰が夢を見ましたか。

②最初に川から上がってきた雌牛は、太っていましたか。やせていましたか。

③次に来た雌牛はどうでしたか。

④醜い、やせた雌牛はどうなりましたか。

〈展開例〉

ヨセフさんのお話が続きます。お父さんに愛されていたのに、兄弟からは嫌われていたヨセフさんは、悲しい思いをしましたね。お兄さんたちに見捨てられ、遠い国に奴隷として連れて行かれました。家族から離れてしまって一人ぼっちになってしまいました。でもそんなヨセフさんのそばから離れないでずっと一緒にいてくださった方、神様がおられました。どんな時も一緒にいてくださいました。この神様に応えて、ヨセフさんも一生懸命自分に当てられたお仕事を朝から晩まで心を込めてしました。何年も何年も働きました。だんだん周りの人から、このヨセフさんは他の人と違うぞ、よく仕事ができるぞ、信頼する人が増えてきました。

ある日、この国の王様が夢を見て、その夢の意味を教えるという大きな仕事がヨセフさんに頼まれました。ヨセフさんはいつものように神様から力をいただいて、王様の見た夢の意味を王様にお伝えすることができました、そのお陰で、このエジプトの国の大勢の人の生活、命を守ることができました。王様はヨセフさんを信頼して、この国の二番目に偉い人、総理大臣という大事なお仕事をヨセフさんに与えました。

この国に来たときは奴隷として売られて来て、誰一人知った人もいなくて、しかも兄弟から嫌われたという心に大きな傷をもっていたヨセフさんも、今では総理大臣です。誰がこんな人になると思っていたでしょう。もちろんお兄さんたちだって想像もしていなかったこと、誰も知らないことが、ヨセフさんに起こっていたのですね。でも、このことも神様の大きな計画の中にあったのです。

私たちも悲しい時、いやだと思う時、なぜ？と思う時があります。でもどんなときでもヨセフさんのそばに神様がいてくださった、その同じ神様が私たちのそばに今もいてくださいます。勇気が出てきますね。私たちの回りの人たちはどうでしょう。私だけでなく、お友だちにも、家族に人にも、この神様が共にいてくださる、この祝福をお伝えしましょう。

〈お祈り〉

神様、どんなときにも共にいてくださりありがとうございます。

8月20日　総理大臣になったヨセフ　小学科上級

〈ねらい①〉

前回と同じように、思いを超えた、神の救いの物語のスケールの大きさに、共に驚く。

〈展開例①〉

聖書の中でも飛びぬけて面白いテキストですから、聖書物語を丁寧に確認するだけで十分に意義深いと思います。礼拝における説教者が、時間の都合で十分に語れないような場合に、分級でフォローなさればいいと思います。その際は、説教展開例を参考になさってください。紙芝居や絵本も充実していると思います。

〈ねらい②〉

主を信じる者は、決して主から見捨てられることはないという確信を伝える。

〈展開例②〉

「強く、また雄々しくあれ。恐れてはならない。彼らのゆえにうろたえてはならない。あなたの神、主は、あなたと共に歩まれる。あなたを見放すことも、見捨てられることもない。」（申命記31:6）

説教展開例にあるように、ヨセフはエジプトで様々な苦悩を味わいましたが、いつも神様が共にいてくださったので、ことがうまく運びました。でも、そんなヨセフさんであっても、もう自分は神様から見捨てられてしまったと、悲しみに沈んでしまった時はあったでしょう。お兄さんたちへの恨みと怒りで、心が真っ暗になった時もあったかもしれません。やつらのせいで、おれはこんな惨めな暮らしをしなければいけない……と、考えてもおかしくありません。でも考えてみれば、元々はヨセフも悪かったのでしたね。お父さんにひいきされているのをいいことに、お兄さんたちに対しても高慢にふるまって、怒らせているのにも気付かない。無神経なジコチュー人間でした。

どちらも罪人でした。罪人同士が憎しみ合って、傷つけあった末に、ヨセフの惨めな牢獄生活があるのです。それは罪の牢獄と言ってもいいですね。罪に支配された人間が、神様の御心からまったく遠く離れた思いと行いによって傷を深め、罪の牢獄に捕らえられて行き詰っているのです。神様から「もうお前のことなんか知らない」って言われてもおかしくない、むしろ言われるのが当然です。それはヨセフだけじゃない。私たちはみんな、神様から見捨てられて当然の者たちです。行き詰った罪人です。

でも神様は、そんなヨセフのことを、私たちのことを、どこまでも見捨てないで、共にいてくださる方なのだと、今日の御言葉は教えてくれます。イエス様を信じるなら、私たちは神様から絶対に見捨てられることはありません。イエス様が、私たちの代わりに見捨てられてくださったのですから、もう私たちが見捨てられることはありません。皆さんにも、ヨセフのように行き詰る時があるでしょう。考えることもできない悲劇が襲う時もあります。でも神様は、絶対にあなたを見捨ててはいません。その苦しみにも必ず意味があります。

〈祈り〉

ヨセフとどこまでも共にいてくださった神様、どうか私たちといつまでも共にいてください。思いもよらない悲しみに襲われる時にも、考えたこともなかった苦しみを味わう時にも、私たちの目を開いてくださって、あなたが共にいてくださることを教えてください。どんな時も、あなたを信じ、強く雄々しくあることができますように。

8月20日　総理大臣になったヨセフ　中学科

〈ねらい〉

常に共にいてくださる主を覚える。

〈展開例〉

①「神様が私たちと共におられる」小さい頃から教会に来ている人には聞きなれた言葉だと思う。教会は、世界を創り、世界と歴史を導く神様が皆と一緒にいる、という世間の人からすれば信じられないことを大真面目で告白する。

Q．みんなは、どうだろう？　自分の生活に神様は確かに一緒にいてくださる、こんな風に感じたことがあるだろうか？　反対に、そんなすごい方が一緒にいるにしては、自分の毎日は余りにしょぼい。本当に神様は私と一緒にいるのだろうか？　こんな疑問を感じたことはないか？

②今日、聞いたエジプトで奴隷として働くヨセフのサクセスストーリーはただの、成り上がりの深いい話ではない。「主が共におられた」のでヨセフは、はた目にはつらそうな状況の中でも道が切り開かれていった。ナレーションはそう語るが、ヨセフの胸中がどうであったかはわからない。聖書は、ヨセフがどう感じたかではなく、「主はヨセフと共にいた」という事実をただ述べる。しかし、神様が共にいられるということは、まったく実感のないものであるわけがない。ヨセフは与えられた知恵や夢解きという才能を用いて一つひとつの状況を一生懸命に生きていく中で、神様が共におられることを確かに示された。どんな困難な中でも常にポジティブでいれたヨセフの信仰は、そうした歩みの中で培われていった。信じたから助けられたのではない。助けてくださったから信じることができたのである。苦しい状況であったがヨセフは確かに神様の力によって守られていった。未来はヨセフの前に閉じていない。希望は常に彼の前にあった。

③「神様が自分と一緒にいてくださる」この信仰は神様に守られる中で養われる。守られる道のりを振り返るときに初めて気がつくことも多いだろう。しかし、神様に助けられ祝福され続ける日々の積み重ねが、この素朴だが力強い信仰を育む。そして、まったくの真顔で「ああ、神様は私の毎日に確かに共にいてくださる」と思える時、どんな困難の中にあっても決して絶望しない、希望に満ちた生き様を君の人生につくりあげる。

④ヨセフほどの劇的な状況ではないにしろ、君の人生で何かがうまく運ぶとき、そこには神様の導きが確実にある。神様と共に生きることで受ける祝福は幅が広い。命の危機から救われるような大きなことかもしれないし、毎日の中の些細なことかもしれない。それが大きなことであれ小さなことであれ、よく目を凝らせば神様の恵みは君の毎日に溢れかえっているはず。そうやって、日々の恵みを見つめ続けることによって、目を凝らしても神様の恵みがわからないような苦しみの中で、「大丈夫。神様は絶対に一緒にいてくださる」こう信じる信仰が皆に与えられることを心から願う。将来に役立つことを色々と身につけるこの時期に、どんな人生を歩むにせよ、「神様が私と一緒にいてくださる」この信仰をほど重要なことはない。苦難にあっても絶望しない「主が共におられる」確信が与えられるように願い求めて欲しい。

〈祈り〉

私たちと共にいてくださる神様。感謝します。どんな時にもそのことを信じられるようにしてください。アーメン。

8月27日　摂理の主の勝利　聖書研究

テキスト　創世記 50章15〜21節

〈背景と文脈〉

ヨセフが解き明かしたように、7年の豊作のあと、7年の飢饉が来た。「飢饉は世界各地に及んだ」(41:56)。それにより「世界各地の人々も、穀物を買いにエジプトのヨセフのもとにやってくるようになった」(41:57)。その中にヤコブの息子たちもいた。ヨセフはすぐ兄たちの一行であると気づいたが、彼らはヨセフとは気づかなかった。物語がどのように展開していったかについては42〜44章を参照のこと。

二度目に穀物を買うためにヨセフのもとに来た兄たちに、ヨセフは自分の身を明かした。「わたしはあなたがたがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。……神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」(45:4〜8)。

ヨセフのこの言葉は、ヨセフ物語のクライマックスともいうべきものである。やがてヤコブ一族はヨセフの招きによってエジプトに下ってくる。ヤコブはヨセフとの再会を果たし、その後、エジプトの地で息を引き取った。ヨセフや兄たちは、ヤコブの遺言に従い、カナンに彼を葬り、エジプトに戻ってきた。今日学ぶ箇所は、ヨセフ物語の締めくくりであり、読者は、ヨセフの言葉を通して、神が人の悪を善へと造りかえられる全能者であることを知る。

〈兄たちの恐れ（50:15〜18）〉

兄たちは、父ヤコブの死により、ヨセフが、ことによると過去に彼にした悪の仕返しをするのではないか、と非常に恐れた。彼らは弟ヨセフを奴隷として売ったことに対して、長い間、罪悪感を持っていたことは明らかである（42:20〜22）。ヤコブが死んでしまった今、エジプトの宰相として権力をほしいままにできるヨセフが、彼らに仕返しすることは容易である。彼らはヨセフの仕返しを非常に恐れた。それで、人を介して、父ヤコブが生前「どうか兄たちの咎と罪を赦してやってほしい」と言っていたと告げた。「これを聞いて、ヨセフは涙を流した」(17) とある。ヨセフは万感の思いでその言葉を聞いたことであろう。その後、兄たち自身もやって来て、「お願いです。どうか、あなたの父の神に仕える僕たちの咎を赦してください」と彼に懇願した。彼の夢 (37:7) は、奇しくもこのように成就した。兄たちは悪意をもって、その夢の成就を阻もうとしたが (37:19〜20)、全能の神の前に、それはまったく意味をなさなかった。

〈赦しの再確認と摂理の主への信仰（50:19〜21）〉

ヨセフの兄たちへの言葉 (50:19〜21) がヨセフ物語の結論である。彼は、自分の人生を導かれたのは神ご自身であり、神は、彼らのたくらんだ悪を善に変えられたこと、またその目的は、多くの民の命を救うためであった、と言った。

「わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」(45:8) と、ヨセフはすでに兄たちに語ったが、その言葉を受けて、「わたしが神に代わることができましょうか」(19) と、今日の箇所で言っている。ヨセフは、測り知れない知恵をもって悪を善に変えられたのは神であり、自分は神のしもべとして、神のご計画に用いられたに過ぎないことを自覚していた。ヨセフは生涯を通して摂理の主を信じ続け、その導きに従った。それだからこそ人間的に見れば多くの不運を体験したが、その信仰は揺るがず報いられた。一見マイナスに見える環境の中でも、悪を善に変えられる摂理の主を信じ、しもべとしてなすべきことをなすことが大切である。　（後藤公子）

8月27日　摂理の主の勝利　説教展開例

テキスト　創世記 50章15〜21節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問13

〔単元のねらい〕

神様が正義のお方ならば、どうして、世の中に悪がはびこるのか、こういった素朴な問いを持つ子どもも多いことだろう。しかし、イエス様を信じる私たちは、神様が悪を善へと変えて、御自身の栄光と私たちの救いのために役立ててくださると大胆に信仰をもって教えることができる。ヨセフ物語の学びをとおして万事を益としてくださる神様への信頼がいよいよ子どもたちに増し加わることを願う。

「すべてのことを善としてくださる神さま」

愛する子どもたち、おはようございます。

二学期が始まりましたね。今学期も、学校で、お家で、そして、何よりも日曜日は日曜学校、教会で、神さまがヨセフさんと一緒にいてくださったように、みんなとも、いつでもどこでも一緒にいてくださって、豊かに祝福してくださいますように。

さて、神さまが全世界の救い主をお送りくださるお約束を実現なさるために絶対に必要だった、ヨセフさんに関係するいろんな出来事のお話をして来ました。先週のお話では、そのヨセフさんが、王様の夢の意味がわかったことで王様にたいそう気に入られて、総理大臣とされて、国中のすべてのことを任せられました。奴隷から総理大臣へ、日本だと、ちょっと豊臣秀吉に似ているけれども、ヨセフさんの場合は、神さまがアブラハムさんへのお約束を果たされるために、総理大臣とされたのでした。ヨセフさんが総理大臣とされてからのお話を少ししておきましょう。

ヨセフさんが神さまに告げられて王様に教えた通りに、七年間、豊作の年があるかと思ったら、今度は、七年間、ひどい飢饉の年が続きました。しかし、ヨセフさんのアドヴァイスの通りに食べ物をたくさん蓄えていたので、エジプトが飢饉で困ることはありませんでした。けれども、その飢饉は、ヤコブさんたちが住んでいたカナンにも広がって行きました。ヤコブさんたちは、飢饉に備えていませんでしたから、食べ物に困ってしまいました。それで、ヤコブさんは、末っ子のベニヤミンさん以外の息子たちを食べ物を買わせに、エジプトまでお使いに出したのです。何も知らずに、息子たちは総理大臣のところに行って、地面にひれ伏しました。こうして、ヨセフさんが昔見た夢が本当のことになりました。ヨセフさんは、お兄さんたちが来たことがわかりましたが、自分がみんなの弟のヨセフだとは言いませんでした。ヨセフさんは、お兄さんたちに末のベニヤミンさんも連れて来るように命じました。そのベニヤミンさんが来て、兄弟がみんなそろうと、はじめて、ヨセフさんは、自分のことを明かしたのです。そして、こう言ったのでした。

「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。……」(45:4〜8)。

さらにヨセフさんは、お父さんのヤコブさん、家族、家畜全部が、エジプトの国に来て、住むように言いました。こうして、ヤコブさんの家族全員が、エジプトに移り住むことになりました。このことによって、神さまは、その昔、アブラハムさんになさった約束の一部をちゃんと果たしてくださったのです。「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、……」(創世記15:13)。そして、この約束は、全世界の救い主をお送りくださるお約束の一部でもありますから、全世界の救い主のお約束を守ってくださったと言うこともできます。

ヤコブさんがエジプトの国で亡くなると、お兄さんたちは、ヨセフさんを恐れるようになりました。ヤコブさんが生きている時は、ヤコブさんに免じて、自分たちが赦されていると思っていたからです。しかし、ヨセフさんは、ヤコブさんに免じてでなく、既にお兄さんたちを心から赦していたのでした。そのことを、ヨセフさんは、あらためてお兄さんたちに言いました。それが今日の聖書箇所です。

「ヨセフは兄たちに言った。『恐れることはありません。わたしが神に代わることができましょうか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。どうか恐れないでください。このわたしが、あなたたちとあなたたちの子供を養いましょう』。ヨセフはこのように、兄たちを慰め、優しく語りかけた」(50:19～21)。

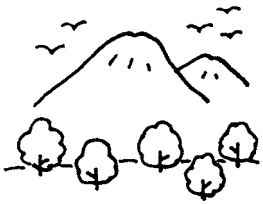
ヨセフさんは、お兄さんたちをはじめ、たくさん人たちの命を飢饉にあって救うために、神さまがヨセフさんを先にエジプトに遣わして、奴隷から総理大臣になるようにしてくださったと確かに信じることができました。神さまは、悪さえ善へと変えてくださるお方だと、確かに信じることができたのです。このようなことは、お兄さんたちに野原の穴に突き落とされた昔を神さまへの信仰をもって振り返ってこそ、言えることです。

ヨセフさんは、「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」と言いました。神さまの救いの、より大きな歴史で言うならば、これは神さまが、お兄さんたちの悪だくみを善に変えて、多くの民の命を罪による滅びから救うための救い主をお送りになるために、今日のようにしてくださったということです。今日のところから、神さまは、すべてを善に変えられるお方でいらっしゃることを教えられます。みんなの中には、今、何で？と思っていることがたくさんあるかも知れませんね。神さまが一緒なのに、何でこんな悪が？と思っていることがあるかも知れません。しかし、神さまがヨセフさんと多くの民のために悪を善へと変えてくださったように、みんなのためにも善に変えてくださることに信頼し、期待しながら、今週も歩みましょう。

(長谷川潤)

〔今週の暗唱聖句〕　創世記 50章20節

あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、
多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。



8月27日　摂理の主の勝利　幼稚科

〈ねらい〉

人間の悪をも善に変えられる神さまの力に信頼し、神さまの善に用いられることを望むように。

〈暗唱聖句〉

「あなたがたの悪を、神は善にかえられた」。

〈展開例〉

①ヨセフの解き明かしたとおり、七年の豊作のあと、七年の大飢饉が起きました。エジプトではヨセフガ総理大臣となって食べる物にこまりませんでしたが､他の国では食べ物がありません。ヨセフのお父さんのヤコブの家族も飢え死にしそうでした。そこでヤコブは子どもたちに言いました。「エジプトには素晴らしい総理大臣がいて、飢饉の中でも倉にはたくさんの食べ物があるそうだ。行って買って来ておくれ」。そうして、お兄さんたちはヨセフのいるエジプトにやってきました。

②「総理大臣さま。どうか私たちに食べ物を売ってください」。お兄さんたちはヨセフの前にひざまずいて懇願しました。その姿は、あのヨセフが最初に見た夢のとおりでした。ヨセフはお兄さんたちだと分かりましたが、お兄さんたちはそれがヨセフだとは気づきません。当然ですよね。自分たちが奴隷として打った弟が総理大臣になっているなんて、誰も思いません。ヨセフもそのときは何も言いませんでしたが、もう一度来るように計画を立てました。

③ヨセフが計画したとおり、お兄さんたちはもう一度エジプトに来ました。ヨセフは、「お兄さんたち、私はあなたたちがエジプトに売ったヨセフですよ」と言って、自分の正体を明かしました。お兄さんたちはびっくりすると同時に、とても怖くなりました。だって、ヨセフにあんなひどいことをしたのですから。「ごめんなさい。私たちがあなたにしたことを赦してくれ」。お兄さんたちはヨセフを恐れました。

④でも、ヨセフは言いました。「恐れないでください。私をエジプトに送ったのは、あなたたちではなく、神さまです。あなたたちは確かに悪いことをしましたけれど、神さまは多くの人の命を救うために、そのことも用いられました。私は怒っていません。どうかヤコブお父さんもエジプトに来て、一緒に住みましょう」。ヨセフは優しく語りかけました。

⑤兄たちはヨセフの言うままをお父さんに告げました。ヤコブも涙を流してヨセフが生きていることを喜び、家族そろってエジプトにくだってヨセフのそばで暮らしました。

〈お祈り〉

人間の悪いわざも、善いことに変えてくださるすばらしい神さま。どうか神さまの善いことのために私を遣わしてください。アーメン。

8月27日　摂理の主の勝利　小学科下級

〈ねらい〉

神様への信頼を深める。

〈はじめに〉

夏休みの間のご奉仕も感謝いたします。新しい学期を迎え、子どもたちは生き生きとしているでしょうか。教師自身の状態はいかがでしょうか。子どもたちの前に立たされるとき、自分自身の信仰生活がいつも問われます。教えるということの前に、自分自身が御言葉に養われ、主の導きを祈らなければなりません。学生の方で奉仕をしてくださる方、お仕事で毎日忙しく帰りも遅い中、このクラスの準備をしてくださる方、主婦の方、このクラスを担当してもう何年にもなられる方、いろいろな方が幼い子どもたちに仕えておられると思います。お一人おひとりのご奉仕が整えられ、心身の健康が支えられますように。

〈御言葉に聴きましょう〉

①ヨセフのお父さんヤコブは死ぬ前に、何と言っていましたか。

②これを聞いたヨセフはどうしましたか。

③ヨセフはお兄さんたちを怒りましたか。

④20節を声に出して読みましょう。

〈展開例〉

ヨセフさんは、神様から特別な力をいただいて、王様ファラオの夢の意味を知ることが出来ました。夢の意味を教えられた王様はヨセフをとても信頼して、総理大臣のお仕事を任せました。その後、ヨセフさんはどうなったでしょうか。

ヨセフさんには昔、悲しい出来事がありましたね。それは、兄弟から捨てられるという出来事です。どんなに王様から大事にされても、どんなに大きなお仕事をしてみんなからほめられても、きっと心の奥でいつもお父さんは元気かな、お兄さんや弟は今頃何しているかな、どうして私はこんなことを経験したのかなと思いをめぐらし、時には悲しみで胸がいっぱいになった時もあったでしょう。でもヨセフさんは一生懸命、国のため国民のために働きました。王様の見た夢はヨセフさんが言ったとおりになりました。ヨセフさんのお陰で国民は助かりました。

遠くに住んでいるお兄さんたちの生活も助けました。これを指導している総理大臣が自分たちのあの捨てたヨセフとは誰も知りません。随分時間がたってから、ヨセフは兄弟にもお父さんにも再会することができました。何十年も待ちに待った再会でした。でもお兄さんたちは手放しでは喜べません。なぜなら、あの時自分たちがしてしまった悪いこと、ヨセフを憎み捨てて、お父さんにもうそをついたことをずっと忘れないでいたからです。きっとヨセフは赦してくれない、それほど悪いことをしてしまったことの後悔と恐れがありました。でも、ヨセフは、お兄さんたちを赦しました。全てを神様はご存知で、悪いことも、善いことに変えてくださる神様を、その神様のお力をますます信じる思いが強く与えられたからです。

もう一度20節をみんなで声を合わせて読みましょう。

〈お祈り〉

神様、神様の大きな愛をありがとうございます。

8月27日　摂理の主の勝利　小学科上級

〈ねらい①〉

前回と同じように、思いを超えた、神の救いの物語のスケールの大きさに、共に驚く。

〈展開例①〉

聖書の中でも飛びぬけて面白いテキストですから、聖書物語を丁寧に確認するだけで十分に意義深いと思います。礼拝における説教者が、時間の都合で十分に語れないような場合に、分級でフォローなさればいいと思います。その際は、説教展開例を参考になさってください。紙芝居や絵本も充実していると思います。

〈ねらい②〉

悪を善に変えられる摂理の主を信じる、信仰者の「最高の幸い（カルヴァン)」を伝える。

〈展開例②〉

「神の全能の力、窮めがたい知恵、無限の善は、その摂理の中によく現れ、最初の堕落やその他すべての御使いと人間たちの一切の罪にまでおよんでおり、しかも単なる許容によるものではなくて、多様な配剤において、神ご自身のきよい目的のための、最も賢い力ある制限や、その他の秩序づけと統治がそれに伴っている。しかもなおその場合の罪性はただ被造物からだけ出て、神から出るのではない。最もきよく正しくいます神は、罪の作者でも是認者でもないし、またありえない」（ウ信仰告白5:4)。

「一切は混乱し混沌と化したように見られても、その時に天上は常に静穏で晴れ晴れとしている。それゆえ、世界の物事が混乱して我々の判断が奪われる時にも、神は義と知恵の純粋の光によってこの激動を最も良く整えられた秩序に収拾し、正しき目的に至らせたもうと確信すべきである」(カルヴァン『綱要』第1篇17:1)。

人間には、神様の考えておられることのすべては分かりません。どうしてこんなことが起こるのか？と言いたくなる様な出来事がしばしば起こります。「どうしてアダムとエバは堕落したのか？」誰もが聞きたい問ですね。「神様は人間を命令だけに従うロボットとして創られなかった、自由な存在に創ってくださった。でも人間はその自由を間違って使って、堕落の道を選んでしまった」。これは聖書から導き出される模範解答です。でもこれを聞いても、先生は全然納得できません。みんなはどうかな？

「どうして？ なぜ神様はこんなことを……」という問いは、人間が永遠に問い続けるものでしょう。でも、神様の考えておられることをすべて知りたいと願うのは傲慢なことですし、そんなこと不可能です。また必要ありません。むしろ大切なことは、どんな出来事が起ころうとも、それはすべて神様の「全能の力、窮めがたい知恵、無限の善」によって定められたものであって、すべては「きよい目的」の実現のために用いられると“信じる”ことです。

神様は、人間の犯したどんな反逆も過ちも悪も、また私たちが味わわねばならないあらゆる悲惨な出来事も、すべてを善に変えて用いてくださる方です。イエス様を十字架にかけてしまったのは人間の最大の罪ですが、神様はその罪さえも用いて、私たちの救いを実現してくださった方です（使徒2:23～24、4:27～28)。大いなる神の御手に人生を委ねて、平安の中であゆみましょう。

〈祈り〉

神様、万事を益としてくださるあなたを信じます。どんな混乱の時も、あなたを見上げ、確かな平安の中で歩むことができますように、私たちの信仰を整えてください。

8月27日　摂理の主の勝利　中学科

〈ねらい〉

人の悪を善に変えられる神様の業を覚える。

〈展開例〉

①今日で壮大なヨセフ物語が幕となる。これまで激動の人生を歩んできたヨセフだったが、この物語の最後は、自分に向けられた悪が、神の救いのために用いられ、善へと変えられたというヨセフの告白で締めくくられる。

Q．ヨセフの周りにあった悪とはいったい何だったろうか？　父親の偏った愛。兄たちの嫉妬。兄たちの殺意。女性からの誘惑。自分を利用するだけ利用して恩を忘れる薄情さ。そして、エジプトという異教の国の存在。神様はアブラハムの子孫たちに、祝福を約束した契約を実現し、イスラエル一族を飢饉から守られために、こうした悪を用いられた。そして、ついには神様が善しくイスラエルをとおして世界を祝福される方であることがはっきりと示された。

②以前も話したが、これは悪でもOKということではない。悪を働いた者はそれぞれに責任を負う。父は最愛の息子を失い、兄たちには罪の呵責が与えられ、他の神々を捨てなかった大国エジプトも、やがて神様の裁きのもとに滅びることとなる。しかし、神様はそのような悪であっても自由を奪うことなくそれぞれの責任のもとで世界を任せられる。そして、人の自由さすらも計画の中に入れた上で、御自分の思い、アブラハムの子孫を祝福し、地上の民を祝福するという思いを実現させられる。

③ヨセフはすべてが成し遂げられたとき、自分がこれまで味わってきた人の悪意をゆるすことができた。それは、神様の目線で自分の生涯を見ることができたから。自分には辛く、悲しく、寂しく、苦しい人の悪意だったが、神様の実現のためにそれらは起こるべくして起きたとヨセフは理解した。そして神様が起こした救いを知った今、それらの悪は最早、過去の出来事であり、赦すべき人の弱さへと変わったのである。

④摂理信仰とはまさに、神様の眺めておられる壮大で愛情に満ちた目線に立って、すべてを見つめるということである。神様の眼差しを意識して世界を見つめるとき、また毎日の生活を見つめるとき、人の悪を嫌いながらも、人そのものを大切にされる神様の寛容さに触れることができる。悪ですら御自分の御業のために使われる神様に従うとき、私たちは自分の身の回りに起きる悪であっても寛容となれる。ヨセフが「悪が善へと変えられた」と言うとき、それはテレビ越しに感じる世界の悪とかネットで気になる人間の悪さとかそういう頭の中の話をしているのではない。自分を苦しめ、自分を陥れたそのリアルな悪に対して、彼はそれを赦し、感謝することすらできたのである。皆の日常にも降りかかる人の悪意があるかもしれない。しかし、その悪ですら、神様ならばやがて善へと変えてくださると信じることができならば、君は悪に対して傷つく人生から、悪のある世界を受け入れつつ、それが善へと変わることに希望を持つ、ワンランク上の人生観を与えられる。悪を善に変える神様の御業が自分の人生にも豊かにしめされるように、祈り求めたい。

〈祈り〉

人を祝福するために悪を善へと変えられる神様。感謝します。私にも、私の周りにも多くの悪がありますが、あなたが整えて善へと変えてください。アーメン。

9月3日　モーセの誕生　聖書研究

テキスト　出エジプト記 1章22節～2章10節

歴史を顧みない権力者の号令がエジプトのイスラエルを悪夢へ引きずり込む。ここに出現した闇の世界は、洪水前夜の罪に満ちた世界の再現である。そのとき神は世界の破滅を宣告された。ファラオを殺戮の衝動に走らせたのは恐怖であり、イスラエルを脅威と感じたエジプトの民族意識である。文化や習慣の異なる民族を多く抱えるのにも限界があると感ずる人々の意識はこうして歴史的なものと証明される。しかし、イスラエル人を強制労働に服させるというファラオの対応策は裏目に出、彼らの人口はかえって増大した。そこでファラオの恐怖は嫌悪や憎悪にまで発展し、ついに大量殺戮の号令が下る。最悪の時代には最悪の人間が神の座につく（新約ではヘロデ）。

出エジプト記の初めに記される状況は「エジプトとイスラエル」という民族間の対立と図式化される。創世記の終りに向かう主題は、神の不思議な救いの御業による和解であった。兄弟同士の間にあった深い対立の溝は、ヨセフに対する兄たちの嫉妬であり、その後は彼を奴隷に売り飛ばした罪悪感であったが、それが神の導きの下に取り去られて赦しが告げられ、イスラエルの家族は神の祝福の中に安息を見いだした。これはヤコブ＝イスラエルの家族内における和解である。当時のエジプトとイスラエルの関係は和やかで、宗教の違いが争乱のもとになる気配すらない。しかし、出エジプト記では、イスラエルは既に家族からひとつの民族へと発展しており、そこから今度はエジプトとイスラエルという民族単位の対立が生じる。イスラエルと世界との間の対立構造、すなわち、神の民と異邦人との関わりである。これがここから展開する旧約全体の主題の一つとなる。すると、既にここから終りも予想されていることに気付く。それは神を起源とする二つの兄弟であるエジプトとイスラエルの和解である（イザヤ書19章）。地上のあらゆる民族の対立が解消されることがこの先の歴史で目指される。従って、出エジプトという出来事は大いなる出発である。世界に対する神の救済の御業がここから開始され、人類の真の和解を目指してイスラエルの歴史は長い旅に出る。

一人の男の子の誕生からそれは始まる。レビ人の夫婦に生まれたその子は母親がしっかりと防水加工を施した葦の籠に入れられナイルに漂う。「籠(テバ)」という特殊な語は、他では洪水の上を漂った「箱（舟）」にしか用いられない。それは大水からの救いをあらわす神の救いの器である。小さな命が神に守られて荒れ狂う波間を漂う。赤ん坊はついにファラオの娘に拾われ王宮へと運ばれるが、これは単なる幸運ではない。美しい（或いは健康な）男の子が命を狙われて親元から切り離される。それが、神の不思議な導きでエジプトの宮廷にまで入り込む。これは、ヤコブの息子ヨセフが辿った道のりと同じく神の摂理を物語る。ファラオはヨセフを忘れたが、神はイスラエルを忘れることなく、かつて示された道筋で新たに神の僕を起こされる。

「モーセ」という名はヘブライ語では「引き上げる」を意味するが、この名前にもヨセフとの共通点がある。ヨセフはファラオに迎え入れられたときに別のエジプト名を授かった。モーセは一つの名前だけだが、その名は本来エジプト語で「息子」を意味しファラオたちの愛称であった。すなわち、モーセはエジプト名とヘブライ名の二つの名を重ね持つという点でヨセフと共通する。ヨセフはエジプトの宰相になり、ヤコブの家族とエジプトを救った。モーセもまたイスラエルを救うために神がお遣わしになる救済者である。そして、王の息子としての名をもつ、エジプトの王子となるはずであった。モーセはやがて来るべきお方の前触れとして、歴史に神が働きかけてくださる具体的なしるしとして旧約時代に示されたキリストの型を示す。（牧野信成）

9月3日　モーセの誕生　説教展開例

テキスト　出エジプト記 1章22節～2章10節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問11

〔単元のねらい〕

主なる神は、ご自分の造られた世界を御手の中で支え、導いておられるお方である。『子どもカテキズム』問11に、神の全能と主権について、「神さまの力の及ばないところは、宇宙のどこにもありません」とある。赤ん坊を川に流さなければならない。これは、理不尽なことであり、たいへん悲しいことである。けれども、このことも主なる神の支配の中に置かれていた。モーセはエジプトの王女によって引き上げられ、王女の子どもとして育てられる。そのようにして、神ご自身が歴史を紡いでおられる。わたしたち、また子どもたちにとっても、主なる神は愛をもってわたしたちと深く関わり、導いてくださるお方である。主なる神がおられることを驚きと喜びをもって伝えたい。

「神さまが引き上げてくださった」

ヨセフの時代に、ヤコブの家族、イスラエルの人びとすべてがエジプトに移り住みました。やがてヤコブとヨセフはエジプトで死に、その後も、イスラエルの人びとはエジプトに住み続けました。神さまは変わることなく恵みを注いでくださって、イスラエルの人びとはエジプトで増え広がりました。300年ほどの間、イスラエルの民はエジプトで祝福されて歩んだようです。

今日からは、モーセのお話になります。モーセをとおして、神さまが再び力強いみわざ、不思議なみわざを行ってくださいました。イスラエルの民を、今度は、エジプトから導き出して、もともと神さまがイスラエルの民に与えると約束しておられた土地、カナンの地へと導いてくださった。その出エジプトということを学びます。神さまの約束の地カナンへと帰って行く物語です。

神さまは、イスラエルの民がエジプトに向かう時にはヨセフを用いられました。今度、イスラエルの民がカナンへと帰るために、モーセが用いられます。先ほどの聖書の御言葉は、そのモーセが生まれたときの出来事です。

モーセが生まれたとき、イスラエルの人びとは、たいへんな中に置かれていました。モーセには、アロンというお兄さん、ミリアムというお姉さんがいました。お兄さんお姉さんが生まれた時はまだよかったのです。けれども、モーセが生まれた時には、エジプトの王さまから命令が出ていました。「ヘブライ人（イスラエルの人のことです）に男の子が生まれたら、その子をナイル川に放り込まなければならない」。そういうおかしな命令が出ていました。そのため、モーセは、生まれてきても川に放り込まれなければならない。そして、川に放り込まれるならば、普通は生きていられません。死んでしまいます。ですから、生まれてきても死ななければならない、モーセはそういう状況の中で生まれました。

もちろん、モーセのお父さんお母さんも、モーセを見捨てることなどできません。生まれてから三ヶ月ほど、何とか隠して育てました。アロン兄さん、ミリアム姉さんも協力しました。けれども、赤ん坊も三ヶ月くらいになってくると大きな声で泣くようになります。ハイハイし始めるようになります。だんだん隠しておくことが難しくなるのです。そして、ついに隠しておけず、ナイル川に放り込まなければならなくなりました。何と悲しく、つらいことでしょう。けれども、できることなら何とか生き延びてほしい。そう願って、お父さんお母さんはカゴを用意して、水に沈まないようにして、そのカゴにモーセを寝かせることにし

ました。ナイル川の葦の葉が茂っているところに置いて、川に流されてしまうことがないようにしました。少しでも長く生き延びてほしい。みんながそう願っていました。

ミリアム姉さんも、赤ん坊のモーセをかわいがっていました。カゴに寝かされて川に置かれたモーセのことが気になって仕方がありません。もしカゴがひっくり返ってしまったら！そう思うと気が気でありません。ミリアム姉さんは、遠くからモーセのカゴを見守ることにしました。

しばらくすると、エジプトの王さまの娘、王女がやって来ました。王女は、ときおり、そのあたりで水浴びをしていたのです。いつものように水浴びをしていると、何だか赤ん坊の泣き声がするではありませんか。王女は、召し使いの女たちと一緒に赤ん坊を探しました。カゴに寝かされたモーセが見つかりました。なんとまあ、かわいい男の子ではありませんか。王女はすぐに気がつきました。ああ、この子はヘブライ人の男の子なのだ。王さまの命令に従うために、カゴに入れて川に流されたのだ。そうであるならば、このまま放り出しておくのがよいだろうか。川に流してしまえばよいのか。いや、何とかわいい男の子か。何とかわいそうなことか。そう思って、王女は、自分が引き取って育てることにしました。こうして、モーセは川から引き上げられたのです。

遠くから見ていたミリアム姉さんは、モーセを引き上げたのがエジプトの王女であることに気がつきました。びっくりしましたが、王女がモーセを引き上げて、かわいそうに見つめているのを見て、勇気を出して飛び出して行きました。そして言いました。「お乳の出るヘブライ人の女の人を知っています。呼んで参りましょうか」。王女は答えました。「ありがとう。そうしてください」。ミリアム姉さんは、さっそく家に帰って、モーセのお母さんを連れて来ました。王女は、ミリアム姉さんが連れて来た女が実のお母さんであると気づいたでしょうか。きっと気づいたでしょうね。それでも、王女は言いました。「この子を連れて行って、わたしの代わりにお乳を飲ませて、世話をしてください」。モーセのお母さんは、王女からモーセを育てるよう命じられ、何と驚き、また喜んだことでしょうか。

こうして、川から引き上げられたモーセは、エジプトの王女の子どもになり、しかも、実のお母さんに引き取られて、育つことになりました。たいへん不思議な仕方ですけれども、神さまは、不思議な仕方で、人に生きる道を与えてくださいます。人間の思いを超えた神さまご自身の方法で、生きる道を切り開いてくださいます。エジプトの王女が引き上げたのですけれども、実は、主なる神さまがモーセを引き上げたのです。

ナイル川は、豊かな収穫を与える豊穣の神と呼ばれ、礼拝されていました。川が礼拝されるとは不思議なことですが、ナイル川に流されて、モーセの命はナイル川が支配することとなった。そのところで、イスラエルの神は、そのナイル川の支配の中からモーセを引き上げて、救い出してくださいました。イスラエルの神は、エジプトの神、偽りの神々に勝利しておられる、力強いお方です。やがてイスラエルの民は、エジプトに勝利して荒れ野に旅立ちます。すでにその勝利が、このモーセの誕生の時に始まっていたのです。

わたしたちにとって、神さまは、このようにして力強く働いてくださるお方です。わたしたちを愛して、決して見捨てない神さまがおられ、わたしたちの周りに起こることの一つひとつをご存じで、支配しておられます。悪いことが起きても、よいことへと造り変えてくださいます。このような力強い神さまがおられ、この神さまを信じることができるとは、何と幸いなことでしょうか。この神さまを信じて歩みましょう。　　（望月　信）

〔今週の暗唱聖句〕　ローマの信徒への手紙 8章28節

神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、
万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。

9月3日　　モーセの誕生　　幼稚科

〈ねらい〉

神様が、苦しみや悲しみから引き上げてくださることを知るように。

〈暗唱聖句〉

かごの中の赤ちゃんを「水の中からわたしが引き上げた」。

〈展開例〉

①ヨセフの計らいで、ヤコブさんの家族は全員エジプトに住むようになりました。エジプトの人たちとも親しくなって、イスラエルの人々は国中に広がりました。しかしそれからずいぶんたって、ヨセフさんのことを知らない王さまが現れると、急に怖くなりました。「イスラエルの人たちはあまりにもたくさんになった。もしかすると私たちの敵になるかもしれない。気をつけるにこしたことはないな。そうだ。厳しい仕事を与えれば、苦しくてこれ以上増えないかもしれない」。

②そう思った王さまは、イスラエル人たちを無理やり連れて行って町の建設現場で働かせました。そこは、熱くて、重くて、休む時間も食料もほとんどありません。イスラエルの人たちは「助けて。苦しいよ」と叫び声を上げています。でも神さまが守られたので、イスラエルの人たちはもっと増え広がりました。

③そこで王さまは考えました。「なかなかイスラエルの人は減らないな。そうだもっと直接数を減らそう。生まれた男の子は一人残らずナイル川に放り込め。女の子は生かしておけ」。大変なことになりました。国中にイスラエル人の人たちの悲しみと叫び声が広がりました。

④そんな中で、レビの家に一人の男の子が生まれました。とっても美しい子です。家の人は王さまの命令を知っていましたが、かわいそうで、三ヶ月間、家の中で隠して育てました。しかし赤ちゃんはすくすく成長し、声も大きくなってきます。これ以上隠しておくわけにいきません。そこでパピルスのかごにアスファルトとピッチで水が入らないようにし、その中に男の子を入れてナイル川の葦の茂みにそっと置きました。お母さんは、「この子をエジプト人が拾ってくれたら、命は助かるかもしれない」。そう考えたのです。その様子をお姉さんは草陰でじっと見ていました。

⑤そこへ王女さまが水浴びをしにやってきました。「アーン、アーン」。「あれ何かしら。赤ちゃんの鳴き声が聞こえるわ。あ、あそこのかごの中に赤ちゃんが」。抱き上げると、それはかわいい男の子でした。王女さまは、王さまの出した命令に心を痛めていましたので、この子を育てる決心をしました。この子は「水の中から私が引き上げた」ので、モーセと名づけましょう。そして王宮で大切に育てました。

⑥モーセはこのあと、どうなるのでしょうか。そしてエジプトで苦しめられているイスラエルの人たちはどうなってしまうのでしょうか。大丈夫。神さまはすべてをご覧になって、御心に留めておられます。そして、モーセを通して、素晴らしいやり方で、苦しみの中から引き上げてくださいます。

〈お祈り〉

すべてを知っておられる神さま。どうか苦しんでいる人を助けてください。悲しんでいる人を、涙の中から引き上げてください。そのために私を遣わしてください。アーメン。

9月3日　モーセの誕生　小学科下級

〈ねらい〉

神様は私たちの毎日を導いてくださるお方、そしてこの大きな歴史の中で働いておられるお方であることを知る。

〈はじめに〉

クラスには数少ない子供しかまだ与えられていないかもしれません。でもこれから主はどのような子どもを与えてくださろうとしているのかわかりません。一人のキリスト者として、今、目の前に主が与えてくださった子どもに、小さなわたしの全てを通して福音が伝えられ、またこの福音が次の世代にも伝えられていくことを信じながら、子どもの前に立たせていただきましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①王様ファラオは、全国民に、赤ちゃんを殺せという命令を出しました。その赤ちゃんは男の子ですか。女の子ですか。

②どこの川にほうり込めと命じましたか。

③ある時に男の赤ちゃんが生まれました。家族は隠しました。でもだんだんと大きくなったので隠せなくなりました。家族はどうしましたか。

〈展開例〉

ヨセフさんが死んで、長い時間がたちました。その間に何人も王様が変わりました。そして、ある王様が「イスラエル人の男の赤ちゃんは全員ナイル川にほうり込め。殺してしまえ」という残酷な命令を出したのです。イスラエルの人たちはエジプトで奴隷として一生懸命働いて、そして、人数も増えてきたので、王様は怖くなってきたのです。だから男の赤ちゃんを殺してしまおうという恐ろしい命令を出したのです。

あるイスラエル人の家族に男の赤ちゃんが生まれました。その家族は絶対に赤ちゃんを殺したくありませんでした。そこで葦を編んで作った籠に赤ちゃんを入れ、ナイル川の茂みにそうっと置きました。

その赤ちゃんを見つけたのがなんと、あの恐ろしい命令を出した王様の王女だったのです。王女は、その赤ちゃんを見つけて、かわいそうに思って、自分のこどもとして育てることにしたのです。しかもその赤ちゃんにミルクを与える役目として、本当のお母さんをそばに置きました。こうして、この殺されるはずだったイスラエル人のある一つの家庭から生まれた赤ちゃんは、王様の家族として、大事に育てられたのです。

この赤ちゃんの名前を「モーセ」と言います。モーセさんは大人になってから、神様のために働く大事なお仕事が用意されていました。だから、神様はこのような特別な方法で、モーセが殺されないようにお守りくださったのです。

〈お祈り〉

神様、私たちも神様がご用意されたお仕事ができるよう、今からお守りください。そして、神様がどんなことがあっても助けてくださることを信じさてください。

9月3日　モーセの誕生　小学科上級

〈ねらい〉

人間が考え出すいかなるドラマよりも劇的な、神の歴史創造の妙に、共に驚く。

〈展開例〉

ヨセフさんの山あり谷ありの人生をずっと学んできました。一時は牢獄にまで入れられたのに、まさか総理大臣のようになってしまうなんて。そんなドラマがあったら、「ありえなーーい」って言っちゃいそうですね。でも神様の救いの物語は、人間が考える以上にドラマティックなのです。聖書にはそういうお話がずっと書かれている。だから最高に面白いのです。

さて、ヨセフの人生も山あり谷ありでしたが、神の民イスラエルの歴史はそれ以上に山あり谷ありです。ヨセフさんのおかげで命拾いした兄弟たちは、その後一族全員を引き連れて、エジプトに移り住んだと教えてもらいましたね。そしてどんどん数が増えていった。幸せの絶頂ですね。いい感じです。

でもこの後急降下します。エジプトの王様が、「このままではあいつらが強くなりすぎる……」と警戒して、苦しい重労働をさせて、イスラエルの人々を虐待しはじめたのです。でもまだまだイスラエルはへこたれません。それでもどんどん増えていく。するとエジプト王は、とんでもないことを言い出しました。「イスラエルの人々に男の子が生まれたら、一人残らずナイル川に放り込め!!」……さあ大変、最大のピンチです。

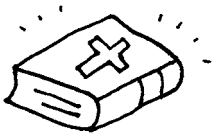
そんな時に生まれてきたのがモーセでした。このモーセは、やがてイスラエルの人々をカナンの地に導くために神様が遣わしてくださった大事な人だと教えてもらいましたね。でもそんなモーセが、よりによってこんな大ピンチの時に生まれてくる。エジプト王が、イスラエルを導く神様の手を、必死になって邪魔しようとしているのです。その結果はどうなったか……？　それは説教で聞きましたね。赤ちゃんモーセは奇跡的に命を助けられて、なんとエジプトの王子として育てられることになりました。「ありえなーーい!!」でも、誰でも考え付くようなことなら、神様じゃなくてもできます。ありえないからこそ、信じる値打ちがあるのです。

そんなわけで、ヨセフ以上に波乱万丈なモーセの人生がスタートしました。そしてそのモーセと共に、イスラエルの波乱万丈の歴史もいよいよ本格的にスタートします。そこには、いつも神様の見えない導きがあります。人間の思いを超えた、劇的な救いのご計画が進められています。

人間はいつも神様のご計画を邪魔しようとします。赤ちゃんモーセが殺されかけたように、赤ちゃんイエス様も殺されかけました（マタイ2:16-23)。でもエジプト王やヘロデ王の狂気も、イスラエルにモーセを与え、全世界に救い主イエスを与えようとする神様の力を止めることはできません。どちらの時もたくさんの子どもたちが死にました。たくさんの血が流され、涙が流されました。神様はその悲しみを全部見ておられます。だからこそ、その悲惨の泥沼から人間を「引き上げる」ために、どれだけ罪人に邪魔されようが、神様は力づくで救いを進めていかれます。あなたという人の小さな歴史にも、そんな劇的な導きが必ずあります。

〈祈り〉

神様、あなたのお考えになっていることは大きすぎて、とても想像がつきません。あなたはすごい方です。そんなあなたが、私の神様になてくださったことを感謝します。イスラエルの歴史を導いてくださったあなたの手が、私をいつも守り導いてくださいますように。あなたを信頼します。



9月3日　モーセの誕生　中学科

〈ねらい〉

モーセに与えられた救いから、自分に与えられている救いを確認する。

〈展開例〉

①今日から、モーセによってイスラエルがエジプトより救い出される、出エジプトの物語。ヨセフのもとで神様の恵みによって潤ったエジプト。しかし、エジプトは、その身に受けた祝福を忘れ、繁栄するイスラエルを憎み虐げるようになる。そんな時代に、神様はイスラエルを救い出しかつてアブラハムに約束したカナンの地に導くため、モーセという指導者を選びだされた。今日は、このモーセの出生に示された神様の救いを覚えたい。

②モーセは生まれて三ヶ月の後に、イスラエルを恐れるエジプトの王ファラオの命令のために、ナイル川の上を籠に乗せられて漂っていた。ナイル川はエジプト人にとって自分たちに豊穣を与える神と信じられていた。本当の神様のことを認めない人々の国で、偽物の神に流されるがまま、生まれてから死に向かって漂い流れていく人生。モーセはそこから救われる。そして、これは君たちにも同じように言える。皆は本当の神様のことを認めようとしない国の中で生きている。神様を認めない人間の造り出す社会や文化は、そこに生きる人を神様が嫌われるような生き方や考え方のとりこにしようとする。

Q．皆が暮らすこの社会には、神様が嫌な思いをするような文化が無いか？　君が好きな小説やマンガ。テレビ番組やゲーム。こうしたモノの中に、君を神様から引き離そうとする考え方はないか。こうしたモノに、君が「カッコいい」と感じるとき、そこには神様が嫌われる生き方や考え方はないだろうか？　人間は自分の力でどこまでも成長できるとか、自分の信念や夢が世界で一番大事とか。「神など俺には必要ない」。こんなキャがまるでカッコ良いかのようにいたるところに現れる。人間が一番という人間至上主義の国で皆は生活している。だが、その価値観に流されて辿り着くのは、神様から「お前は必要ない」と拒絶される永遠の死である。神様から拾い出されないなら、私たちの命は絶望的である。

③モーセの話に戻ろう。神様はエジプトの王女を用いるという仕方で、モーセをこの死地から拾い上げられ、かつイスラエル人の母親の手によって育てられていく。これにより、モーセはエジプトを良く知るイスラエル人として出エジプトのために整えられていく。モーセは神様を知らない人の価値観に触れつつも、本当の神様を主人とする生き方を学んでいったに違いない。

④生まれてから死に向かって流れていく、人間を中心とした人生観。そのとりことなってしまう人生から君は神様に拾い上げられた。小さい頃から君が教会で何度も聞いてきた「救い」とは、ここからの救いである。そして、この救いを知る者が、やがて他の人々を救いへ導く者として用いられていく。モーセに対して、神様は様々な人を用いて、この救いを与えてくださった。君もまた同じである。神様は君を死に向かう川の流れから拾い上げるために様々な人を用いて、君を人間至上主義の人生から救い出される。この神様にこの身を委ねたい。

〈祈り〉

死へと流れる私を拾われた神様。感謝します。どうか、人間を一番にする価値観のとりことならないようにお守りください。アーメン。

9月10日　モーセの召命　聖書研究

テキスト　出エジプト記 3章1〜22節

神が地上をご覧になり人間の苦しむ姿を認められる時、神は人間を通して救いの御業を始められる。「モーセ、モーセ」と二度呼ぶ声が燃える柴から聞かれたとき、神の人はその救いの働きに召されていく。「自分ではない」とモーセが必死に抵抗する様子から知らされるのは、神が人を召されるのは本人の自覚や自主性がその役割を引き受ける第一要因ではないことである。神がモーセに現れた。そして抗うことのできない言葉に促されて、自分を無にして砂漠から人々の住まう所に出て行った。「わたしは必ずあなたと共にいる」との約束が、かつて族長たちに語られたのと同様モーセにも告げられている。その確約を得て「わたしは、今、イスラエルの人々のところに参ります」との応答が導かれる。

モーセが向かうエジプトという「この世」は、文明の力をもって暴虐を尽くすファラオの王国、罪の極まった人間世界のモデルだといえる。もっと深刻なのは、イスラエルもまた神の僕を喜んで受け入れるほど信仰に生きてはいない現実である。彼らは自分たちが置かれた苦難に打ちひしがれて叫ぶが、神の名を呼ぶことすらできない。そんな場所へと神はモーセを派遣し、彼は神の言葉を語らなくてはならない。モーセが繰り返し神の召しを拒絶するのも、その困難、否、不可能が分かるからである。あらゆる不安を神の前に持ち出し、自分が神の命令に耐え切れないと己が弱さを認めざるを得ない。かつてのエジプトの王子は、今や身も心も、沙漠で羊を飼う一人の無力な人間に過ぎない。

しかし、神の救いの道筋がこうして整えられる。自分の力で救いをもたらそうという自負心はモーセにはない。モーセが訴える不安はすべて神が引き受けられる。しるしとなる杖も、代弁者となる兄アロンも、必要なものはすべて神が用意される。あとは神に身を委ねて自分を空にしたまま、エジプトへ出て行けばよい。

このとき神は、モーセにご自身の名を顕された。「主（YHWH―アドナイと読む）」がそれである。ヘブライ語の四文字で表されるその名は、今では誰も本当の呼び方を知らないが、意味するところは「わたしはある」という神の存在そのものである。この謎めいた名は、「わたしは在りたいように在る」「わたしはいたいと思うところにいる」という歴史に働く神の自由をも示す。モーセはこの名を委ねられて、今、信仰のない世界へ送られ、自らを神の子と称するファラオの前で、「ある」というお方の証言をせねばならない。モーセがそう主張するのではない。「わたしはある」とはっきりと語られる神御自身がモーセを通して証しされる。そして、未だ神の名を呼ぶことを知らないイスラエルの民に向かい、「わたしはある」と宣言される方の言葉を伝え、彼らがその名において神を礼拝するようになることが、これからのモーセが生きる意味となる。

神に召された信仰者は誰しもモーセの姿に自らの召命を見る。神が人を御自身の働きへと召されるとき、それは抗うことができない。神が「ある」ということを本当に知るとき、その言葉には逆らえない。モーセが試みた反抗は、己を捨てるための試みであった。人の思いから来る疑いや不安は、神の御存在の確かさの前には根拠を失う。御言葉の宣教へと人が召されるとき、自分の力を信じることなどできない。罪人が悔い改める出来事は、杖が蛇に変わったり、皮膚病がきれいに治ったりする以上の奇跡に相違ない。主イエスはこれを「ラクダが針の穴を通る方が易しい」と言われた。宣教への召命は、モーセのように一介の羊飼いが召されるのと同じである。「人にはできないが、神にはできる」ことを信じて、ただ神の言葉の力に頼って、その働きに召されるだけである。信じる者には、神の名が委ねられており、神は信仰者の生涯においてご自身の存在を訴えておられる。神を信じる者たちの人生は、いつでもその名を帯びている。

（牧野信成）

9月10日　モーセの召命　説教展開例

テキスト　出エジプト記 3章1〜22節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問7，8

〔単元のねらい〕

『子どもカテキズム』問7は、神さまは「永遠で、変わらないお方です」と告白する。問8には、「生きておられるまことの神さまです」とある。聖書の神は契約の神であり、真実で変わらないお方、生きて働かれるお方である。主なる神は、モーセを召し出して、出エジプトのわざへと導いてくださった。イスラエルの民の贖いのみわざを成し遂げてくださった。今も、主なる神のわたしたちへの愛は変わらない。契約に対する真実も変わらない。神は生きて働いておられる。それゆえに、神は確かにわたしたちを救いの恵みに入れてくださる。神さまを信頼することへと子どもたちを招きたい。そして、わたしたちも神さまに真実をもって応えて歩みたい。なお、聖書朗読としては、1〜10節くらいまでが適切であろう。

「神さまの愛は変わらない」

みんなは、お友だちやおうちの人と約束をしたことがありますか。たぶん、あるでしょう。いろいろな約束をしたことがあるでしょう。いついつ一緒に遊ぼうね。そう約束して、約束を守ることができたでしょうか。あと一時間遊んだら、お片付けして勉強する。そう約束して、守れたでしょうか。守れたこともあるし、守れなかったこともある。そうですね。わたしは、子どもたちといついつ一緒に遊べるよ、そう約束していて、忘れてしまうことがありました。本当にごめんなさい。

約束は、きちんと守らなくてはいけません。けれども、わたしたちは、守れないことがある。約束していたことを忘れてしまうことがあります。人間は、約束をきちんと守ることができず、人を傷つけたり、悲しませたりしてしまいます。けれども、神さまは、約束を忘れることがありません。約束をいつもおぼえていて、必ずそのとおりにしてくださるお方です。

神さまの不思議な導きによって自ら引き上げられたモーセは、おそらく三年ほどお父さんお母さんのもとで養われ、その後、エジプトの王女に引き取られて、エジプト人として育てられました。モーセは成長して、おとなになり、やがてエジプトからも離れて生活することになりました。このとき、ミディアンという地方に住んで、羊の群れを飼い、羊を育てる仕事をしていました。

ある日のこと、モーセが羊の群れを連れて荒れ野に出かけていたとき、とても驚くことが起こりました。荒れ野の中の所々に柴の木が生えています。その柴の木の一つが突然燃え上がりました。炎が上がったのです。空気が乾燥しているから、自然に火が起こったのか、モーセさんはそう思ったかもしれません。ところが、その柴は、燃えているのに、燃え尽きません。赤く燃えているのに、柴の木そのものはぜんぜん燃えていません。いったいどういうことだろうか。そう思ったモーセは、柴の木に近づきました。

すると、その柴の木のほうから声がしました。「モーセよ、モーセよ」。モーセはとっさに答えました。「はい」。声が続きました。「ここに近づいてはならない。足から履き物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」。さらに声が続きます。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。モーセは気がつきました。ああ、神さまが声をかけてくださったのだ。柴が燃えていたのは、神さまの御使いがそこにおられたからだ。モー

セは、神さまを畏れて、あわてて顔を覆い、ひれ伏しました。

神さまはおっしゃいました。「わたしは、あなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。わたしは、エジプトにいるイスラエルの人びとが苦しんで生活しているのを知っている。わたしは、あなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに、カナンの地を与えると約束したことをおぼえている。今、わたしは、エジプト人の手からあなたたちを救い出し、その約束の地、すばらしい土地に導き出す。イスラエルの人びとが苦しんでいる声が聞こえる。今、行きなさい。わたしは、あなたをエジプトの王さまのところに遣わす。わたしの民イスラエルの人びとをエジプトから連れ出しなさい」。

驚きましたか。柴の木が燃えだして、けれども、燃え尽きない。それはもちろん驚きです。けれども、もっと驚くべきことがあります。神さまが、300年以上、いや400年位も昔かもしれません、それほど昔の約束を忘れることがなかったことです。神さまは、モーセの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブへの約束を忘れることなく、今このとき、それを実行しようとしておられるのです。神さまは、そのように、変わらないお方です。アブラハムを愛して、イサクを愛して、ヨセフを愛して、今もモーセを愛して、イスラエルの人びとを愛しておられます。その愛が変わらないから、モーセに語りかけて、これからイスラエルの人びとを導き出すとおっしゃっておられます。

このイスラエルの人びととは、主イエスさまに結ばれて教会の枝とされているわたしたちのことでもあります。主なる神さまは、わたしたちのことも愛して、わたしたちをも救い出してくださる、力強く生きて働いてくださるお方です。神さまは、わたしたちを愛して救い出すと約束されました。そのことを必ず成し遂げてくださるお方なのです。こういう神さまがおられて、神さまを信じることができるとは、何と幸いなことでしょうか。

そして、変わらない、真実な神さまを信じて、わたしたちも神さまに応えて、真実に生きることができるよう、まっすぐに生きることができるように、造り変えられるのです。

神さまが突然現れて、「あなたをエジプトに遣わす」と言われて、モーセは戸惑いました。うろたえました。いったいどういうことでしょうか。自分に何ができるでしょうか。とくに、実は、モーセはエジプトの王さまから逃げていたのです。王女の子どもとして育てられたのですが、王さまのところから逃げ出して、ミディアンに来ていた。ですから、エジプトに戻るなどとんでもない。そして、エジプトの王女の家でぬくぬくと育った自分を、イスラエルの人びとがどうして指導者として受け入れてくれるだろうか。モーセは、いくつもの理由をあげて、神さまに反対しました。

神さまは、そんなふうにして逃げ出してきて、モーセの心が傷ついていることをご存じでした。そのため、生きて働いておられる神、力強いお方である神ご自身がいつも一緒にいてくださると約束されました。「わたしは必ずあなたと共にいる」。そうおっしゃって、モーセを力づけられました。

神さまは、ご自身の御言葉を与えて、わたしたちを力づけてくださいます。確かに一緒にいて、力を与えてくださいます。モーセは、確かに神さまが一緒におられ、神さまから力を与えられました。神さまは、モーセを助ける人として、兄であるアロンも備えておられました。そのような助けと励ましがあり、イスラエルの人たちは、神さまがモーセに告げられた御言葉を聞いて、神さまの約束を思い出し、信じることへと導かれました。イスラエルの人びとは、モーセを指導者として受け入れ、出エジプトへと備えたのです。

神さまは変わらないお方であり、生きて働いておられます。わたしたちを愛して、わたしたちを救い出す、その約束に忠実です。その神さまに信頼して、わたしたちも、神さまに真実に応えて生きていきましょう。　　（望月　信）

〔今週の暗唱聖句〕　マラキ書 3章6節前半

まことに、主であるわたしは変わることがない。

9月10日　モーセの召命　幼稚科

〈ねらい〉

必要なものはすべて神さまが用意してくださるから、大胆に神さまのことをお話しできるように。

〈暗唱聖句〉

「わたし必ずあなたと共にいる」。

〈展開例〉

①長い間、イスラエル人たちは奴隷となって苦しんでいました。神さまはその叫びを聞き、御心に留められていました。そして大きくなったモーセさんにいよいよ声をかけられます。

②ある日、モーセが荒れ野の奥へ羊を追って入っていくと、柴が燃えているのに気がつきました。「あれ、火は燃えているのに、柴は燃え尽きない。不思議だな」。

③すると、「モーセよ、モーセよ」と天から声が聞こえました。彼が「はい」と答えると、「私はあなたの父の神である。私はエジプトで苦しむイスラエル人を見、叫びを聞いた。そこで、わたしはあなた王のもとに遣わして、イスラエルの人をエジプトから連れ出す」。

④モーセはビックリしました。そしてすぐに言いました。「私にはそんな力はありません。私には無理です」。しかし神さまは言われます。「わたしは必ずあなたと共にいる」。

⑤でもモーセは自信がなくて言いました。「神さまはどなただと聞かれたら答えられません」。しかし神さまは言われます。「わたしはあるというものだ。そう答えなさい」。

⑥でもモーセは心配して言いました。「私が神さまと一緒にいることは誰にも見えません」。しかし神さまは言われます。「杖を蛇にかえてあらわしなさい」。

⑦それでもモーセは恐れて言いました。「わたしは口下手でうまく話しができません。誰か他の人にしてください」。

⑧さすがに神さまは怒って言われます。「アロンを一緒に連れて行きなさい。もう言い訳はよい。必要なものはすべてわたしが用意する。だからあなたは杖を持って、アロンと一緒に王の前に行きなさい」。

⑨モーセさんは行くことをとても怖がっていましたけれども、それが神さまの御心であることがはっきり分かりました。そしてアロンと杖を持って出かけていきました。もう言い訳ばかりのモーセではありません。神さまから送られた者として、堂々と王さまの前に立ち、神さまの言葉を語りました。

〈お祈り〉

いつも必ずわたしたちと共にいてくださる神さま。あなたは、神さまのお働きができるように、すべて準備してくださっていることをモーセさんを通して知りました。だからわたしたちも神さまのお働きができるように力を与えて、周りのお友達にも神さまのことをお話ししできるようにしてください。アーメン。

9月10日　モーセの召命　小学科下級

〈ねらい〉

神様はいつも変わらないお方であり、お約束を守られる方であることを知る。

〈はじめに〉

今日も変わらず、日曜学校に神様が一人ひとりの子どもを招いてくださいました。招きに応じてくることができた一人ひとりの子どもを温かく迎えましょう。このクラスの部屋に入って来る子どもたちの表情はいかがでしょう。子どもたちの生活の様子は見えますか。子どもたちの祈りの課題はないでしょうか。子どもたちの祈りの交わりも大切にしたいものです。

〈御言葉に聴きましょう〉

①モーセは、神の山に行きました。この山は何と言いますか。

②ホレブの山に来た時、モーセは何を見ましたか。

③柴の間から、「モーセよ、モーセよ」という声を聞きました。だれの声ですか。

〈展開例〉

王女に助けられ育ったモーセは、大きくなって、将来の王様になるためのお勉強を一生懸命しました。そして多くの人から尊敬される大人として成長しました。でも、モーセは自分と同じイスラエル人が、奴隷として毎日毎日、しんどい苦しい仕事をしている様子を見ていましたから、心がいつも悲しかったのです。モーセは、このエジプトからイスラエル人を助ける大きな仕事が与えられていることを知っていました。

ある日、モーセはいじめられているイスラエル人を見て、そのいじめたエジプト人を殺してしまいました。それを知った王様はカンカンに怒ったので、モーセはミディアンという所に逃げて行きました。その時モーセは40歳でした。モーセは羊のお世話をするお仕事をして過ごしました。今までとは全く違うお仕事ですね。

ある日、モーセは、ホレブという山に来ました。そこに不思議な火が燃えているのに、葉っぱや枝はなくなりません。そして火の中から、神様の声がして「モーセよ、モーセよ、ここに近づいてはいけません。履物を脱ぎなさい。ここは聖なる土地です」と言われました。また「私は、エジプトにいるイスラエル人が苦しんでいるのをよく知っています。私はあの人たちを救い出します。今、行きなさい！王様の所に行って、イスラエル人を連れ出すと言いなさい」と言われました。

モーセはびっくりしました。「どうしてそんなことが私にできるでしょうか」と言いましたが、神様は「私は必ず、あなたと共にいます。必ずイスラエル人をエジプトから救い出します」と言われました。モーセは本当に神様から大きな力が与えられました。

モーセと共に居てくださった神様は、今日も明日も私たちと共にいてくださるのです。

〈お祈り〉

神様、どんな時も私たちと一緒にいてくださりありがとうございます。変わらない愛をもって私たちを愛してくださり、ありがとうございます。

9月10日　モーセの召命　小学科上級

〈ねらい〉

「単元のねらい」に従って、「聖書の神は契約の神であり、真実で変わらないお方、生きて働かれるお方である」ことを確認したい。

〈展開例〉

「あなたこそ、主なる神。アブラムを選んでカルデアのウルから導き出し／名をアブラハムとされた。　あなたに対して忠実なその心を認め／彼と契約を結び／子孫に土地を与えると約束された。カナン人、ヘト人、アモリ人／ペリジ人、エブス人、ギルガシ人の土地を。あなたは約束を果たされた。まことにあなたは正しい方。

わたしたちの先祖がエジプトで苦しんでいるのを見／葦の海で叫び声をあげるのを聞き　ファラオとその家来／その国民すべてに対して／あなたは数々の不思議と奇跡を行われた。彼らがわたしたちの先祖に対して／傲慢にふるまったことを／まことにあなたは知っておられた。こうしてかちえられたあなたの名声は／今日も衰えることを知らない」（ネヘミヤ記9:7～10）。

イスラエルの人々の苦しみをほうっておくことができずに、モーセを通して救い出そうと、神様が宣言なさったと教えられました。そしてそれは、ご自分がかつて約束なさったことを、決して忘れることなく実行なさろうとしてくださる、神様の変わることない真実を教えてくれるのだと確認しました。

聖書の神様はこのように、私たちのために約束を守り続けてくださる方です。聖書には、そんな神様が何度も繰り返してくださった約束の言葉が記録されています。

「それにもかかわらず、彼らが敵の国にいる間も、わたしは彼らを捨てず、退けず、彼らを滅ぼし尽くさず、彼らと結んだわたしの契約を破らない。わたしは彼らの神、主だからである。

わたしは彼らの先祖と結んだ契約を、彼らのために思い起こす。彼らはわたしがその神となるために、かつて国々の目の前でエジプトの国から導き出した者である。わたしは主である」（レビ記26:44～45）。

「わたしの僕イスラエルよ。わたしの選んだヤコブよ。わたしの愛する友アブラハムの末よ。わたしはあなたを固くとらえ／地の果て、その隅々から呼び出して言った。あなたはわたしの僕／わたしはあなたを選び、決して見捨てない。

恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える」（イザヤ書41:8～10）。

約束を果たされる神様は、約束通りにイエス様を与えてくださいました。そしてイエス様は私たちに、罪の赦しと永遠の命を、必ず約束通りに与えてくださいます。

「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。……わたしたちも、先祖に与えられた約束について、あなたがたに福音を告げ知らせています。つまり、神はイエスを復活させて、わたしたち子孫のためにその約束を果たしてくださったのです。」（使徒言行録13:23, 32～33）

〈祈り〉

神様、約束を守り続けてくださるあなたの真実に感謝します。モーセやイスラエルの民と共にいてくださったように、私たちとどこまでも共にいてくださると約束してくださったあなたを信じます。強く雄々しく歩むことができますように、守り導いてください。

9月10日　モーセの召命　中学科

〈ねらい〉

神様の約束の確かさと、それを確信させる神様の存在と御言葉の力を覚える。

〈展開例〉

①今日はモーセが、イスラエルの人たちに神様の思いを伝える使命に召し出された話。モーセは王宮で成長した。しかし、エジプト人に虐げられるイスラエル人を助ける際にエジプト人を殺してしまう。モーセは事件が露呈するのを恐れ、エジプトからミディアンという土地に逃れ、そこで暮らしていた。そんな折、モーセは山で神様と出会う。そこで、モーセに使命が与えられる。使命とは、エジプトに戻りイスラエル人に、神様は昔の約束を覚えてイスラエルを助けるということを伝えること。また彼らをエジプトから約束していたカナンへ導くというものであった。

②これを聞いてモーセはうろたえる。エジプト人への恐怖。自分の能力の限界。イスラエルの人たちへの不信感。神様は色々な言い訳を理由にして使命を断ろうとするモーセに、それらを解決する答えをくださる。それでも不安がるモーセに、神様は私が一緒にいるから大丈夫だ、と力強い励ましを与えてくださった。

Q．皆はどうか？　神様から自分の生きる道を示されたとき、うろたえることはないか？　神様を中心にした生活をつくり上げよ、という使命。すべての人に神様と生きる幸いな生き方を広めよ、というイエス様からの使命。君たちもまた神様からの使命をいただく者たちである。だが、神様の命令を聞くとき色々な言い訳を探して、「そんな力は無い」「そんなことをすれば周りからひどい目にあう」「そんな生き方をしても誰も理解しないに違いない」、こんな風に使命を放棄する心の弱さがないだろうか？

③しかし、神様は言われる、「わたしは必ずあなたと共にいる」。モーセは神様との出会いをとおして、本当に神様はおられるということを知った。そして、その神様が使命のために必要なすべてのことを解決してくださるということを示された。モーセという人は本当に心配症である。神さまの励ましがあり、それでもなお彼はうろたえる。だが、神様はとりあえず行け、と言われる。心配事は言い出せばキリがないが、神様はモーセと一緒に行って、その都度、なすべきことを教えてくださると言われた。そして、確かに彼は神様と共にエジプトのイスラエルの人々の前に出ていき、神様の約束の確かさを彼らに信じさせるに至った。

④モーセの何が、神様の約束の確かさをイスラエルに信じさせたのだろうか？　それは、一緒にいてくださる神様のリアリティー。そして、リアルに神様と一緒にいる、モーセの口をとおして語られる神様の言葉の力だった。自分が信じるにしろ、誰かに信じてもらうにしろ、神様の命令や約束がホンモノだということが確かにされるとき、必要なのは能力でも環境でもない。神様が共にいること。神様の声に聞くこと。このことだけが、無茶に思える神様の使命を実現可能にする。この二つを体の隅々にかよわせるために毎週の礼拝を神様は用意しくださっている。神様を中心として生きるために、神様がそのリアリティーと確かな言葉を君たちに届けてくれるよう、神様に願いたい。

〈祈り〉

モーセと共におられた神様。あなたの使命に生きられるように、私にも同じように共にあって、あなたの声を聞かせてください。アーメン。

9月17日　十の災いと過ぎ越し　聖書研究

テキスト　出エジプト記 7章8〜24節

神はイスラエル救出のためモーセとアロンを派遣され、この二人の働きによって神の御業が世に媒介される。出エジプトの出来事では、イスラエルの解放という事態を通して救いの神が啓示されるが、その一方で神の裁きに立ち向かう人間の滅び行く様をも描き出す。全体として、救いの神と救われるべき罪人の姿が告げられることによって、人類全体へ救いが呼びかけられている。

イスラエルの解放は単にエジプトから砂漠へと放り出されることではない。聖書はそれを「自由である」とは言わない。神の代理人としてモーセがファラオに要求するのは、「わたしの民を去らせ、荒れ野でわたしに仕えさせよ」というものである（7:16）。イスラエルの自由は、神に仕える、すなわち礼拝することの中に保証される。奴隷から自由民へという社会的立場の変化には、罪の束縛から神の自由への解放という福音が込められている。その意味で、出エジプトの出来事はイエス・キリストの十字架による罪の贖いを予め示す。

十の災いによってふるわれるエジプトは、創造者である神が救済者として働かれることによって、実際に不信仰が打ち壊されて行く過程をも示す。モーセとアロンの一見絶望的な闘いは、神がご自身の闘いとしてこれを行われることで、確実に救いへと導かれる。それはエジプトの神とイスラエルの神との闘いとして描かれており、エジプトの偶像に対して創造者である真の神が裁きの力を発揮され、ご自身の唯一であることを証しされる。

アロンの杖が蛇に変わって見せることで神の奇跡的な力が示されるが、これはエジプトの魔術師たちも同様に行うことができ、実害のない不思議というものが信仰の問題にとっては効果を生まないことの事例となっている。アロンの杖が魔術師たちの杖を飲み込んだことはその後の行く末を暗示する。

第一の災害は、ナイル川だけが血に変わったのかエジプト中のあらゆる水が血に変わったのか本文が錯綜するが、エジプト全体が受ける被害は甚大なものと予想される。一つにはエジプト全土を襲う渇水であり、もう一つはエジプトを支える漁業の受ける打撃である。さらには酷い臭いが立ちこめるという不快な状況も加わる。これに対し、ファラオはモーセを無視したばかりではなく、民衆の苦しみにも目を留めていない。

ナイル川の水が血に変わるという災害には、続く蛙の災いと併せて幾つかの象徴的な意味がある。これらの災いはファラオがイスラエルに行った「嬰児殺し」に対する報復を意味する。「生まれた男の子は一人残らずナイル川に放り込め」（1:22）と命じたファラオに対して、殺された子供たちの血がナイル川から訴える。蛙はエジプトの豊饒を支える女神であり、安産の神であった。ナイル川と蛙というエジプトの神々は、こうして今やエジプトに災いをもたらすものとなった。これらの災いはエジプトの自然崇拝を逆手にとり、イスラエルの神がそれらの創造者であることを知らせるものである。

神はエジプトを滅びに定められたとは記されていない。エジプトは、自分の国のただ中で悲惨な状態に置かれているイスラエルに目を留めるよう求められている。彼らを奴隷の状態に留めておくのは不当である、と訴えられている。そして物言わぬ偶像にではなく、イスラエルを真の信仰の内に解放しようとされている神の御業に目を留めることが求められる。その神の真実を悟るのならば、彼らも間違いなく、神の憐れみを受けることになる。ヨセフの時代がその前例となる。そこには危機の中にあっても平安でいられた、神の知恵が支配する時代があった。エジプトにもまた立ち返る場所が用意されている。人間の頑なさは人間の説得力ではなく、歴史を導く神の御業が打ち壊す。神は世を滅ぼすお方ではなく、滅び行く世界を救おうとされるお方である。　（牧野信成）

9月17日　十の災いと過ぎ越し　説教展開例

テキスト　出エジプト記 7章8〜24節
参照カテキズム　子どもカテキズム 問14

〔単元のねらい〕

テキストは7章前半であるが、単元の主題に基づいて、12章までを取り扱う。『子どもカテキズム』問14に「神さまより大きく強いものはないからです」とある。主なる神は、ファラオの高ぶりを裁くことをとおして、イスラエルの民を神信頼へと招かれた。わたしたちも主なる神に期待することができる。主イエス・キリストを贖いの小羊として与えてくださった神こそ、わたしたちの力である。

「神さまに希望がある」

エジプトで、イスラエルの人たちは苦しんでいました。奴隷にされて、朝から晩まで土をこねて、レンガを作らなければなりません。逃げ出した人もいました。けれども、エジプトの兵士たちが見張っていました。逃げ出した人は捕まえられて、もっと苦しい目にあわされました。

そんなイスラエルの人たちのところに、モーセが現れました。モーセは言いました。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、イスラエルの民の神さまが現れて、『イスラエルの人びとをエジプトから導き出す』と告げられた」。モーセの兄であるアロンも一緒になって、神さまが現れてくださったと語りました。イスラエルの人たちは、神さまが一緒にいてくださるならば、エジプトから出て行くことができるかもしれない、苦しみから逃れることができるかもしれない、そう思い、神さまを信じて、神さまに期待しました。

けれども、その期待は裏切られました。モーセとアロンがエジプトの王さま、ファラオのところに行って、言いました。「イスラエルの神、主がこう言われました。『わたしの民を去らせて、荒れ野でわたしのために祭りを行わせなさい』」(5:1)。ところが、ファラオは、モーセとアロンの言うことを聞かず、イスラエルの神さまのことを認めませんでした。ファラオはとても傲慢だったのです。イスラエルの神を認めませんでした。また、イスラエルの人たちはよく働いたので、エジプトにとって、イスラエルの人たちが出て行くなどとんでもないことだったのです。ファラオは、イスラエルの人たちをもっと苦しめることにしました。「レンガを作る材料を集めることから始めなさい。できるレンガの量は変えてはならない」。そう言って仕事を増やしました。イスラエルの人たちは、イスラエルの神さまよりもエジプトのファラオのほうが強いのか。神さまの力はそんなものか。そんなふうに思ったかもしれません。

みんなは神さまが生きて働いておられることを信じていますか。神さまが力強いお方であることを知っていますか。まことの神さまは、神さまを認めなかった傲慢なファラオを裁き、また、イスラエルの人たちに、ご自身が力あるまことの神であることをお示しくださいました。そのために、とても大きなみわざを行ってくださいました。

神さまはモーセを励まして言いました。「今や、あなたは、わたしがファラオにすることを見るであろう。わたしの強い手によって、ファラオはついに彼らを去らせる。わたしの強い手によって、ついに彼らを国から追い出すようになる」(6:1)。神さまは、イスラエルの人びとがお願いしてエジプトから出て行くのではなくて、逆にエジプトのファラオがイスラエルの人たちに出て行ってほしいと願うようになるだろうと約束されました。

神さまから励まされ、力を与えられて、モーセはファラオの前で次々と不思議なことを行いました。まず最初に、アロンが自分の杖をファラオの

前に投げると、杖が蛇になりました。けれども、ファラオはイスラエルの神さまを認めませんでした。そのため、神さまは全部で十の災いを与えられました。一つめの災いは、ナイル川の水が血に変わりました。モーセが杖でナイル川の水を打つと、水が真っ赤な血に変わり、ついには川だけでなく、池や水たまりの水まで血に変わりました。飲み水がなくなってたいへんなことになりましたが、けれども、ファラオはイスラエルの人たちがエジプトを出て行くことを認めませんでした。

二つめは、エジプトを蛙が襲う災いでした。神さまはエジプト中に蛙を送り込み、蛙は家の中はもちろん、ファラオのベッドにまで入り込みました。ファラオは言いました。「主に祈願して、蛙がわたしとわたしの民のもとから退くようにしてもらいたい。そうすれば、民を去らせ、主に犠牲をささげよう」。けれども、蛙が死に絶え、災いが過ぎ去ると、ファラオは心を変えて、イスラエルの人たちを去らせませんでした。

第三はぶよが送り込まれました。第四はあぶが送り込まれました。ぶよやあぶは人や家畜を襲って体を刺します。けれども、ファラオはイスラエルの人たちを去らせませんでした。五つめは疫病がはやり、六つめははれ物の災いでした。エジプトの国中の人々が病気に襲われ、けれども、イスラエルの人たちは病気になりませんでした。第七は雹が降るという災いです。雹が降って野原にいた家畜や畑の穀物がすべてダメになってしまいました。第八はいなごの大軍が飛んできて、畑に残っていた穀物や緑をすべて食い尽くしていきました。そのたびに、ファラオは、口では「イスラエルの民を去らせよう」と言いますが、災いが過ぎ去ると、「いや、去らせはしない」と言いました。約束を守らず、イスラエルの神さまが生きておられるお方であることを認めません。

ついに神さまは、エジプトの国中を暗くされました。暗闇で覆われたのです。第九の災いです。暗闇とはもはや希望がないということです。エジプトには希望が残されていないと示されました。神さまが共におられることに希望があります。

第十の災い、最後の災いがエジプトに行われます。神さまは、イスラエルの人たちに、小羊の血を家の門に塗り、その小羊の肉を焼いて食べるよう命じられました。その塗られた血を御覧になって、過ぎ越されるとおっしゃるのです。その夜、エジプトの国中で悲しくつらいことが起こりました。人であれ家畜であれ、その最初の子が撃たれて、命を失いました。エジプトの国中に泣き叫ぶ声が満ちました。けれども、小羊の血を門に塗ったイスラエルの人たちは守られたのです。

ついにファラオは、「イスラエルの人たちがこのままエジプトにいると、かえって災いばかり起きて、エジプトは滅びてしまう」と思い、出て行ってほしいと願うようになりました。神さまがエジプトに対して憤っておられることを認め、モーセを呼び出して言いました。「さあ、わたしの民の中から出て行くがよい。行って、主に仕えるがよい。そして、わたしのために祝福を祈ってほしい」。こうして、ファラオとエジプトの人々は、イスラエルの人たちをせき立てて、エジプトから追い出しました。お願いされて出て行くのですから、家畜などを連れて行くのはもちろん、衣服や金銀の装飾品などもいただいて、イスラエルの人たちは用意を整えて旅立ちました（12:31～36）。

神さまは、神さまを認めず、人々を苦しめる、傲慢な人を裁かれます。また、イスラエルの人たちは、その神さまの力強いみわざを見て、神さまへの信頼を取り戻しました。神さまに期待して歩む民とされて、荒れ野に旅立ちました。神さまは、神さまを信じる民を災いから守り、救い出してくださるお方です。今もイエスさまに結ばれて、神さまを信じて生きる者と共にいてくださるお方です。たとえ災いがあっても、神さまに依り頼む人に神さまの守りが確かです。神さまに期待して、歩みましょう。　（望月　信）

〔今週の暗唱聖句〕　出エジプト記 7章5節

わたしがエジプトに対して手を伸ばし、イスラエルの人びとをその中か導き出すとき、
エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。

9月17日　十の災いと過ぎ越し　幼稚科

〈ねらい〉

必要なものはすべて神さまが用意してくださるから、大胆に神さまのことをお話できるようになって欲しい。

〈暗唱聖句〉

「わたしの強い手によって、王は必ずイスラエルを去らせることになる」。

〈展開例〉

①モーセさんは神さまの言われたとおり、王さまの前にたち、勇気を振りしぼって言いました。「イスラエルの神、主がこう言われます。『わたしの民をエジプトから去らせなさい』」。しかし王さまは「わたしは主など知らないし、イスラエルをさらせはしない」と、聞こうともしません。モーセさんたちはがっかりして退出しました。

②しかし神さまはモーセさん言いました。「わたしの強い手によって、王は必ずイスラエルを去らせることになる」。モーセさんは神さまの言葉を信じました。

③神さまは言われました。「王の心はかたくて民を去らせない。アロンに言って、杖でナイル川を打ちなさい。そうすれば水は血に変わる」。アロンは言われたとおりに行いました。川の水はことごとく血に変わり、悪臭を放ち、誰も水を飲めなくなりました。しかし、王はこのことを心に留めませんでした。

④次に神さまはモーセに言われました。「国中の水の上に手を伸ばしなさい。そうすればかえるを這い上がらせる」。アロンは言われたとおりに行いました。あらゆる水からかえるが這い上がってきて、国中を覆いました。王さまは困って、モーセに「明日イスラエルの人を去らせる」と約束しました。でも、次の日になると心をかたくしてイスラエル人を去らせませんでした。

⑤神さまは言われました。「杖で土の塵を打ち、ぶよにしなさい。」アロンはそのとおりにしました。しかし王は彼らの言うことを聞きませんでした。

⑥神さまは次々に災いを起こされて、王にイスラエル人を去らせるように迫りました。モーセさんとアロンさんは神さまの言うとおりに王に話し、また行いました。しかし王の心はかたくなで、神さまの言葉を聞き入れませんでした。

⑦そして最後の10番目の災いのとき、神さまは言われました。「私はエジプト中の人も家畜もすべて、はじめの子供を打つ。イスラエルの人々は、小羊の血をその家の門の柱とかもいに塗りなさい。そうすればわたしはその家の前を通り過ぎて打つことはない。この災いの後、王はイスラエルをエジプトから去らせる」。モーセは王に伝えましたが、王の心はかたくなで、イスラエルの人たちを去らせませんでした。

⑧その夜。神さまの言われたとおりのことが起きました。国中の初めの子どもが打たれたのです。王さまはやっと神さまの強い手が分かり、エジプトからイスラエル人を去らせることを決心しました。

⑨こうして、神さまの強い手によって、イスラエルの人たちは奴隷の苦しみから解放され、モーセに率いられてエジプトから出て行くことになりました。そしてこれからも神さまの手の中で旅を続けていくことになります。

〈お祈り〉

力強い手を持って、イスラエルの人たちを守り救ってくださった神さま。あなたはどんなことをしてでも、助けを求める人たちをお救いになる方です。どうか私たちも、あなたの手の中で守ってください。王さまのように、心をかたくなにして災いを与えられませんように。アーメン。

9月17日　十の災いと過ぎ越し　小学科下級

〈ねらい〉

生きて働いておられる、神様のお守りの確かさに信頼する。

〈はじめに〉

9月も最後の週を迎えました。季節の変わり目は子どもたちにとって、体調を崩しやすかったりします。お休みが続いている子どもはいないでしょうか。どういう風にコンタクトをとるのがその子どもにとって、その家庭にとって相応しいのか、案じることも多々あります。いろいろと教師間で相談しながら、相応しいフォローを祈りながら続けましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

①神様は、誰と誰にお話をされましたか。
②杖は、何に変わりましたか。
③ファラオは、モーセとアロンの言うことをききましたか。

〈展開例〉

神様から大きなお仕事を与えられたモーセにはアロンというお兄さんがいました。モーセとアロンで、神様との約束「エジプトからイスラエル人を救い出す」という仕事を始めました。

でも、この国の王様ファラオは、全く言うことを聞きません。そこで、神様はエジプトの国に不思議な「十」の出来事、喜ぶことではなく、災いを次から次に起こしました。

一つ目。アロンがファラオの目の前で、杖を振り上げ、ナイル川の水を打つと、川の水が、全部、血に変わってしまいました。家で使う水も血になってしまいました。国中血のにおいで一杯になりました。でも王様は言うことを聞きません。二つ目。川から蛙があふれてきました。国中蛙で一杯になりました。王様は言うことを聞くから蛙をなくして欲しいとお願いすると、モーセは神様に祈って蛙は全部死んでしまました。蛙がいなくなるとファラオの心は変わっていまい、約束は守りませんでした。三つ目。土の塵が全部、ぶよに変わり、四つ目。あぶで一杯になって国は荒れ果てました。五つ目。動物の病気がはやりました。家畜は全部死んでしまいました。六つ目。エジプト人と家畜は、うみの出る腫れものができました。七つ目。雷がなって、大きなひょうが降りました。外にいた人はみんなひょうに当たって死んでしまい、畑のものも全部死んでしましました。八つ目。いなごの大群がやってきて残っていた作物を全部食べてしまいました。九つ目。エジプト中、三日間真っ暗になりました。こうして、エジプトの国は次から次に恐ろしい災いがくだりましたが、残念なことに王様は全然、モーセとアロンの言う「イスラエル人をエジプトの国から出してください」ということを聞き入れませんでした。

そして、とうとう、十番目の災いが起こります。それは、一番恐ろしいものでした。「エジプト中の、全ての長男が、みんな死んでしまいます」というものでした。王様の長男も死んでしまうというものです。この災いからイスラエル人の子どもは助かるように、特別なことがありました。それは、家の入口の柱に、子羊の血を塗るということでした。その血を塗っている家の子どもは殺されないですみました。神様が言われたとおり、国中の長男が死にました。王様の長男も死にました。これ以上の悲しみはありません。やっとやっと、王様の心は変わり、イスラエル人をエジプトから出て行くことができました。

長い間、本当に長い間待った、神様からのお約束、イスラエル人を救い出すというお約束は、本当になりました。たくさんのイスラエル人は苦しい仕事から、苦しい生活から離れることができました。皆どんな気持だったでしょう。モーセのあとについて、たくさんの人たちが家族やお引越しの荷物も持って歩き出しました。神様は、その長い列を、昼は雲の柱、夜は火の柱で、みんなを守ってくださいました。

〈お祈り〉

神様、神様の言うことを信じ守り続けることができますように。

9月17日　十の災いと過ぎ越し　小学科上級

〈ねらい①〉

まことの神のご意志に対してどこまでも反抗する罪人のかたくなさと、それをいつでも凌駕することができる神の力強さを伝える（子どもカテキズム問14「神さまより大きく強いものはないからです」）。同時に、そのような力強き神が、その力を捨てるという十字架の愚かさによって人を救いに招かれるという、愛の圧倒にともに驚く。

〈展開例①〉

今日のお話では、これでもかこれでもかと、神様が驚くべき出来事を起こされました（紙芝居など用いて、子どもたちのイメージをふくらませていただければと願います。）でもファラオはどこまでもかたくなでしたね。「もう参った、やめてくれ」と言いながら、神様が手を緩めると「やっぱり嫌だ、神の言うことなんか聞くものか!!」って、駄々っ子みたいに繰り返しました。バカだなあって思うけど、でもこれが人間なんだと聖書は教えてくれています。私たちも、いつも同じことをしているのです。

神様は、そんなファラオのことを、手のひらで転がすようにしてあしらわれましたね。ファラオがそうやって「やっぱり嫌だ」って言い出すことも全部分かっておられて、そんな反抗には決して屈しないで、どこまでも力で圧倒されます。ついには、「本当に今度こそ参りました」と言わせて、イスラエルの人たちが出て行くようにとファラオにお願いさせてしまった。

北風と太陽の話は知っていますか。旅人のコートを脱がせようと、北風が必死に吹きつけても、旅人は絶対に脱ごうとしなかった。同じように、ファラオも絶対に神様の言うことを聞こうとしなかった。でも北風にはできなかったことも、神様にはできるのです。どこまでもかたくななファラオのコートを、ついに脱がせてしまう、そういう圧倒的な力を神様は持っておられるのです。すごいね。

そんな神様の力によれば、今世界中の罪人（私たちを含めて）に何千、何万の災いを与えて、神様の言うことをムリヤリ聞かせることだって、本当はできるのです。でも神様はそうはされなかったことを覚えましょう。神様は、どこまでも反抗する私たちの罪を罰する代わりに、イエス様を身代わりの犠牲としてくださいました。そういう大きな愛が、私たちのかたくなさをすっぽり覆っています。太陽よりも暖かい愛が、私たちに注がれているのです。

〈ねらい②〉

このような「奇跡」を信仰の目によっていかにしてとらえるか、共に考える。

〈展開例②〉

こういう10の災いの奇跡を読んで、おとぎ話みたいだなと思った人もいると思う。正直でよろしい。教会には「違うよ、おとぎ話なんかじゃない、本当にあったんだ」と証明したくて、科学的に説明しようとする人もいっぱいいます。最近では、この一連の出来事は、紀元前1500年ごろにあったサントリーニ島の大爆発からすべて説明できるなんて仮説もあるね。（インターネットで「出エジプト　サントリーニ島」と検索すると色々出てきます）。

でも、本当に大事なのは、それは全部「神様が神の民のために起こしてくださった救い」だと信じることです。神様は、科学で説明できるようなことも、説明できない超自然的なことも全部用いて、私たちのために「救い」を与えてくださいます。そのためなら、神様はどんなことでもしてくださいます。そして、そういう神様の力が働いている出来事は、どんなありふれたことであっても「奇跡」なのです。

9月17日　十の災いと過ぎ越し　中学科

〈ねらい〉

力強い業で私たちに信頼を起こし、この信頼に応えて災いから守ってくださる神様を覚える。

〈展開例〉

①今日は、神様が不思議な10の災いを起こされて、エジプトの王ファラオにイスラエルの解放を認めさせたお話。先週、モーセがイスラエルの人たちに神様の約束への信頼を呼び起こした話を聞いた。そしてモーセは、エジプトで奴隷であったイスラエルを解放へ導くため、王のもとへ行く。しかし、王はそれを頑なに拒否する。王は、神様の使いであるモーセとやりあおうとする。つまり、王は神様と勝負しようとした。当時の世界の頂点に君臨する神様を認めない国エジプトの代表として、王は神様に歯向かう。神様は自分を神とやりあえると勘違いするこのファラオに、本当の世界の支配者の力をまざまざと知らされる。このため、エジプトには国中を混乱させる災いが10度におよび引き起こされる。そしてついにファラオは神様の力に屈服して、イスラエルの解放を口にした。

②神様はエジプトに災害を引き起こされたがイスラエルの人々は守られた。神様はモーセの言葉を信じ、神様に信頼した者たちを確かに守られ、その約束を果たされたのである。イスラエル人はエジプトに引き起こされる神様の力の大きさを見るたびに神様を畏れたことだろう。また、そこから守られるたびに神様への信頼を強められたことだろう。

③私たちは違う時代を生きているが、今日の話は人ごとではない。私たちの日常にも神様と、神様と敵対する者との戦いは身近なことである。ひとつは、君が神様に従うために、その邪魔をする具体的な障害があるかもしれない。人間関係、社会の仕組み、世の中の考え方。神様と敵対者の戦いは君の周りに確かにあるだろう。また、君の内側、神様に逆らうファラオと神様に従おうとする戦いは君の心の中でも度々引き起こされるのではないだろうか？

④皆はこうした戦いの中で、ときに敵対者の力に怯むかもしれない。今日の話の中で勝利のカギは神様に信頼を置くということであった。しかし、この信頼はどうやったら得られるのだろう？　私たちは口先だけの人間を信じることは難しい。反対に言葉数が少なくても、言ったことをやり遂げる人の言葉には、私たちを信じさせる力がある。皆が神様を信じられるかどうか、それは相手が信じるに足る方か？ということにすべてがかかっている。

⑤今日の話は、神様は御自分が神であるということをしっかりと現わしてくださる方であることを伝えている。神様は自分の力も隠したままではおられない。神様は、本当に御自分が神であるということを私たちに示し、私たちの信頼を勝ち取ってくださるのである。そして、そんな神様を信頼する者を神様は裏切られずに守ってくださる。神様は御自分が大切にしている人を助けられるし、神様は御自分のことを大切にする人を助けたいと思われる。君は、神様がその独り子を与えるほどに神様にとって大切な人である。だから、君もまたいつも神様を大切にする人として歩んでほしい。そんな君を神様はさらに大切に保護して守ってくださるからだ。

〈祈り〉

愛する者に信頼を呼び起こし、さらに愛してくださるあなたに感謝します。アーメン。

9月24日　葦の海を渡る　聖書研究

テキスト　出エジプト記 14章

〈背景と文脈〉

贖いは救済史の大きなテーマのひとつであるが、出エジプト記にはそれに関する出来事が記されている。

主はご自身の民をエジプト人の奴隷の身分から贖うためにモーセを召された。これはアブラハムになされた約束の成就であった（創世記15:13－14)。主は十の災いをもってエジプト人に審判をくだされたが、最後の災いとして、エジプト人のすべての初子を撃たれた。それによって、王ファラオはイスラエル人がエジプトを去ることを許可した（12:29－32)。過越（すぎこし）（12章）の出来事はイエス・キリストによる贖いを指し示すものとして重要な意味を持つ。それに続く葦の海の奇跡（14章）は、イスラエルの民によって記憶され続けるべき歴史的出来事として、詩編や預言書などで、繰り返し言及されている。これにより、イスラエルの民はエジプト人の支配から完全に解放されたのである。

〈ファラオの心変わりと追跡〉(14:1－12)

イスラエルの人々はモーセに導かれてラメセスから出発した。このとき壮年の男子だけで60万人いた（12:37)。主は、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって彼らを導かれた（13:21)。主の大いなる御手に導かれてエジプトを出発した彼らに待ち受けていたのは、大きな試練だった。

主は指導者モーセに、「バアル・ツェホンの前に、それに面して、海辺に宿営する」(2節）よう民に命じなさい、と言われた（詳細な場所に関してはわかっていない)。それには主の目的があった。主はエジプト人に対する最後の決定的な審判を下そうとされていたのである。

イスラエルの民がエジプトを去るのを許可したファラオは、彼らの逃亡について聞くと、心変わりをした。それはイスラエル人がエジプト人の奴隷として有益な存在だったからである。ファラオは自ら軍勢を率い、イスラエル人のあとを追った。強大な軍事力をもって、再び彼らを奴隷としようとした。しかしこのことが主のご計画のなかにあったことは、次から明らかである。「わたしはファラオの心をかたくなにし、彼らの後を追わせる。しかし、わたしはファラオとその全軍を破って栄光を現すので、エジプト人は、わたしが主であることを知る」(4節)。

ファラオの軍勢がイスラエル人に追いついたとき、彼らは非常に恐れた。前は葦の海、後ろはエジプト軍という絶体絶命の状況のなかで、イスラエル人は、主がエジプトの地で彼らのためになされた数々の不思議なみわざを忘れ、モーセを責めた（11－12)。

〈イスラエルの民のために戦われた主〉(14:13－31)

そのとき、モーセは民に答えた。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。……主があなたたちのために戦われる。あなたがたは静かにしていなさい」(13－14)。

主ご自身が彼らのために戦われるので、彼らがなすべきことは、主に信頼することであった。前は海、後ろはエジプト人という絶体絶命の状況でも、全能の神はご自身の方法を持っておられる。モーセが杖を持ち、その手を海に向かって差し伸べたとき、奇跡は起きた。主は激しい東風をもって海を押し返されたので、水は分かれ、海は乾いた地に変わった。この出来事を単なる自然現象と考える学者もいるが、海の水を押し返すだけの強烈な風が吹いている中をイスラエル人が渡ることは不可能である。たとえ自然現象を用いられたとしても、それを支配されているのは主ご自身である。エジプト人が後を追って海のなかに入ったとき、海の水は元に戻り、ファラオの全軍は全滅した。

主はイスラエルの民のために自ら戦われ、栄光を現された。主は、主権者としてご自身の民のために戦ってくださる生ける全能の神である。

（後藤公子）

9月24日　　葦の海を渡る　　説教展開例

テキスト　　出エジプト記 14章
参照カテキズム　　子どもカテキズム 問11,13,41,42

〔単元のねらい〕

この出来事をとおして、主なる神は、イスラエルの民に、勝利の神としてご自身をお示しになった。そして、イスラエルの民からの信頼を勝ち取ろうとされたのである。ここには、神をなかなか信頼することのできないわたしたち人間に対する憐れみ深い取り扱いがある。参照カテキズムには、十戒の序文の問答を挙げた。過越(すぎこし)のみわざも不可欠であるが、この出来事をとおして、主なる神はイスラエルの民をご自分のものとされたのである。

「神さまの勝利を見よ」

前回、イスラエルの民がエジプトから脱出したところまで学びました。エジプトの全地に悲しみと苦しみの叫び声が起こり、「イスラエルの人たちがこのままエジプトにいると、かえって災いばかり起きて、エジプトは滅びてしまう」と思われるようになって、ファラオは、イスラエルの民がエジプトを去ることを許しました。イスラエルの民は、追い立てられるようにして、エジプトから脱出しました。

さて、そのイスラエルの民は、エジプトから脱出して、アブラハム、ヤコブ、ヨセフのふるさとであるカナンの地を目指します。けれども、主なる神さまは、イスラエルの民をまっすぐにカナンへと導かれるのではありませんでした。シナイ半島の荒れ野の方向に向かうのかと思えば、地中海近くの湖や沼地が広がるところに導かれて、イスラエルの人たちは、自分たちはいったいどこに向かうのだろうかと不安に思ったかもしれません。先祖の住んでいた場所、わたしたちのふるさとであるカナンを目指すのではないのか、けれども、右に行ったり左に行ったり、いったいこの先どこへ向かうのかと思ったでしょう。イスラエルの人たちは、エジプトで奴隷として生きてきましたから、エジプトの外のことはまるで分かりません。モーセはエジプトを離れてミディアンの荒れ野で生活したこともあったので、モーセなら荒れ野の道が分かるはずだと思っていたのですが、本当にモーセに従って行って大丈夫だろうか。そんなふうにも思い始めたかもしれません。

実のところ、イスラエルの民を導いていたのは、モーセではなく、主なる神さまでした。モーセは、主なる神さまが命じられることに従って、イスラエルの民を導いていました。そのことを教えるために、神さまは、昼は雲の柱、夜には火の柱で照らし出して、イスラエルの民を導かれました。そして、神さまは、ご自身の力強い御力を示して、大きな出来事を行ってくださいました。

イスラエルの民が荒れ野に向かう道を右に左にしていた頃、エジプトのファラオは、考えを変えていました。「奴隷としてとても役に立っていたイスラエル人を追い出してしまうとは、いったい何と愚かなことをしてしまったのだろう」。そのとき、イスラエル人が、湖や沼地の広がる葦の海のほうへと向かっているとの連絡が入りました。「道に迷っているのだな」。そう思ったファラオは、エジプトの全軍に号令をかけて、出発させることにしました。「イスラエル人を追いかけて、エジプトに連れ戻せ」。ファラオ自身も、馬にひかせた戦車に乗って、出発しました。

それから数時間して、海に面した場所に宿営していたイスラエルの人たちは、突然、妙な音に気がつきました。遠くから地響きのような音がして、しかも近づいてくるのです。「いったいこの地響

きは何だろう」と思っていると、遠くにエジプトの軍勢が姿を現しました。「たいへんだ！　エジプトの軍隊が追いかけてきたぞ」。イスラエルの宿営は、大騒ぎになりました。

何ということでしょう。エジプトの軍隊が迫って来るというのに、イスラエルの人たちの前には海が広がっています。前は海、後ろはエジプトの軍隊に囲まれて、もはや逃げ場所がありません。イスラエルの人たちはモーセにくってかかりました。「わたしたちを連れ出したのは、この荒れ野で死なせるためですか。こんなかたちで死ぬのならば、エジプトで奴隷のままでいたほうがよかったではないですか」。

けれども、モーセは言いました。「恐れてはならない。今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい」。「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」。モーセは、恐れたり不安になったりする必要はないこと、イスラエルの神さまである主なる神さまがイスラエルのために戦ってくださることを教えて、「静かにしていなさい」と命じました。

主なる神さまは、イスラエルのために、どのように戦ってくださるのでしょうか。そうこうしている間にも、エジプトの軍隊はどんどん迫ってきます。と、突然、イスラエルの民に先立って導いていた雲の柱が、イスラエルの人びととエジプトの軍隊の間をさえぎるかのように、イスラエルの人びとの後ろに動いていきました。真っ黒な黒雲が立ちこめ、ちょうど夜になり、あたりは暗闇に包まれ、稲光も光り始めました。エジプトの軍隊は、動くことができなくされてしまいました。

もう一方で、主なる神に命じられて、モーセは海に向かって手を差し伸べます。すると、主なる神さまが激しい風を送って、海の水が押し返されました。一晩中、強い風が吹き続けて、とうとう海の中に乾いた地面が見えるようになりました。海の水が右と左に壁のようになって分かれたのです。「それっ！今だ！」と言って、イスラエルの人たちはみな、海にできた乾いた道を通って、向こう岸に向かいました。それに気づいて、エジプトの軍隊も、海の中の乾いた道を通って追いかけようとします。けれども、火の柱と雲の柱がエジプト人の目をくらまして、思うように進めません。重たい戦車も、車輪がぬかるみにはまって外れてしまい、なかなか前に進めません。ついに、イスラエルの人たちがすべて向こう岸に渡り終わりました。主なる神さまは、再びモーセに、海に向かって手を差し伸べるよう命じます。モーセが再び海に向かって手を差し伸べると、右と左に分かれて壁のようになっていた水が元の場所に流れ返りました。エジプト軍は、海の水から逃げようとしましたが、一人残らず、水に飲み込まれてしまいました。夜が明ける頃には、海はすっかり元のように穏やかな様子になっていました。

こうして、主なる神さまは、イスラエルの人たちに、ご自身の大いなるみわざを見せてくださいました。エジプトのファラオや、エジプトの神々に勝利する、力強い神さまであることをお示しくださいました。イスラエルの民は、これからいったいどなたに導かれて、荒れ野を旅するのか。それは、この力強い神さまに導かれて旅をするのです。この神さまに信頼して、おまかせして、ついて行けばよいのです。イスラエルの人たちは、この出来事をとおして神さまの力強さを知り、神さまに信頼して従うことへと導かれました。

この神さまが、十字架と復活のイエスさまによって、わたしたちの神さまでもあられます。エジプトに勝利された神さまは、イエスさまの十字架と復活のみわざによって、罪と死に打ち勝つ大きな力をお示しくださいました。神さまはご自身の勝利を示して、わたしたちの神となってくださいました。そして、今も、わたしたちに約束してくださっています。「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」。わたしたちも、この大いなる神さまに信頼して、与えられている人生の旅路を神さまに導かれて歩んでいきましょう。　　（望月　信）

〔今週の暗唱聖句〕　　出エジプト記 14章14節

主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。

〈ねらい〉

前は海、後ろはエジプト軍、という絶体絶命のピンチの中で、主がご自分の民のために先頭に立って戦ってくださるお方であること、海をも分けて民を導かれる力のある、全能の神であることを覚える。

〈展開例〉

神さまは、イスラエルの人々をエジプトから救い出すために、十の災いを起こされました。最後の災いとして、エジプト人のすべての初子が撃たれたとき、災いがイスラエルの家を過ぎ越すようにされました。大きな悲しみがエジプト中を覆ったのを見て、ファラオは、「これ以上イスラエル人がいて災いが続くとエジプトは滅びてしまう」と思い、イスラエル人が出て行くのを許したのです。

イスラエルの人々は、モーセを先頭に、昼は雲の柱、夜は火の柱に導かれながら進んでいきます。しかし、その頃エジプトでは働き人である奴隷がいなくなったのを後悔し、ファラオは「イスラエル人を連れ戻せ」と命じ、大勢の軍隊を仕立て、自ら先頭に立ち出発しました。

イスラエルの人々は荒れ野をさまよいながら進んでいましたが、ちょうどその頃、海辺でキャンプを張っていました。そのうちの誰かが「あの音は何だ？」「地響きのような音がするぞ」と気付き、お互い顔を見合わせていると、「エジプト人だ、エジプトの軍隊が押し寄せてくるぞ」という声が聞こえ、見ると大勢のエジプト軍がどんどん近づいてくるのが見えます。

何ということでしょう、後ろからはエジプト軍が迫ってくるし、目の前は海です。「どうしよう、どうしよう！」。中にはモーセにくってかかる者が大勢いました。「どうして我々をこんなところへ連れてきたのだ」、「こんな荒れ野で死ぬくらいなら、エジプトで奴隷だった方がよかった」。口々に勝手なことを言います。

しかし、モーセは、「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい」、「静かにしていなさい」と命じました。

そうしている間にも、後ろからはエジプトの軍隊がどんどん迫ってきます。すると、突然、イスラエルの民の先頭に立っていた雲の柱が後ろに回り、軍隊との間に割って入りました。軍隊は思うように前に進めません。モーセは主に命じられたように海に向かって手を上げました。するとどうでしょう、激しい東風が吹き、その風に海の水が押し返されて、海が二つに分かれて道ができました。驚いている暇もありません。イスラエルの人々はモーセを先頭に乾いた海を渡り始め、全員が無事に向こう岸にたどり着きました。そして今度は、それを見ていたエジプトの軍隊が渡ろうとしたとき、再びモーセが海に向かって手を上げると、左右に分かれていた海が元のように戻りました。エジプトの軍隊は一人残らず水に飲み込まれ、夜が明けると元の穏やかな海に戻っていました。

海を目の前にしてエジプトの軍隊に追い詰められたとき、誰が海の中を渡って逃げることができるなどと想像したことでしょう。でも、神さまはそれをしてくださったのです。

イスラエルの人々は、軍隊に追い詰められたときモーセに文句を言うのではなく、その先にいらっしゃる神さまに信頼すべきだったのですよね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、神さまにはおできにならないことはありません。どのようなときにも、神さまのお力を信じ、神さまに心から従っていくことができますようお導きください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

9月24日　　葦の海を渡る　　小学科下級

〈ねらい〉

神様の力強い導きを信頼して従う。

〈はじめに〉

秋を迎えました。これからクリスマスに向かって、日曜学校行事の計画・具体的な準備も始まるのでしょうか。私たち分級の奉仕者は、子どもたちを教え、導き、クラスをまとめ、チャレンジを与え、また子どもたちとの信頼ある関係を築きあげることを通して、子どもたち一人一人の信仰の成長のためにこの働きにつかせていただいています。短い時間の中にあっても尊い働きです。

〈御言葉に聴きましょう〉

①エジプトの王様の名前は何ですか。

②イスラエルの人々がみんないなくなった後、ファラオ王様は、どうしましたか。(8節)

③後ろから追いかけて来たエジプト軍を見て、イスラエルの人々はどう思いましたか。(10節)

④怖がったイスラエルの人々に、モーセさんは何と言いましたか。(13、14節)

〈展開例〉

イスラエルの人々は、長いエジプトでの奴隷の生活から抜け出すことができました。モーセさんと一緒に、長い長い旅を続けました。昼は雲の柱、夜は火の柱が、長い行列の先頭にあって、イスラエルの人たちは、道に迷うことなく、前にどんどんと進んで行くことができました。神様がそのように導いて、みんなを守ってくださったのですね。

でも、大変な事が起きたのです。エジプトのファラオ王様の心が変わったのです。神様から何度も恐ろしいわざわいにあい、やっとやっと、奴隷を解放したことも忘れて、また、あの奴隷たちを自分のものにしたくなって、追いかけることにしたのです。たくさんの戦車、馬、兵隊を連れて追いかけてきたのです。

それを知った、イスラエルの人たちは、あまりの恐さのため、これまで、神様がエジプトを連れ出してくださって、守ってくださっている神様のことをすっかり忘れて、モーセさんに文句を言い始めました。ついにイスラエルの人たちの目の前には海、後ろには捕まえに来たエジプトの兵隊たち。もう駄目だ、つかまってしまう、またあの奴隷の苦しい生活に戻されてしまう、と誰もが目の前まっくらな思いになった時、モーセさんは、みんなに「怖がってはいけません、静かにしなさい」と言われました。そして神様はモーセさんに「あなたの杖を高く挙げ、手を海に向かって差し伸べ、海を二つに分けなさい。そして進んで行きなさい」と言われました。モーセさんがその通りにすると、海の水が二つに分かれ、道が出来て、みんなはその道を通って、向こう岸に渡ることができました。後から追ってきたエジプト軍はみんな水の中に沈んでしまいました。イスラエルの人々は、神様に守られて助かったのです。

みんなはどんなにうれしかったでしょう。神様の「力」をどんなに知ることができたでしょう。今まで文句をモーセさんに言ったことをどんなに反省したでしょう。イスラエルの人々は、神様を畏れ、神様とモーセさんを信じました。

〈お祈り〉

神様、私たちのあなたに対する信頼が、ますます豊かに、大きく成長しますよう、お導きください。アーメン。

9月24日　　葦の海を渡る　　小学科上級

〈ねらい〉

絶体絶命の危機にも、神さまは共におられることを学ぶ。それがたとえ重大事件のときだとしても、「主が私のために戦われるのだ、心静かに主を待ち望もう」と、みことばによる励ましによって主により頼む者となりたい。

〈ワーク〉

【5節】 ファラオはイスラエル人たちが出かけた後どう思っていましたか？

A：イヤなやつらがいなくなって嬉しい

B：仕事をする人がいなくなって困った

【8節】 そこでファラオはどうしたのでしょう？

A：追いかけた

B：自分が働くことにした

【9～12節】とうとうエジプト軍はイスラエルの人々の近くまで追いついてしまいました。イスラエルの人たちはどうしましたか？

A：迎えに来てくれたので帰ろうとした

B：恐ろしくなって大騒ぎになった

【14節】 モーセはイスラエルの民に何と言いましたか？

「主が□□□□□のために戦われる。あなたたちは□□□していなさい。」

……それは、恐れたり不安になったりする必要がないからなんだよ。だって、神さまが戦ってくださるから。神さまは今も私たちに同じように約束してくださってるんだよ。

【21～22節】 イスラエルの民たちの後ろにはエジプト軍がいて、目の前には□があったので、彼らは前に進むことができなくなりました。でも、モーセが手を海に向かって差し伸べるとどうなりましたか？

(　　)

【23～28節】 追いかけてきたエジプト軍はどうなりましたか？

(　　)

〈祈り〉

私たちを造ってくださった神さま。あなたの尊いお名前を賛美します。私たちは困ったことがあると、誰かに文句を言いたくなったり誰かのせいにしたくなったり、ああすればよかったこうすればよかったと、大騒ぎをしてしまいます。でも神さまは「静かにしていなさい」とおっしゃいます。私たちのために戦ってくださる、という神さまからの約束を私も忘れないようにさせてください。あなたにおゆだねします。

〈答え（例）〉

【5節】B

【8節】A

【9～12節】B

【14節】

「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」

【21～22節】

海（海は乾いた地に変わり、水は分かれ、水は彼らの右と左に壁のようになった）

【23～28節】

死んでしまった、海に飲み込まれた、など。

9月24日　葦の海を渡る　中学科

〈ねらい〉

神様は、力強い勝利によって御自身を信じさせてくださる方であることに感謝する。

〈展開例〉

①先週皆は、神様は皆に御自分を信じさせてくださる方であることを学んだ。今週も、神様とはみんなの中に、御自分を信じる心をつくり上げてくださる方であることを学びたい。「また、同じ話か！」なんて思うかもしれないが、これは何回繰り返してでも皆に覚えてもらいたいこと。先生が思うんじゃない。神様が皆にそう思っておられる。大切なことだから、神様は何度も何度も「私はお前の中に信じる心をつくるのだ」ということを聖書から語られる。

②今日の話で、まず注目したいのはイスラエルの人の心。先週の話で、イスラエルの人達はエジプトに起こされる災害から何度も守られたことを聞いた。彼らの心は「あぁ、神様は私達を守ってくださる方だなぁ」こんな信頼が生まれたはず。でも、今日の箇所でエジプト軍が自分達に向かって来たとき彼らの心は神様を頼ることを見失ってしまう。

Q．皆も似たようなところがないだろうか？「神様は自分を守ってくれているような気がするなぁ」こんなことを感じながらも、この先が不安になるような問題、神様に従うことが難しく思える事態が起こると「神様を信じてるのに、なんでこんな目にあうんだ！　こんなんだったら教会になんか行かないほうがまし。神様を信じない人達と同じ毎日のほうがましだ！」こんな風に思うことがあるかもしれない。また、人によっては困ったことがあっても神様に頼ってお祈りするということが、頭に浮かびすらしない人もいることだろう。イスラエルの人達はまさにそのような心境だった。

③神様からイスラエルの人を奪い返そうとするエジプト軍。神様に不信感をもって、神様の力を軽んじるエジプトへ戻ろうとするイスラエル人。その両方に、この世界を支配している御自分の圧倒的な力を示された。神様がここで奮われた力とは、御自分の愛する民に押し迫る脅威を滅ぼす力。また、御自分の愛する民を安全なところへと導く力だった。神様はエジプトという本当の神様を知らない人々達からイスラエルの人々を勝ち取られた。イスラエルはこれからエジプトの造りモノの神ではなく、生きていて自分達のために戦かってくださる本当の神様と一緒に生きていく。神様はイスラエルの人々の新しい人生の始まりに「私と一緒に生きていくことを不安がる必要はない！　お前達を幸せな日々へと導く私を疑う必要はない！　愛するお前達を私から奪える者などいないのだから！　私はお前達を嫌な目に合わせる者ではない！　嫌な思いから救う者である」このことを示された。

④今日の話で、「エジプト軍」とはどんな勢力だっただろう？　それは「神様から神様の民を奪おうとする勢力」である。聖書は、神様と人を引き離す力を「罪」と呼ぶ。皆もこの罪の力にふらつくことがあると思う。しかし、皆が教会にきて礼拝している神様、そしてその御子イエス様は、愛する者達を罪の勢力から勝ち取ってくださる御方である。皆の一週間が、神様の勝利が広がることを味わうときなるように祈りたい。

〈祈り〉

私達のために罪の勢力と戦い勝利されるあなたのすばらしさに感謝します。アーメン。

2017年10〜12月カリキュラム（第67号）

―救済史に基づく一年サイクルカリキュラムの一年目―

月　日 教会暦・行事	主　　題	聖書箇所	暗唱聖句
	単元の目標		
10月1日	天からのパン	出エジプト16章	申命記8：3
	神がご自身の民を養われる。神に養われる幸い、また七日目の祝福を知ろう		
10月8日	十戒を授かる	出エジプト 19：1－20：21	詩編119：105
	神は愛と恵みの言葉として十戒を与えられた。律法を持つ幸いを味わおう		
10月15日	金の子牛の事件	出エジプト32章	出エジプト20：3, 4（前半）
	神は偶像礼拝をしりぞけられる。神に喜ばれる礼拝をささげよう		
10月22日	幕屋の建設	出エジプト40章	出エジプト40：16
	神礼拝を中心として共同体が形成される。栄光に満たされる礼拝をささげよう		
10月29日	荒野の放浪	民数記13－14章	民数記14：9（後半）
	人を恐れてしり込みする者を主はさばかれる。主なる神をこそ畏れよう		
11月5日	ヨルダン川を渡る	ヨシュア3章	ヘブライ11：1
	主が共にいてくださることがわたしたちの勇気である。試練と向かい合おう		
11月12日	約束の地カナンへ	ヨシュア6章	エフェソ6：10（後半）
	主が先立ち、たたかってくださる。勇気をもって立ち向かおう		
11月19日	ギデオンの召命	士師6章	士師6：16
	偶像と戦うために召し出されたギデオン。わたしたちを召し出す神に仕えよう		
11月26日	ギデオンの精鋭	士師記7章	ルカ12：32
	数ではなく人間の力でもない。神が勝利を与えてくださることを知ろう		
12月3日	ささげられるサムソン	士師13章	士師13：7
	神にささげられたサムソン。わたしたちも神にささげられた者として歩もう		
12月10日	サムソンの祈り	士師16章	士師15：18
	神に立ち帰って祈るサムソンを神が用いられた。わたしたちも祈って仕えよう		
12月17日	待降節・捕囚からの解放	イザヤ40：1－11	イザヤ40：1
	神ご自身が民を慰めてくださる。御子イエス・キリストの到来に備えよう		
12月24日 クリスマス	主イエスの降誕	ルカ2：8－21	ルカ2：10（後半）
	羊飼いに告げられた救い。キリストにおいて成就した神との平和を喜ぼう		
12月31日	サムエルの召命	サムエル上3章	サムエル上3：10
	名前を呼ぶ神に答えるサムエル。わたしたちも神の呼びかけに答えて歩もう。		

2017年度 年間カリキュラム（第65～68号）

―救済史に基づく一年サイクル―

（2017年4月～2018年3月）

	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2017年	4月2日		創造主なる神	創世記1:1～5
65号	4月9日	受難週	十字架のキリスト	マタイ27:45～56
	4月16日	復活祭	復活のキリスト	マタイ28:1～10
	4月23日		被造物の祝福	創世記1:6～25
	4月30日		神の栄光の舞台	創世記1:31～2:3
	5月7日		人間の創造と人生の目的	創世記1:26～31
	5月14日		男と女の創造	創世記2:18～25
	5月21日		罪と堕落	創世記3:1～13
	5月28日		救いの約束（原福音）	創世記3:14～24
	6月4日	聖霊降臨祭	聖霊降臨と教会	ヨハネ20:19～23
	6月11日		カインとアベル	創世記4:1～16
	6月18日		ノアの箱舟	創世記6～7章
	6月25日		ノアの契約	創世記8:1～9:17
66号	7月2日		バベルの塔	創世記11:1～9
	7月9日		アブラハムの召命	創世記12:1～9
	7月16日		アブラハムへの約束	創世記15:1～21
	7月23日		イサクの誕生	創世記21:1～8
	7月30日		イサクを献げる	創世記22:1～19
	8月6日		ヤコブとエサウ	創世記27:1～40
	8月13日	平和主日	売られたヨセフ	創世記37:1～36
	8月20日		総理大臣になったヨセフ	創世記41:1～44
	8月27日		摂理の主の勝利	創世記50:15～21
	9月3日		モーセの誕生	出エジプト1:22～2:10
	9月10日		モーセの召命	出エジプト3:1～22
	9月17日		十の災いと過ぎ越し	出エジプト7:8～24
	9月24日		葦の海を渡る	出エジプト14章

年・号	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
67号	10月1日		天からのパン	出エジプト16章
	10月8日		十戒を授かる	出エジプト19:1〜20:21
	10月15日		金の子牛の事件	出エジプト32章
	10月22日		幕屋の建設	出エジプト40章
	10月29日		荒れ野の放浪	民数記13〜14章
	11月5日		ヨルダン川を渡る	ヨシュア3章
	11月12日		約束の地カナンへ	ヨシュア6章
	11月19日		ギデオンの召命	士師記6章
	11月26日		ギデオンの精鋭	士師記7章
	12月3日		ささげられるサムソン	士師記13章
	12月10日		サムソンの祈り	士師記16章
	12月17日	アドベント	待降節・捕囚からの解放	イザヤ40:1〜11
	12月24日	降誕祭	降誕祭・主イエスの降誕	ルカ2:8〜21
	12月31日		サムエルの召命	サムエル上3章
2018年	1月7日		サウルの召命	サムエル上9〜10章
68号	1月14日		ダビデの召命	サムエル上16章
	1月21日		ダビデへの契約	サムエル下7章
	1月28日		ソロモンの知恵	列王記上3:4〜15
	2月4日		ソロモンの偶像礼拝	列王記上11:1〜13
	2月11日		バアルと対決するエリヤ	列王記上18:16〜45
	2月18日		バビロン捕囚	歴代誌下36:11〜23
	2月25日		回復の約束	イザヤ35章
	3月4日		解放の告知	イザヤ61:1〜4
	3月11日		新しい契約	エレミヤ31:31〜34
	3月18日		主の日が来る	マラキ3:19〜24
	3月25日	受難週	十字架のキリスト	ヨハネ19:17〜30

子どもと親のカテキズム

神さまと共に歩む道

日本キリスト改革派教会大会教育委員会

『子どもと親のカテキズム』の目指すもの

～「あとがき」より～

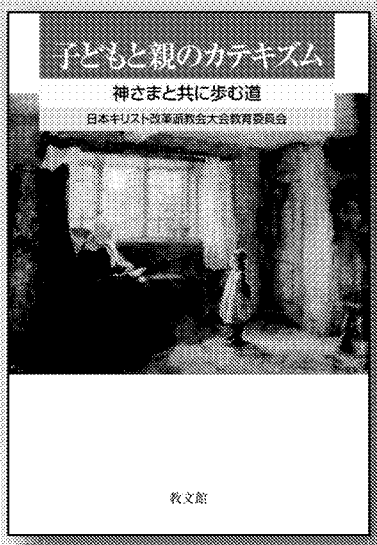
このカテキズムは、契約の子どもたちの信仰継承の前進、地域の子ども伝道の進展、成人求道者の洗礼教育、現代を生きるキリスト者の信仰の確立を願って、作成されました。

どうか父なる神が、ご自分の子どもたちをこのカテキズムを用いて主イエス・キリストの福音の真理の内に養ってくださり、聖霊の交わりのうちに親子の信仰の対話を祝福して信仰を告白する喜びに導き、教会と世界に感謝をもって仕える民として成長させてくださいますように。

カテキズム作成のために多大な労苦を払われた前大会教育委員会小委員会の牧田吉和委員、三川栄二委員、相馬伸郎委員に感謝しつつ、今ここに『子どもと親のカテキズム』をお届けします。

2014年10月

日本キリスト改革派教会大会教育委員会



2014年10月15日発売

四六判・並製・64頁

ISBN978-4-7642-6454-0

販売価格400円（税込）

書店での販売価格は540円（税込）ですが、大会教育委員会を通じての販売価格は400円（税込）です。

申込先　E-mail　shintoko_ch_pastor@yahoo.co.jp　長田詠喜

振込先　01620-8-39213　長田詠喜

※『子どもカテキズム』とは申込先が異なりますので、ご注意ください。

教文館　〒104-0061　東京都中央区銀座4-5-1　TEL03-3561-5549　FAX03-5250-5107
HPをご利用ください。http://www.kyobunkwan.co.jp/publishing/　【呈・図書目録】

大会教育委員会

「教会学校教案誌」

継続発行のための

自由募金のお願い

いつも弊誌のためにお祈りとご購読をもってお支え下さいます事を、心から感謝するとともに御礼を申しあげます。

第６２号に引き続き第６３号の発行も大幅に遅れ、読者の皆様には多大なるご迷惑をおかけいたしました事、深くお詫び申し上げます。編集実務責任者の突然の離職によるものとはいえ、私どもの責任を痛切に覚えさせられております。

さらに、中部中会から大会教育委員会への移管後、大会の財務状況の厳しさに鑑み、また創刊時の志に基づき、できる限り有志の皆様の「募金」という形でのご支援を願ってまいりました。しかしながら、現状は（裏ページご参照）、極めて厳しい状況に陥っております。

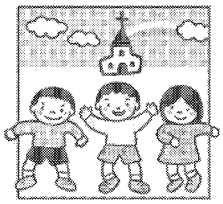
第７０回定期大会で「５０万円」の募金願いは満場一致で受け入れて頂きました。**教会**また**個人**としてご協力を伏してお願い致します。　*Soli Deo Gloria!*

※ 購読申し込みは、辻　幸宏（大垣伝道所：yukihiro.tsuji@nifty.com
〒503-0996 岐阜県大垣市島町 283　℡/Fax:0584-91-3538　）
お問い合わせは、相馬伸郎（iwanoue@me.ccnw.ne.jp）まで。

目標金額　５０万円

送 金 先　郵便振替　伊藤治郎

００８９０－２－１４８１８３



※振替通信欄に、「自由募金」とご明記くださいませ。

〈執筆者・編集者よりひとこと〉

●本年度の教案誌は、過去に掲載した聖書研究・説教展開例を再掲させていただいていますのでご了承ください。尚、本号では「分級展開例」も再掲分になります。

〈あとがき〉

●編集委員の再編に伴い、作業の引き継ぎに苦労しています。委員会としてはこの教案誌を継続させたい旨で一致していますので、円滑な活動が出来るようどうぞお祈りください。

●「教会学校訪問」では神港教会聖書学校をご紹介いただきました。伝統のある充実した取り組みがこれからも祝福されますようお祈り致します。

●連載物は執筆者の関係で掲載できる時に掲載するようにしています。今回は長老方の投稿が多い号となりました。長い献身的なご奉仕の経験から知恵を分かち合っていただけるのは幸いです。

（牧野信成）

●巻頭説教「来て、見なさい」を読んで興奮しています。弊誌発刊の高い目標は「子ども伝道」に資することにあり、その意味でも、大変教えられ励まされました。また、この説教は、単に子どもたちだけの伝道ではなく、まさしく伝道の本質が記されています。生きておられる主イエス・キリストとの出会いへと招き入れるのが伝道です。そうであればその究極の場所は、教会の主日礼拝式に他ならないはずです。子どもの礼拝もまた、まさに聖霊によって主イエス・キリストのご臨在なさる場です。そこに教師たち「二人、三人が」いて、神の言葉が朗読され説教されます。その場に、子どもたちを誘う努力を重ねて参りたいと思います。

●子ども伝道……。今、どの教会伝道所も、主日に地域の子どもたちの賑やかな声が溢れる教会は残念ながら例外でしょう。多治見教会の宮ノ原長老のご寄稿に心燃やされます。子どもたちが集まらなければやめる。これに対して、さまざまな意見があるかもしれません。しかし、同教会の教師方は、この議論に真剣に向き合われました。そして、継続を決議し、実践されているとのこと。子どもたちがひとりもいない説教奉仕を担った経験を一度ならずなさった教師もおられるはずです。この世の価値基準では費用対効果が問われます。しかし、教会の中でその基準が影響を及ぼすなら、教会は健やかさを失っているのではないでしょうか。「あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。月日がたってから、それを見いだすだろう」（コヘレト11:1）。

●諸教会、伝道所の紹介がほぼ一巡しました。教会学校紹介で神港教会に登場いただくのは二度目です。創刊号から弊誌を用いて下さっていることにとどまらず、分級展開例のご執筆など、まさに困った時に頼らせていただく教会の一つです。

●「まえがき」にありますように、編集部は体制を整え直す途上にあります。その意味でも、今号の分級展開例は再録となりました。心苦しく思います。どうぞ、奉仕者が起こされ、すべてがふさわしく導かれますように引き続きお祈り下さい。

●経済の面では、皆さまの尊い献金によって無事、発行が許されました。心から感謝すると共に今後とも宜しくお願い致します。

●編集部は、常時、読者の皆様からのご投稿をお待ちしています。子どもたちの声、とりわけ信仰告白者や若い仲間の洗礼入会の証しをお分かち下さい。教師の証し、ご意見等も募集しています。地域の子どもたちのための様々な取り組みは、日本キリスト改革派教会、全国津々浦々で展開されています。チラシ一つでもかまいません。ぜひ、お分かち下さい。

（相馬伸郎）

◆教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡下さい。

大垣伝道所　辻幸宏
〒503-0996 大垣市島町283
Tel/Fax. 0584-91-3538
E-mail:yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき
　吉田　崇（坂出飯山教会牧師）
巻頭説教
　小澤寿輔（高知教会牧師）
教会学校訪問
　高島　潤（神港教会教会長老）
信徒生活40年を振り返って
　宮之原弘（多治見教会長老）
聖書深読
　伊藤治郎（四日市教会長老）
神様とのつながり
　保田広輝（板宿教会信徒）

聖書黙想・説教展開例
　坂井孝宏　（勝田台教会牧師）
　中根汎信　（引退教師）
　木下裕也　（名古屋教会牧師）
　潮田　祐　（盛岡伝道所宣教教師）
　二宮　創　（太田伝道所宣教教師）
　久保田証一（尾張旭伝道所宣教教師）
　辻　幸宏　（大垣伝道所宣教教師）
　後藤公子　（中津川教会信徒）
　長谷川潤　（四日市教会牧師）
　牧野信成　（西神教会牧師）
　望月　信　（鈴蘭台教会牧師）

分級展開例
　家山華子　（教団三木教会牧師）
　草野　誠　（恵那教会牧師）
　芦田順子　（坂戸教会所属新潟伝道所信徒）
　坂井孝宏　（勝田台教会牧師）
　山中恵一　（神港教会牧師）
　神港教会BS・那加教会CS
イラスト作画
　表紙　中村未生（春日井教会信徒・IBUKI）
　　高橋乃亜（湘南恩寵教会信徒・IBUKI）
　本文　岡野美佳（青葉台キリスト教会信徒）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長）	名古屋岩の上教会牧師・大会教育委員会
吉田　崇	坂出飯山教会牧師・大会教育委員会
牧野信成	西神教会牧師・大会教育委員会
宮崎契一	奈良伝道所宣教教師・大会教育委員会
長田詠喜	新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会
辻　幸宏	大垣伝道所協力牧師
伊藤治郎	四日市教会長老

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会『教会学校教案誌』
2017年7・8・9月号（季刊）
第66号
2017年6月3日発行

発行　日本キリスト改革派教会　大会教育委員会
発行所　日本キリスト改革派教会　大会教育委員会
名古屋岩の上教会　牧師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座　00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷　株式会社あるむ
頒価　900円（本体価格）

Reformed Church in Japan
Board of Education

２０１７年7～9月号（２０１７年5月２５日発行）　発行：日本キリスト改革派　大会教育委員会